

# スリランカにおける立正佼成会の布教展開と 信仰受容の諸相

渡 辺 雅 子

## はじめに

立正佼成会(以下、佼成会)は、1938年に庭野日敬(開祖)と長沼妙佼(脇祖)によって霊友会から分派して設立された法華系の新宗教教団である。現在の会長は日敬の長男の庭野日鑽で、次代会長は日鑽の長女の庭野光祥となっている。久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊を本尊とする。佼成会は法華三部経を所与の經典とし、夫夫妻方の双系の先祖供養と心の切り替えによる人格完成を目的とする。基本信行として、①經典読誦による供養、②導き(布教)・手どり(会員の育成)③法座、④法の習学がある。平成28(2016)年度版『宗教年鑑』によると国内の公称信者数は270万6319人である。

海外には20カ国に2センター、65拠点あるが、そのうち教会が設置されているのは、アメリカのハワイ、ロサンゼルス、オクラホマ、サンフランシスコ、ニューヨークの各教会、ブラジル教会、台湾の台北教会と台南教会、韓国教会、タイのバンコク教会、バングラデシュ教会、スリランカ教会である。

佼成会の海外布教は、アメリカ、ブラジル等海外に居住する日本人、日系人から始まったが、近年もっとも信者数の上昇率が高いのが、南アジア(特にバングラデシュ)である。筆者は、南アジアではバングラデシュ、インド、スリランカを調査で訪問したが、その状況は異なっている。バングラデシュはイスラム教徒が多数を占める国で、そこに人口の0.6%の仏教徒がいる。バングラデシュの宗教的マイノリティである仏教徒の中に佼成会の伸長は著しい。イン

ドは仏教発祥の地であるが、ヒンドゥ教徒が多数を占める国で、仏教徒は1%に満たない。バングラデシュから移住したバルア仏教徒と、ヒンドゥ教の下位カーストの人々が仏教に改宗した新仏教徒という宗教的マイノリティがメンバーになっている(ヒンドゥ教徒も少数いる)。バングラデシュやインドの場合、仏教徒がマイノリティであるのに対し、スリランカの場合は仏教徒が人口の7割を占め、マジョリティである。このように、その国の主要な宗教がイスラム教やヒンドゥ教である国と異なり、スリランカは上座仏教(上座部仏教)の中心的な国である。東南アジアの上座仏教の源流であり、他国から学びに来るほど強固な上座仏教の地盤がある。出家仏教の上座仏教が強い地域にあって、在家仏教で大乘仏教である佼成会の布教には、南アジアの他国とは異なる困難が伴っている。

そこで、本稿では、まず第1章で、スリランカの位置、歴史など、基礎的な知識を紹介する。ついで、スリランカの上座仏教の特徴について概観する。第2章では、佼成会のスリランカ布教の歴史について、5つに時期区分して各時期の重要な出来事についてみる。また、地域的展開についても述べる。第3章では、スリランカの佼成会が行っている日常的な宗教活動、社会的活動としての家庭教育講演会、一食平和基金いちじきによる支援活動(初等教育支援と緊急支援)、無料日本語クラスについて言及する。さらに上座仏教が強い国にあって、文化的に違和感を減じ、寺院や僧侶と摩擦を生じさせないように、また社会的認知を得られるように、どのように工夫しているのかについても検討する。第4章ではこれまで行った個別の聞き取り調査から、コロombo、ポロンナルワ、ハバラナ、ゴールの各地域の事例をとりあげる。入会の経緯や信仰の受容のあり方は個人にもよるが、地域差もある。地域や個人によって異なる信仰の受容の諸相について、事例からみていく。

なお、スリランカ教会の会員数は、2017年6月時点で公称2072世帯である。

## 1 スリランカの歴史と宗教

本章では、スリランカへの佼成会の布教や信者(会員)の事例を考察するにあたって押さえておかなければならない、スリランカの歴史と宗教についてみる。

### (1) スリランカの歴史

スリランカは、インド亜大陸の先にぶらさがるようにして浮かぶ小さな島国で、その面積は北海道の5分の4ほどの大きさである。スリランカとは、シンハラ語で「光輝く島」の意味である。

16世紀初頭、ポルトガルは肉桂(シナモン)を集荷するための商館をコロomboに開き、徐々に沿岸地方を領有・支配するようになった。17世紀に入ると肉桂貿易の独占権をめぐって、ポルトガルとオランダの戦いがはじまり、1658年にオランダ東インド会社がポルトガル領を占有した。その時には島民の権力はキャンディに都をおくキャンディ王国のみになり、内陸部に封じ込められた。1796年にイギリス東インド会社がオランダ領を接收し、1815年にはキャンディ王国の滅亡により、イギリスは全島を掌握し、植民地とした。イギリスは紅茶やゴムのプランテーション農業を推進した<sup>(1)</sup>。

1948年にイギリス連邦の自治領として独立したが、その時の国名はセイロンである。1972年にスリランカ共和国として正式に独立し、1978年に現在のスリランカ民主社会主義共和国へと国名を改めた。

スリランカは、約2000万人の人が住む多民族国家である。民族分類は宗教と言語、さらに来歴によるもので分類される。全人口の75%を占めるのがシンハラ人でシンハラ語を話し、多くが仏教徒である。これにつぐのがタミル人でドラヴィダ語系のタミル語を話し、ヒンドゥ教徒が多い。ムーア人はイスラム教徒でタミル語を話す人が多い。

イギリスの植民地時代はタミル人が優遇されていたが、独立後の1956年の総

選挙で勝利した内閣では、シンハラ語を公用語化し、行政職、警察官、軍人などの主要分野はシンハラ人がほぼ独占するようになった。1972年の憲法改正により、スリランカは自治領から共和国へ政体をあらためた。憲法で仏教に特別な地位を与え、仏教を保護し育成することが国家の義務であるとして準国教的な位置を与えた。タミル人はこれに反発し、分派独立運動がおこった。穏健派は議会をとおして、急進的な若年層は武力によって独立をめざした。タミル人の民族運動は武装闘争にエスカレートし、過激派組織「タミル・イーラム解放の虎(LTTE)」が結成され、政府軍・警察とタミル武装勢力との戦闘は激化した。1983年には反タミル暴動が生じ、都市のタミル系商店が襲撃、強奪、放火の対象になり、コロombo市だけでも10万人近くの難民が収容されるという事態になった。内戦と呼ばれる状況の始まりである。シンハラ人側においては、社会主義が行き詰まり、資本主義的な開放経済が推進される中、都市部では好景気をもたらしたが、貧富の差を拡大させた。「人民解放戦線(JVP)」は、とくに不遇な青年たちをひきつけた。北部では政府軍とタミル武装勢力との戦闘が激化し、1987年にはインド政府が介入するに至る。インド軍の駐留が決まると、シンハラ人の間では反発が強まり、騒乱状態になり、人民解放戦線はこの機に乗じて武力革命闘争に乗り出していく。政府側と人民解放戦線との戦いは熾烈を極め、一時は「昼の政府」「夜の政府(人民解放戦線)」「北の政府(LTTE)」といわれていたほどである。やがて政府が暗殺部隊を組織し、幹部の多くを殺害し、運動は収束する。1987～1989年にかけての2年半で、双方の犠牲者は4万人にのぼるといふ。特に1988年12月～1989年12月のあいだは、毎日100人以上の死者が出ていた。1990年に入ってようやく収まった。これはシンハラ・ナショナリズム内部での矛盾であり、仏教徒同士の殺し合いであった。人民解放戦線と政府側の殺し合いは、スリランカ中を恐怖の渦に巻き込んでしまった。混乱に乗じて暴力や犯罪も増加した。仏教徒同士の殺し合いによって、殺生を禁じる仏教モラルは地に落ちてしまった。また、LTTEと政府の間の内戦は、1990

年にインド軍が撤退後も続き、2002年2月にノルウェー、イギリス、フランスなどを中心とする民族抗争の平和的解決への国際的協力は、消極的ではあるもののインド政府の支持も得てすすめられ、2002年2月に無期限停戦が合意された。2009年5月に政府軍がLTTEを制圧し、内戦が終結した。

その後に起きたスリランカにとって大きな出来事は津波による被害である。インド洋大津波は2004年12月26日に発生したスマトラ島沖地震によるもので、海岸部の全土で3万5000人以上の死者・行方不明者を出し、全壊家屋は8万世帯にのぼり、漁業と観光産業は大打撃を受けた。この時期以降、海外からNGOが多く入ってきた。

なお、スリランカにとっての日本の位置は、かつては第1の貿易相手国であった時もあるが、日本からの輸入(自動車などの工業製品)が輸出(紅茶、宝石、エビなどの一次産品)を上回り、貿易赤字が長期にわたり継続している。しかしながら、日本からの経済援助も多く、1990年代にはスリランカにおける二国間援助総額の約5割を占めた。経済協力の内容は多岐にわたるが、大規模病院、製薬工場などの医療部門の比重が高く、そのほか発電所、空港、港湾建設関係に偏っている。スリランカにとって日本は中国につぐ第2位の経済援助国である(1986～2008年の間は、日本が最大の援助国)。2004年12月のスマトラ島沖地震によるインド洋大津波では緊急支援として80億円の無償資金協力をしたほか、中長期的支援として約100億円の円借款も供与している。2016年時点において、日本はスリランカにとって第3位の輸入相手国、第10位の輸出相手国となっている。

それでは、次にスリランカの仏教について目を転じよう。

## (2) スリランカの上座仏教

スリランカでは先述のように、人口の70%が仏教徒であるが、仏教といっても日本の仏教とは異なる。日本の仏教は大乗仏教だが、スリランカの仏教は上

座仏教である。大乘仏教に対して小乗仏教というように呼ばれていたが、現在では、「小乗(小さな乗り物)」という言葉は、大乘仏教がつけた差別語であるとして、上座仏教という用語が使われている。逆にスリランカでは、大乘仏教に対してはネガティブな反応がある。

スリランカの仏教は紀元前3世紀にインドから伝来したとされ、パーリ語でいうテラワダ仏教である。これは「長老(テラ)の言説(ワダ)」の意味で、教団の長老によって継承されてきた正統的な教義を維持することを意味し、漢訳では「上座部」と称される<sup>(2)</sup>。仏陀の教えを比較的厳密に守ることを主張した長老派の意見を継承したものである。パーリ語聖典に記された教えを基礎とする一派として形成されたのが上座仏教で、上座仏教の場合、国が異なっても、パーリ語で記された律蔵、戒蔵、経蔵からなる三蔵経(トリ・ピタカ)を根本経典としている。現存の上座仏教はすべてスリランカの大寺派系統の教団につながるとされ、東南アジアの上座仏教の源流になっている。

また、ヒンドゥ教の影響もあり、仏教と習合して深く入り込んでいる。実際、寺院の中にヒンドゥ教の廟があるところもある。

以下では、スリランカの仏教の特質、および本稿の中で言及されているものに焦点をあてて説明しておきたい。

日本の仏教と比較すると、違いとして次の点が指摘できる。第一に、上座仏教では出家と在家の区別が明確である。僧侶は独身であることが前提で、職業をもつことはない。第二に、日本でみられるような檀家制度はない。地域社会の中心的な共有施設として、地域住民が重点的に支援する寺はあるが、どこを行きつけの寺にするかは個人の自由であり、個人の信仰である。第三に、墓の重要性は低く、墓参りや先祖崇拜の意識はない。葬式は盛大でも、生まれ変わりが信じられているため、死後7日目、3カ月目、1年目等に行う追善供養の色彩をもつマタカ・ダーナ以後はさほど大規模ではない。大半が土葬で、死後間もなく土葬するが、墓は特につくらず、墓参りの慣行もない。輪廻が信じられ

ているので、別の存在に生まれ変わるとされている。ただし、高僧の場合は立派な墓標を建てて記念の印を残すことが多い。人々にとって輪廻はのがれられないが、功德積みによって来世でのより良き再生を望むという教義の展開がある。また先祖供養という概念はないが、亡くなった人に功德を転送することによって死霊の苦しみを軽減するという考え方はある。

上座仏教文化圏では、前述のように、出家と在家の区別が明確である。出家した僧侶は戒律を遵守して修行することで、業や輪廻を断ち切り解脱する、あるいは涅槃に到達することを目指す<sup>(3)</sup>。他方、在家の人々は輪廻転生を信じているので、僧侶の集団であるサンガに帰依し、寺や僧侶にさまざまなものを布施(ダーナ)して寄進の行いを積み重ねて功德を積み、来世でのより良き再生を願う。僧侶たちは、これに対して教えを説く(法施)ことで恩恵を施す。このように上座仏教は、解脱を指向する僧侶を中心とする出家仏教、寺院仏教であり、在家信者が非生産的なサンガを物質的側面からささえるという構造になっている。

在家も五戒(不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不飲酒)を保ち、定期的に寺院に詣で、礼拝、瞑想、聴聞、仏教行事を行い、布施をする。また、出産から結婚・病気・死・法事・新築・旅行・年中行事等の様々な機会にピリット儀礼(後述)を通して僧侶に読経をしてもらい、それに対して布施をする。

功德を積むために行うべきこととして、仏教を支える行い、布施、寺院での奉仕、瞑想などがあるが、僧侶は、食事を調理することが禁じられているため、僧侶の食事の布施は民衆にとって功德を積む機会として意識されている。当番制で寺院に食事を持参する場合と、家に最低5人以上の僧侶を招く場合に分けられる。あらかじめ1か月分の食事当番を決めておき、村人が順番に食事をつくる。食事は1日に2回、朝と昼だけで、12時以降は戒律により固形物はとれない。とりわけ、ウェアスと言われる雨安居、スリランカ暦のエサラ月(7~8月)の満月からピナラ月(9~10月)の満月までの3か月間は、僧侶は寺院を離れず修行するのが原則で、雨安居の期間中、僧侶の食事はすべて信者が提供することになっ

スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相



写真1 コロンボの上座仏教の寺の仏塔



写真4 お参りをする人々



写真2 菩提樹(柵で囲まれた中にある)のところでボーディ・プージャーをする人



写真5 経典を読む人々



写真3 仏殿でのお参り



写真6 供物を参拝者に配る人

(2016年9月, 筆者撮影)

ている。そして、毎夜、寺ではブッダ・プージャー(仏陀供養)がある。ブッダ・プージャーでは、仏陀に花と水を供え、(仏法僧への)三帰依文と五戒を唱えて、その後に僧侶の説教がある。説法以外はパーリ語を使用する。

人々にとって仏教の教義を学習する機会は、寺院の僧侶が布施や儀礼の時に説き聞かせる説法によるものが大半で、教義を比喻や逸話を引きながら説明し、仏陀の前世の話であるジャータカ物語が使われることも多い。また、教義は寺院で開催される日曜学校や学校教育を通じて伝達されることもある。市場で売られている小冊子、仏教の儀礼紹介や仏陀の生涯の記述によって学ぶこともある。

強調されるのは、来世での救済であり、究極的には業と輪廻を断ち切る涅槃への到達が望まれ、これによって獲得した生死や善悪を超越した境地こそ究極の救いであるという。この状況は束縛から離脱した状態であるので、解脱ともいう。この世で行った善悪の行為に応じて来世での状況が決定されるという見方が浸透している。倫理的行為によって功德を積み重ねることが最上の道とされ、かくして僧侶への布施や寺院への寄進、日常生活の中でも戒律を守り、行いを正すことが求められる。

寺院の毎月の行事としてはポヤと呼ばれる、ひと月に4回の新月、上弦、満月、下弦の日に、一般の敬虔な信者は八戒<sup>(4)</sup>を守り、白衣を着て寺院に参詣して、瞑想、読経などで敬虔に1日を過ごす。特に、満月の日は厳格であり、独立後に国民の祝日に指定された。なお、本稿の中で、ポヤの日(ポヤデー)というのは満月の日のことを指す。

寺院には仏殿、仏塔、菩提樹の三つの施設がある。礼拝は仏塔、菩提樹、仏殿の順番に行う。仏殿には毎日、寺院の僧侶と村人がやってきて、花と水と供物をそなえる。雨安居の間は、毎晩、ブッダ・プージャーが行われる。

仏陀がインドのブッダガヤの菩提樹のもとの、瞑想して悟りを開いたとされる故事にちなみ、菩提樹は、聖樹として崇められ、霊的存在が宿ると信じられ、生命力をもつものとして畏怖される。雨乞い、豊作祈願、病気治しなど、多様

スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相

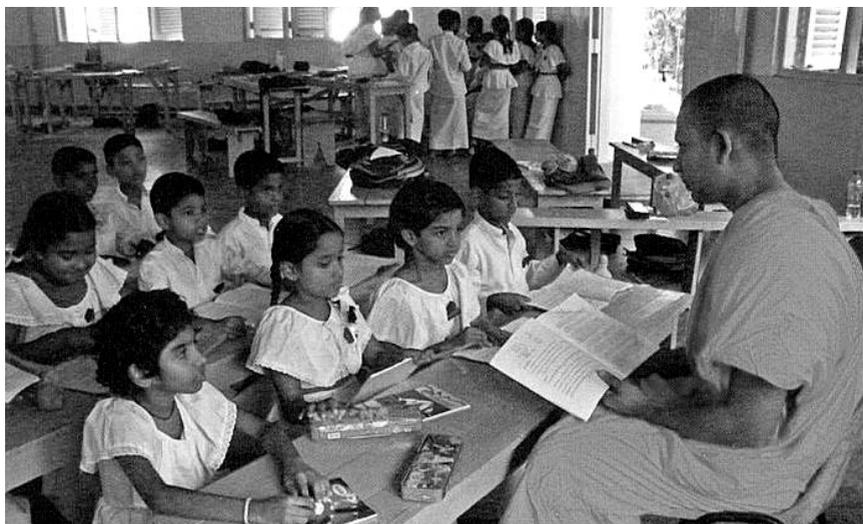


写真7 寺の日曜学校で学ぶ子どもたち



写真8 寺の日曜学校で礼拝する子どもたち

(ルクランチ・ニサンサラ・バリバナ氏提供)

な願掛けをする場所にもなる。最近では、ボーディ・プージャーという、菩提樹崇拝に対する新たな儀礼として、樹木に水を掛けて病気治しや健康祈願をする新しい儀礼が行われるようになった。

また、ピリット儀礼は人々の生活に入り込んでいる。ピリットとは護呪經典で、仏教のいくつかの經典のうち、人々を悪霊から防御し、健康や安全を維持するのに効果があるとされる一群のもので、特定の儀礼で唱えられるいくつかのパーリ語の經典の総称である。

ピリットは所要時間から時分ピリット(1時間のピリットを3・5・7回繰り返す、僧侶3人以上)、徹夜ピリット(徹夜で行い12時間にわたる。僧侶8人以上)、7日ピリット(7日を標準とし、まれには1カ月、3カ月にわたる。僧侶24人以上)に分けられる。その規模に応じて、社会的基盤も家・親族から村落そして地域へと拡大していくが、あくまでも徹夜ピリットが標準的とみられている。

ピリットは家で行われる場合は、健康祈願、安産祈願、病気治癒祈願、家の新築や移転、店の開業、遠方の旅に出る時の安全祈願などであり、通過儀礼では結婚のお祝い、臨終時、葬式、死者供養などの機会に行われる。死者の追善供養の意味で行われる時は、ピリットを行うことで生じる功德が来世に転送されるという観念が、すでに別の存在に転生しているはずの死者にも振り向けられる。教義からみれば、やや矛盾した論理に基づいているが、民衆にとっては功德の回向はどのようなものにも行き渡るものと考えられている。

寺院で行われる場合は、住職や僧侶の健康祝い、寺院の建立や改修、出家得度式や具足戒式など仏教にかかわるものから、年中行事等である。その特徴は、何かを新しく始める時、起こりうる災厄を防止することを第一義とし、それにお祝いの喜びをこめる。年中行事や通過儀礼など、時間の境界にあたっての危機を乗り越える呪力を与えてくれることも意識されている<sup>(5)</sup>。

上記のスリランカの歴史および上座仏教については、以下の佼成会のスリランカでの展開および個別の事例の背景として理解しておいたほうがよいことに

ついて述べた。

それでは次に、佼成会のスリランカでの布教展開を時期区分して、その特徴を述べ、さらに地方の拠点の展開の状況と特徴についてみていこう。

## 2 スリランカにおける佼成会の展開

スリランカに佼成会の種が蒔かれるようになったきっかけは、1991年に日本で入会したスリランカ人が帰国後、佼成会の活動をするようになったことによる。ここでは、その布教の展開過程を5期にわけてみていきたい<sup>(6)</sup>。ついで、スリランカ内の地方拠点の展開の様相を地域ごとにみていく。

### (1) 布教展開の時期区分

#### I期 スリランカ布教の開始 1991～1997年

佼成会がスリランカに布教することになったきっかけは、ガミニさん(1952年生まれ、63歳、調査時点の2016年9月現在の年齢)が1991年に神奈川県の大和教会で入会したことに始まる。ガミニさんはスリランカでの内戦(政府と人民解放戦線との間のシンハラ人同士の争い)の中で、政治的葛藤の問題で1990年にまずは単身で日本に行った。6カ月後に妻のダルシャニさんと2人の子ども(男女)を呼び寄せた。

ガミニさんが日本行きを決めたのは、ダルシャニさん(1953年生まれ、62



立正佼成会スリランカ教会拠点図

歳)が、かつてモルディブの日本大使館に勤めていたことがあり、日本大使館の人が日本は安全な国だと言っていたのが決め手になった。日本人のペンフレンドもあり、日本には一度行きたいと思っていた。はじめは一時滞在ビザ(観光ビザ)で行った。

神奈川県相模原市のポリ袋製造工場にアルバイトで働いていたガミニさんは、職場で親しくなった日本人に誘われ、その自宅に行った。その人の母が村上恵子さんと言って、神奈川県にある佼成会大和教会桜ヶ丘支部の主任だった。村上さんが毎日曜日に佼成会の教会道場にガミニさん一家を連れて行った。そこで日本語を学びはじめ、当時10歳だった長男と7歳だった長女は、「子どもバンド」の音楽の練習に教会に行くようになった。1992年の開祖生誕会では、海外布教課のアレンジで庭野日敬開祖と会い、スリランカの方式でスリランカに佼成会を広めてくださいと言われ、スリランカで導きをすることを誓ったという。

3年間の日本滞在后、1993年にガミニさん一家はスリランカに帰国した。コロombo近郊の西プロビンス(西州)デヒワラ市に住み、日本で稼いだ金で3階建てのビルを建て、日本から輸入した中古冷蔵庫の販売店を始めた(のちに冷蔵庫はフロンガスの問題でだめになった)。1995年には15人の会員とともに桜ヶ丘仏教協会を設立した。同年に経典のシンハラ語訳をつくった。1996年には会員数は35世帯になり、シンハラ語訳経典が改訂され、立正佼成会の会歌のシンハラ語訳を作成した。1997年には、ガミニ家に本尊が勧請された。

## Ⅱ 期 佼成会本部による正式拠点(連絡所)としての認可 1998～2003年

1998年5月にデヒワラ市で、A Volunteer Social Service OrganizationとしてRissho Kosei-kai Sri Lanka(立正佼成会スリランカ)が認証された。同年、ガミニさんに本部から教師資格が授与された。本部より正式な拠点として認められ、スリランカ連絡所が発足した。道場はガミニさんの家におかれた。当時の会員は87人だった(「佼成新聞」1998年6月5日号)。5月には連絡所の本尊が勧請された。

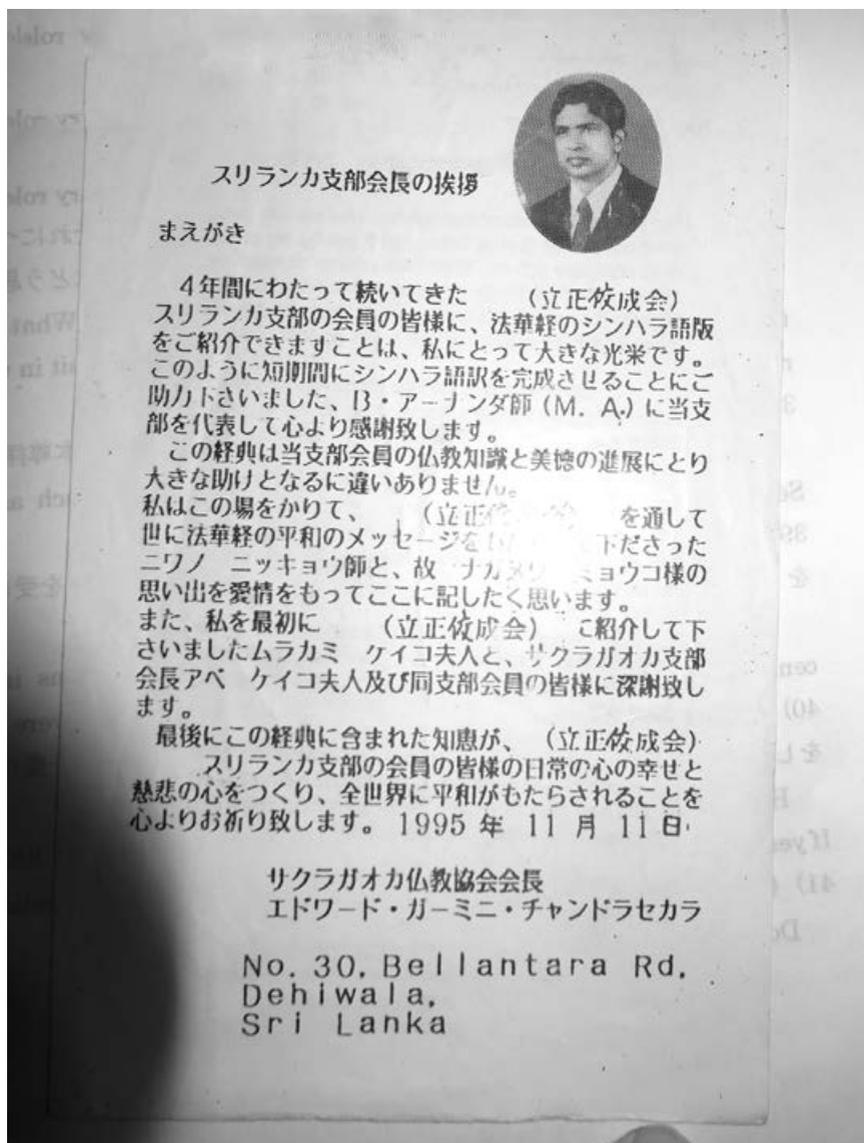


写真9 經典のシンハラ語訳ができたことを報告する冊子(1995年)  
(ガミニ氏提供。2016年9月、筆者撮影)

1998年に正式な拠点として認められてからは、本部の海外布教課スタッフの訪問、2000年からバンコクでの研修会の参加、スリランカ人の青年の学林海外修養生としての送り出しが行われるようになった<sup>(7)</sup>。2000年に、ポロンナルワの地方拠点がスタートした。2001年には、会員数は200世帯になり、日本語クラスが開設された<sup>(8)</sup>。2002年には、シンハラ語による研修会が開催された。2003年には庭野日鑑会長がスリランカを訪問した。会員数は285世帯になった。5家が本尊を勧請し、第3回バンコク研修会に参加した。

### Ⅲ期 支部への昇格 2004～2009年

2004年にはスリランカを含む南アジアを統括する教会として、南アジア教会(斎藤輝雄教会長)が設立され、スリランカ連絡所が支部に昇格した。ガミニさんの家からイシパタナ通りの借家に道場が移った<sup>(9)</sup>。同年12月にはスリランカを大津波が襲い、被害が甚大だったので、一食平和基金<sup>(10)</sup>から支援金が拠出された。

2005年には理事会が設立され、デルゴダさん(4章の事例3)が理事長になった。日本の家庭教育研究所(佼成会の外郭団体)の講師を呼び、家庭教育講演会を開始し、その後重要な活動になっていく。会員世帯数1000世帯になった。

2006年には、開祖生誕100年世界サンガ団参(団体参拝)に54人が参加した。この時ポロンナルワの男性会員3人が逃亡した。

2007年には、日本から佼成会の理事長が訪問、法人登録の準備が始まった。ハバラナ拠点がスタートした。バンコクで13人が本尊を勧請し、家庭教育講演会が開催された。

2008年には、道場がペビリヤナに移転し、キャンディとゴールの拠点がスタートした。会員世帯数が2000になる。

2009年には、会員世帯数が2200になった。国際伝道本部主催のリーダー教育(2年)にガミニさんがスリランカから初参加した。日本の本部への団参に31人



写真10 2006年時点のスリランカ支部の幹部会員(ガミニ氏提供。2016年9月, 筆者撮影)

が行き、このうち、コロンボの女性1人が逃亡した。この時まで団参での個人負担は航空運賃のみで、あとは本部負担だった。12月にスリランカ支部は教会(南アジア伝道区所轄)に昇格し、同月、山本芳久さん(1949年生まれ、当時60歳)が教会長に就任した<sup>(11)</sup>。

#### IV期 教会への昇格と日本人教会長の赴任, 法人格の取得 2010~2016年

日本から教会長が就任したこの時期から、一食平和基金を用いた支援活動が活発になり、また家庭教育講演会も毎年行われるようになり、各拠点や地域を拡大し、本格化していく。日本の国際伝道本部でのリーダー教育のほか、タイのバンコクでの教育や法華経講座が開催され、スリランカからも参加している。なお、本尊は日本の本部やバンコク教会で一般的には勧請されるが、スリランカでも現地勧請式が行われている。また、立正佼成ダルマ財団というローカル NGOとしての法人格が取れ、長年の懸案事項に終止符を打つことができ、教

会長のビザ取得にも心配がなくなった。他方、ガミニさんとは、これまでのように自分が中心ではなくなったことで(2005年の理事会設立の時からくすぶっていたが)関係が悪化し、その葛藤への対処に教会長のみならず、会員が多大なエネルギーを使うことになった<sup>(12)</sup>。

この間の出来事を順を追って述べると以下のとおりである。

2010年3月に教会発会式を行った。家庭教育講演会が学校を会場として実施されるようになった。一食平和基金からの支援で貧困家庭の子どもたちに学用品の寄付、孤児院に食事の供養、家庭教育グループのバザーで得た収益金で、小学校に井戸を寄付した。戦争犠牲者と津波犠牲者の慰霊供養を実施した。日本語クラスを実施した。

2011年にはポロンナルワ、ハバラナで起きた洪水の被害者に一食平和基金から食料パックを配布した。日本の東日本大震災と津波被害者に対して、慰霊供養と募金、バザーを行い、収益金を本部に送金した。開祖さま生誕会に老人ホームに食事の提供をした。釈尊成道2600年を記念して教会でピリットを行った。スリランカ教会で初めて本尊の現地勧請式を実施した。

2012年にはバンコク教会での布教リーダー研修会に5人、バンコク法華経講座に5人、国際伝道本部主催のリーダー研修会に4人が参加した。バンコク教会での本尊勧請式に2家参加。日本への団参には10人行った。家庭教育講演会を開催した。キャンディの法座所を閉所した。ポヤデーに加えて毎月1日を先祖供養の日(命日)として、参拝日に設定した。国際伝道本部長と南アジア伝道区長が訪問、スリランカ教会の方向性に関する調査が行われ、今後6ヵ年計画が策定された。

2013年は、長い年月をかけて試行錯誤していたローカルNGOの法人格が取れた年である(11月)<sup>(13)</sup>。法人登録は2007年から準備はしていたものの、山本教会長が赴任するまでに法人化はできず、教会長になってから、法人化に向けてかなりの労力を割かなければならなかった。ガミニさんが登録したという法



写真11 借家の(旧)道場のご宝前(本尊像の左は開祖, 右は脇祖の写真)



写真12 借家の(旧)道場の外観

(2016年9月, 筆者撮影)

人は、会計報告、活動報告をしていなかったため、すでに失効しており、立正佼成ダルマ財団(Rissho Kosei Dhamma Foundation)としてローカルNGOに登録できた。正式な団体として認められたこと、そして外国人にビザを出せることになったことで、教会長のビザの問題が解決した。この点で2013年はスリランカ佼成会にとって重要な年である。埼玉支教区青年を受け入れ、この年から日本の支教区や教会の団体を受け入れるようになった。

2014年には、本部団参でゴールの中心人物の男性が逃亡した。同年末に、これまでガミニさんに出ていたサポートマネーが停止された。教会長の赴任1年後くらいに始まった葛藤状況(4章の事例参照)は、ガミニさんが離れたことによってほぼ解決した。

2015年には、家庭拠点法座の制度を開始する。これまでの道場中心から各家庭での法座への移行である。このようにして拠点道場参拝型からの脱皮と、古参リーダーが権益を得るかたちからの脱皮を図った。

2016年1月には新教会道場の地鎮祭が行われ、7月に上棟式が実施された。これまでは賃貸物件であったが、自前の道場が建設されることになった。

佼成学園女子高のプラスバンドのスリランカ海外演奏を受け入れ、地元の学校との交流が生まれた。

#### V期 新道場建設と家庭拠点法座の拡大

2017年6月4日、西部州ガンパハ県ワッタラ市において新道場の入仏落慶式が、庭野祥光次代会長臨席のもと実施された。落慶式では、上座仏教の僧侶とともに参集者がパーリ語の経を読誦する中で、御本尊除幕の儀が行われた。式典には来賓と会員で375人が参列した(佼成新聞2017年6月8日号)。新教会道場は敷地面積1016㎡、鉄筋コンクリート平屋建てで、延べ床面積は451㎡であり、法座席、事務室、応接室などを備えている。この時までには家庭拠点数は64にのぼった。また今後は、財的にも本部からの支援によらず独立採算がもたらわれ、新



写真13 新道場入仏落慶式

大きな本尊像とスリランカの正装である白服を着ている参拝者  
(立正佼成会国際伝道部提供, 2017年6月)



写真14 新道場の外観

スリランカの国旗, 仏旗, 日本の国旗が立っており, 道場は仏旗で飾られている。テントは中に入りきれない参拝者のために設置された席。(スリランカ教会提供, 2017年6月)



写真15 入仏落慶式に参列した上座仏教の僧侶 (佼成新聞社提供, 2017年6月)

しい段階に入ったと思われる。

これまで、スリランカ佼成会全体にかかわるものについて概観した。次にコロンボ以外の地方拠点についてみておこう。

## (2) 地方への展開

日本で入会して帰国したガミニさんを中心にスリランカでの布教が始まるが、ガミニさんの導きやガミニさんによって導かれた人の縁で、コロンボ周辺から、ポロンナルワ、ハバラナ、キャンディという地方においても布教が広がった。また、これとは別に日本の調布教会の系統で、ゴールにも布教が展開された。地方に拠点をおくことは、2004年に南アジア教会長となった斎藤さんのもとで推進され、法座所(地域道場)がつくられた。ポロンナルワ、ハバラナ、ゴールについては、布教のきっかけや、そこでの展開の詳細は、4章で扱う各事例の中で叙述されているので、それも参照してほしい。

### ① ポロンナルワ

ポロンナルワはスリランカ北中部州にある中世の古都である。ここは10世紀から12世紀にかけてシンハラ王朝の首都があったところで、仏教の遺跡群がユネスコの世界遺産となっている。気候は熱帯性であるが、王は巨大な灌漑用貯水池を建設し、乾季においても農耕を可能にした。また北中部州の第二の都市である。

ポロンナルワでの佼成会の布教の原点になったのは、ハリソンさん(男性)とシャンティさん(女性、4章の事例7)とガラパッティさん(男性)である。当時、日本の中古冷蔵庫販売をしていたガミニさんのもとに、同じような商売ができないかと三者が訪れたことから始まった。2000年にポロンナルワに会員が生まれ、初めての地方拠点になった。2007年に道場(法座所)の賃貸を開始した(道場は5回移転)。当初はポヤの日に集まっていたが、現在は日曜日が集まる日に



写真16 ボロナルワ法座所(道場)  
後方にはご宝前。合掌して法座を開始(スリランカ教会提供, 2016年10月)



写真17 ニュースレターの拝読  
シンハラ語に翻訳された本部発行のLiving the Lotusを読む  
(スリランカ教会提供, 2015年11月)

なっている。ポロンナルワでは「日本に行きたい」「バンコクに行きたい」<sup>(14)</sup>という理由で入会してくる人が多い。これはポロンナルワの会員は、ある程度の経済力がある人々だということを意味している。日本やタイに行くビザを取るとはなかなか難しいが、佼成会を通してはとりやすいこと、また、佼成会の施設に泊まれば宿泊費が節約できることも魅力だった。実際、筆者が参加した2016年9月の法座でも、初めて来た学校の教員が日本やバンコク行きについて質問していた。これは「入会すれば日本行ける、バンコクに行ける」ということを入会の誘い文句にしている人がいることを示す。しかし、最近ではこのような理由からではなく、もっと信仰的な意味で入会してくる人も出てきた(4章の事例9)。

なお、道場は2016年末に閉鎖することとし、賃貸費をスリランカ教会で出すことは終了したが、2017年以後は現地会員がお金を出し合い、道場を維持している。

## ② ハバラナ

ハバラナは、コロンボから車で5時間、ポロンナルワから車で1時間半のところに位置するが、ポロンナルワとのかかわりはなく、コロンボとのつながりがある。ハバラナの中心人物であるスワルナパーリさん(4章の事例10)が、2005年にコロンボに住む親戚のシャーマリーさん(4章の事例5)に導かれた。2007年に佼成会が彼女の自宅の一室を法座所(道場)として賃借を開始した。

ハバラナは文化三角地帯と呼ばれる場所であって、大きな道路が交差しているため、観光の拠点としてホテルがつくられ、サファリの観光はある。しかしながら、そこでの雇用はごく一部である。ハバラナは熱帯性の暑い気候で、ポロンナルワにあるような灌漑用貯水池はなく、農業をするのも難しい貧困地帯である。会員は貧しい人が大半なので、ここでは、日本に行きたい、バンコクに行きたいという入会の理由は皆無である。また、リーダーであるスワルナパー



写真18 ハバラナ法座所(道場)での法座  
ご宝前の左側にいる人が法座所の責任者スワルナパーリさん。右端は通訳のルクランチさん、その隣が山本教会長(スリランカ教会提供、2016年3月)



写真19 ハバラナ法座所での少人数の法座  
右から2人目がスワルナパーリさん(スリランカ教会提供、2016年10月)

りさんは社会活動をしていた人でもあり、それによるのかもしれないが、かなり、苦を持つ人々への信仰的対応が行われている。なお、賃貸は2016年末で終わるが、2017年時点では無料で法座所として提供している。

### ③ キャンディ

キャンディはスリランカ中部州の州都で、コロombo周辺以外の都市としては国内で2番目に大きい。シンハラ人のキャンディ王国(1469～1815年)の最後の都であり、現在でもスリランカ中部における中心的な都市である。キャンディには、仏陀の犬歯があるとされる仏歯寺がある。仏歯は仏陀の聖遺物の仏舎利として崇拜されると共に、強い力を持つものとして神のように祀られている。仏歯寺、王宮建造物群を含むキャンディの文化財は、1983年、「聖地キャンディ」として世界遺産(文化遺産)に登録された。キャンディはスリランカ仏教の聖地であり、仏教徒にとって宗教的に重要な信仰の地であり、最も重要な巡礼地の一つである。

こうした上座仏教の聖地であり、極めて強固な上座仏教があるキャンディに佼成会が伝わったのは、コロombo在住のデルゴダさん(4章の事例3)が、実家の近所に住むジャヤシンハさんを1999年に導いたことで始まった。2008年に賃貸して法座所(道場)ができ、拠点が開設され、2012年5月に閉鎖した。

キャンディについては、4章で事例としてとりあげていないので、元拠点長だったジャヤシンハさん(1947年生まれ、69歳、女性)からの聞き取りから得た状況を示したい。デルゴダさんの実家とは近所であり、彼女がコロomboに行く時にはデルゴダさんの家で泊めてもらっていた(スリランカでは知り合いの家に泊まるのは普通のことである)。デルゴダさんは1998年に入会していたが、1999年頃デルゴダさんから「佼成会の創始者の開祖さまはすばらしい。家庭を整えていくのに、良い仏教団体だ」と勧められた。ジャヤシンハさんは知り合いも多く、学校の先生や医師をはじめ、様々な人を導いた。日本からも水野晃三郎さん(東京の板

スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相



写真20 キャンディにある仏歯寺



写真23 仏歯が納められた容器の写真



写真21 蓮の花を供げる人



写真24 蓮の花を捧げ、祈る人



写真22 祈る人



写真25 白い服を着て祈る人々

(2016年9月, 筆者撮影)

橋教会所属、当時スリランカ布教員)が布教に来た。南アジア教会長の斎藤さんが来る時には、ホテルでの食事に連れて行ってもらった。日本から人が来る時にはいろいろなプログラムがあり、法座所があった時には、ポヤの日には150～200人が集まった。海外修養生出身者が日本語クラスを開いていた時もあった。

3回目に法座所を引越ししなければならなかった時、佼成会は大乗仏教だということで、僧侶の反対があった。町の中に法座所があったときは大丈夫だったが、寺に近いところだったので反対され、警察に呼ばれたこともある。法人格の証明書を見せてほしいといわれたが、その時は見せられるものがなく(2013年に法人格取得)団体の行事ができないと言われた。また、ジャヤシンハさんがちょうどそのころ、娘のレストランの手伝いをしなければならないことになり、都合もあったので、2012年に拠点を開めた<sup>(15)</sup>。

なお、現在は家庭拠点長に手を挙げている人は3人いるが、キャンディでは実質的にはほとんど活動を行っていない。

#### ④ ゴール

ゴールはスリランカ南西海岸の先端部に位置しており、南部州の州都でかつゴール県の県都である。ゴールは、ポルトガルとオランダとイギリスの支配を経験している。1988年に要塞に囲まれた旧市街がユネスコの世界遺産に登録された。また、2004年12月26日に起きたスマトラ島沖地震では津波の被害を受け、ゴールの街だけで数千人が命を落とした。とはいえ、ゴールという拠点名を名乗ってはいたが、佼成会が布教したのは、ゴールの市街地でなく、奥まった農村地域である。

佼成会のスリランカの布教には、神奈川県の大和教会で入会したガミニ系統(コロombo, ポロンナルワ, キャンディ, ハバラナ)と東京都の調布教会で入会したラリー系統がある。ゴールは調布教会単独の布教がもとになっている。

ゴールについては4章の事例12と13で、布教の様子が言及されており、また

山本教会長やルクランチさんからの聞き取りのほか、調布教会で特に中心的にゴールでの布教に取り組んだ3人の日本人女性からも聞き取りを行った。ポロンナルワやハバラナでは、本人が初期布教を担ったシャンティさん(4章の事例7)、スワルナパーリさん(4章の事例10)から話を伺うことができたが、ゴールについては、その布教のもとになったラリーさん、ラジャーさんから聞き取りを行えないので、調布教会側の資料や聞き取りによって補完したい。

ゴールへの布教は、ラリーさん(1969年生まれ、当時30代、男性)が2005年4月に調布教会で入会したことに始まる。ラリーさんの妻は日本人で、妻の母は調布教会の会員だった。ラリーさんは日本語学校にスリランカから学生を集める仕事をし、スリランカと日本を頻繁に往復していた<sup>(16)</sup>。入会したラリーさんが、スリランカで100人や200人の人に布教するのは簡単というので、当時の調布教会長は本部に相談し、総戒名をシンハラ語に翻訳してもらった。ゴールはラリーさんの子どものころ育った場所ということだった。2005年6月25～30日には第1回スリランカ布教に調布教会から11人で行った。2005年には2回、2006年には調布教会一食委員会スリランカ支援物資配布の旅を1月に行ったほか2回、2007年には4回、2008年には3回、2009年1回、2010年には2回、2011年は1回行った。最後に行ったのは2012年1月だった。このほとんどに調布教会の教務部長、主任、支部会計をしていた3人の女性は行っている。なお、スケジュール表をみるとゴールでは3日間程度で、あとは他地域での観光であった。その理由を聞いたところ、スリランカ訪問のメンバーは変わるので、せっかくスリランカに来たので観光の要素を入れたということがあった。また旅行の手配はすべてラリーさんがやっていた<sup>(17)</sup>。ゴールでは日本の4色ボールペンなどをもっていき、人々に配った。

この間、調布教会で費用を負担して、ゴールの3人の男性をよんだ。また、2006年の世界サンガには、ガミニ系統の54人に加えて、ラリー系統からも20人位参加していた。その参加者は佼成会にいずれ入れるからとラリーさんは言っ



写真26 ゴール法座所(道場)の本尊勧請式に集まった現地の人々と調布教会の人々



写真27 ゴール法座所のご宝前を前に、調布教会の人々とラリーさん(後列左から2人目)とラジャーさん(後列左から1人目)



写真28 ゴール法座所での本尊勧請式の時の法座

(2007年12月, 調布教会提供)

ていたが、会員はラリーさんの姉(アダスリアさんの妻)くらいでほとんどが未会員だった<sup>(18)</sup>。裕福にみえたという。

2007年にはラリーさんの義兄のアダスリアさん(実業家、コロンボ在住)が自費で法座所(道場)を建ててくれた。12月16日に本尊の安置式を行った。2009年には3人の女性を研修のため調布教会に呼んだ(4章の事例12参照)。ラリーさんは主として日本にいたため、現地ではラジャーさん(男性)<sup>(19)</sup>、ピアシりさん(女性)たちが中心になった。彼らについても金銭疑惑とバンコク行きの人選に身内を優先し、自分が何回も行っていったことについて他の会員の不満もあった。

この法座所は2011年に閉めた。閉めた理由は、ラリーさんの不祥事<sup>(20)</sup>(日本語学校入学のための、スリランカ人のビザの不正取得による有印私文書偽造、偽装結婚の仲介)が起こったこと、スリランカ教会ができて山本教会長が赴任したことで、一本化しようとの機運になったことがある。法座所を建てたアダスリアさんも佼成会を離れた。その後、スリランカ教会で別の場所を法座所として賃借したが、2013年に閉めた。なお、ラリーさん時代にゴールで中心的な役割を担っていたラジャーさんは、2014年の団参で逃亡し、今もスリランカに戻っていない。このようにゴールは、布教の点では一筋縄ではいかなかった。しかし、その際、蒔かれた種は、4章の事例12、13に見るように、こうしたことを経つとも、教会長の指導のもと信仰を深めつつあり、実りを感じさせるものがある。

スリランカばかりでなく、南アジアの場合、日本と現地の国力の差、先進国と途上国という経済格差の中で、日本からの宗教である佼成会に対して、各地域の初期の中心人物(とりわけ男性)が野心的であればあるほど、必ずしも信仰的な側面からではなく、思惑があったり、ビジネスのようになっていたり、佼成会を利用するといった事態も起きた。しかし、その時期はほぼ過ぎ去り、新たな段階に入ったのが現在のスリランカ教会である。

### 3 上座仏教への対応とNGOとしての活動

スリランカは上座仏教が強固な土地柄であり、日本の佼成会をそのままもっていっては葛藤が生じる。異文化布教においては、現地の文化へ適応するという課題がある。しかしながら、現地の文化に埋没せず、教えの中核を保持していくことも重要である。また方便も必要になってくる。それでは佼成会はどのように工夫していったのであろうか。

#### (1) 上座仏教との葛藤の回避とその要素の採用

佼成会がスリランカに布教するにあたって、直面しなくてはならなかったことの第一は、スリランカは上座仏教が大変強い国であることだ。出家仏教である上座仏教では、大乘仏教に対してネガティブにとらえている。佼成会は他宗教を排除する宗教ではないが、上座仏教との関係にはとても気を配っている。また、文化的な違和感を減じさせるために、現地の宗教文化の取入れがみられる。

コロンボと地方の拠点では、地域の状況によって参集する日が違うが、ポヤデーは重要である。その日は午前中から佼成会に行く、夕方には寺院を参拝するという割り振りが行われている。ポヤデーには上座仏教と同じく、白い服を着て参拝する。また、上座仏教の僧侶をよんでもいる<sup>(21)</sup>。これは上座仏教側に対して理解をしてもらおうとする取り組みでもあり、また現地の人々にとっては僧侶の説法を聞くというのは身についたものであり、慣れ親しんだことでもある。僧侶に対して布施をするのも自然に行われている<sup>(22)</sup>。經典読誦についても、ポヤデーの場合、道場では佼成会のお経(シンハラ語)をあげてから、上座仏教のパーリ語のお経をあげる。2種類のお経をあげるのはポヤデーの時のみで、ほかは佼成会のお経のみである。また、ポヤデーでは、ご供養が始まる前に数人がピリットをあげていた。お盛物も花を供える。このように上座仏教の要素をとり入れ、違和感のないようにしている。また、教会長自身が付け

スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相



写真29 スリランカの正装の白服を着た導師、脇導師の入場



写真32 僧侶の法話を合掌して聞く会員



写真30 ポヤデーでのご供養



写真33 法話終了後、ひざまずいて僧侶にお礼をする白服を着た教会長



写真31 ポヤデーに招待した上座仏教の僧侶による法話



写真34 佼成会会長のシンハラ語に訳された法話を読む会員

(2016年9月、筆者撮影)

加えたものに、読経供養が始まる前に唱えるパーリ語の「五戒」がある。

寺院からの認知は、活動をしていくために重要であり、上記の佼成会のポヤデーや重要な式典に僧侶をよぶことは、友好関係の樹立と理解のために好結果を生んでいる。また、服装もポヤデーの時は会員は白服を着て参集し、近隣住民から異様な目で見られないようにとの配慮もある。

また、後述する支援物資を配布する時に、寺院で配布したり、寺院側の要望に応えたりすることも友好関係樹立を意識したものであろう。

## (2) 佼成会の宗教活動としての難しさとメリット

上座仏教の社会にあって、大乘仏教というのは大変ネガティブにとらえられているようである。大乘仏教であることは表立っては言わないという人も多い。また、日本の佼成会では先祖供養(父方母方または夫方妻方の両方の先祖を祀る)は基本であるが、上座仏教では先祖の概念はうすく、前世、輪廻転生の中での生まれ変わりの考え方がある。したがって、読経供養をしている姿は同じでも、日本の佼成会ではご供養(経典読誦)の対象は先祖であるが、スリランカでは仏陀に対してである。形の上では似ていても経典読誦の対象が異なることに留意しなければならない。

スリランカでは日本のイメージは良い。佼成会が日本から来た宗教であるということはメリットである。しかしながら、佼成会に入会すれば日本に行ける、バンコクに行けるといことでの布教の仕方は、問題を生んだ。費用を安く行きたい、できるなら無料で行きたいという、費用の問題もあるが、スリランカでは日本やタイ行きのビザを取ることで体が難しい。それを佼成会が保証することで、ビザが取得しやすくなる。また、拠点のリーダー層に人選の権益を与えることになり、信仰とは異なるところが魅力になってきた。

佼成会が上座仏教に対してもつメリットは、生活仏教であるということである。僧侶には日常的な、かつ深刻な問題があっても相談はできず、また僧侶は

出家者であるから、家庭でのことには疎い。他方、佼成会では僧侶には相談できない問題を相談できる。上座仏教では僧侶に徳を積んで、来世に良いところに行くことを目的としている。佼成会で今をどうするかを説くのは新鮮であり、具体的な実践行としての魅力がある。在家仏教として、夫婦、親子が拝みあっている姿を仏性と縁起の教えから説いている。

### (3) NGOとしての活動

2013年に佼成会で取得できた法人格はローカルNGOである。活動報告、会計報告は3カ月ごとにしなければならない。佼成会のこれに関連した活動には、一食初等教育支援(養育支援)、家庭教育講演会、無料日本語クラスがある。このほか緊急事態に際しては緊急支援がある。

佼成会には一食平和基金というものがある。これは信者が一食を抜いてその分の金額を布施するもので、その中から50万円がスリランカでの初等教育支援に充てられている。初等教育支援では学用品、くつ、水筒、バックなど必要なものを大きな袋に入れて配布する。配布する学校は行政をとおして聞いたり、NGO担当の公務員で村々を歩いている人からの情報を得たりして、学校を3つ選び、校長に生徒の中で困っている家庭の子どもを100人選んでもらう。そして子どもに何が必要かを聞いてもらい、3000ルピー(約2000円)以内で各自のニーズに合わせたセットをつくる<sup>(23)</sup>。これはNGOになってから毎年行っている。

洪水などの緊急事態の時には、一食平和基金の中から別途支援金がでる。たとえば、2016年5月に大雨が降り洪水の被害にあったので、必要なものについて聞き取りをして、マットレス等の寝具、掃除用具など生活必需品や食べ物を配布した。屋根のトタン板がほしい人にはトタン板を、セメントが必要な人にはセメントをあげた。臨機応変に緊急支援は対応している。前年に予算化しておかなくても、緊急支援で使用できる一食平和基金の役割は大きい。

2004年に南アジア教会ができた翌年の2005年から、家庭教育講演会が始まっ

スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相



写真35 一食平和基金による貧しい子どもたちへの初等教育支援



写真38 文房具などをもらう女子生徒



写真36 子どもたちに必要なものを聞いて配布



写真39 もらったものを持って帰宅する女子生徒



写真37 文房具などをもらう男子生徒



写真40 もらったものを持って帰宅する男子生徒

(2016年7月, スリランカ教会提供)

スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相



写真41 一食洪水被災者支援



写真44 会員は支援物資配布の手伝い



写真42 前もって必要なものを聞いてきめ細やかに支援(マットレス、枕があるのが見える)



写真45 コンロ、鍋、ホウキ、敷物の支援



写真43 集ってきた子どもたちにはお菓子を渡す



写真46 鍋、ホウキ、セメント、ブロックの支援

(2016年7月、スリランカ教会提供)

た。当初は単発的だったが、教会に昇格してからは毎年行われるようになった。佼成会の外郭団体の家庭教育研究所の講師が、年1回スリランカを訪問して行く(3年ほど前に7月に時期が固定された)が、ニーズが多く、日本で家庭教育の勉強をしたことのある教会長夫人が、毎月1回くらい学校等に出向き、講演会を実施している。日本人に来てもらいたいとの希望がある。教会には家庭教育グループがあり、責任者がいる(4章の事例4参照)。家庭教育は教会に昇格する前は、ホテルの会場を借り、バスを出すといった費用がかかる仕方で行われていた。教会長が赴任してからは、会員のつてをたどり学校や幼稚園などを会場として毎年実施されている。集める方式から出向く方式への変化もある。

講演の内容は講師によって、また対象が幼稚園児、小学生、中学生、高校生の親なのかによっても異なる。たとえば、2011年12月の家庭教育の講演内容は、子どもの反抗期についてで、第一反抗期：2～3歳、第二反抗期：8～10歳、第三反抗期：12～18歳を示し、親がいかにして子どもの気持ちを理解し、各年代の反抗期を上手に乗り越えさせていくのが、子どもの今後の成長にかかわっていることを体験も含めて講義した。2015年7月は10日間にわたって講演会が行われたが、15日に行われた家庭教育講演会は小学生の親が対象で、2時間ずつ2回、参加者は200人×2の400人だった。講演内容は次のようなものであった。

①親の役割：3つの心を育てる(1.豊かな心を育てる 2.自立のできる子を育てる 3.社会性を身につける子を育てる)。

②勉強好きな子を育てるには：ありのままを認めて、褒めてあげること。テストの見方について「親は×のところから見ないで、○のところから褒めると、子どもの精神が安定し、できなかつたところも一緒にみることで勉強が好きになる」。

③感謝の心を育てる：家庭の中で感謝の心があふれると感謝ができる子が育つ。

④家庭教育はすべての教育の基礎であり、家庭教育は言い聞かせる教育ではなく、感じさせる(感化)教育である、ということだった。親からは、今まで子供に勉強しなさいとか、テストの点数が悪かったら、怒ったり叩いたりしてしまっていたが、今までの育

スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相



写真47 日本の家庭教育研究所講師による家庭教育の講演と海外修養生出身者による通訳



写真50 教会長夫人佳代子さんによる家庭教育講演会



写真48 男性と女性双方が聞いている



写真51 講演に聞いている女性たち



写真49 子ども連れで講演を聞く



写真52 子どもたちによる歓迎の音楽

(2016年7月, スリランカ教会提供)

(2015年11月, スリランカ教会提供)

て方が間違っていたと分かったという感想が述べられた。家庭教育は評判がよく、佼成会の社会的認知の獲得に大きな役割をもっている。

無料日本語クラスは、もともと、学林の海外修養生が帰国したあと1年間は奉仕をしなければならないので、その意味での貢献ということだった<sup>(24)</sup>。しかし、現在ではNGO活動のひとつになっている。

これまで、佼成会のスリランカでの展開や活動の概略についてみてきた。次章では、実際に人々がどのような経緯で入会し、どのような出来事を乗り越え、自分自身が変わっていったのかについて、コロンボ、ポロンナルワ、ハバラナ、ゴールの会員の個別事例をとりあげる。

#### 4 スリランカ人の信仰受容の諸相

この章では、スリランカで現地の人々がどのように佼成会の信仰を受け入れ、実践しているのかについて、2016年9月に実施した聞き取り調査をもとにみていくことにする。地域としては、コロンボ、ポロンナルワ、ハバラナ、ゴールをとりあげる<sup>(25)</sup>。コロンボ6事例、ポロンナルワ3事例、ハバラナ2事例、ゴール2事例の計13事例である。なお、年齢は調査時点のものである。

##### (1) コロンボ

事例1のスナンダさん(56歳、男性)は、1998年の入会で、現在、立正佼成ダルマ財団の理事長であり、家庭拠点長でもある。スナンダさんには歴史的経緯も聞いた。事例2のパーシーさん(55歳、男性)は、1998年の入会で、支部長、理事で、家庭拠点長でもある。上座仏教に詳しく、また2016年にフルタイムのスタッフとして雇用された。パーシーさんには全体状況についても聞いた。事例3のデルゴダさん(74歳、女性)は、1998年の入会で、初代の理事長であり、現在は教会の総務部長、理事、家庭拠点長である。法人格の取得という点でス

リランカ佼成会にとって大きな貢献をした。事例4のマーリーさん(58歳, 女性)は, 1996年の入会で, 理事, 家庭教育推進責任者, 家庭拠点長である。家庭教育を通じてスリランカ社会で認知を得, 布教しようとしている。また, スリランカ文化とは異質な先祖供養を実践している。事例5のシャーマリーさん(50歳, 女性)は2004年の入会で, コロンボ布教会議議長・家庭拠点長である。2004年にスリランカ南部の海岸を襲った津波による災害を免れたことで, ガミニさんを命の恩人と思っている。また, ハバラナへの布教のきっかけになった人でもある。事例6のマンツリーさん(60歳, 女性)は, 2008年の入会で, 家庭拠点長である。人生の苦労の中で入会し, 佼成会に入って生きがいができ, 苦に対してもとらえ方を変え, 新たな人生を歩んでいる。

これらの人々のうち, 事例6を除いて, ガミニさんの直接の導きである。

#### ■事例1 スナンダさん(理事長・家庭拠点長)

スナンダさんは初期からのメンバーである。現在は理事長をしている。地域社会ではライオンズクラブのメンバーでもあり, 調査当時建設中だった新道場建設委員長だった。新道場はスナンダさんの家の近くにある。スナンダさんからは, スリランカ佼成会の歴史的なこと, スリランカにおいて佼成会の布教のきっかけになり, 現在は佼成会から離れているガミニさんとの葛藤の状況などについても聞いた。ガミニさんは現在まで残る重要な人々を導いたという意味で貢献がある人だが, 日本という先進国から来た宗教に, 一粒種として途上国の人がかかわる時に起こりがちな権益に絡む問題を抱えていた。スナンダさんはガミニ派だったが, ガミニさんから離れていく経緯についても述べられている。

#### 属性

スナンダさんは1960年生まれ, 56歳の男性である。2013年から理事長の役をつとめ, その前は5人いる理事のうちの1人であった。家庭拠点システムが始ま

スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相



写真53 一食平和基金による一食洪水被災者支援で活動するスナダさん(右端の男性)



写真54 新教会道場の近隣の寺の依頼による貧困家庭の子どもへの文房具の提供

(2016年7月, スリランカ教会提供)

るまで、コロンボはABCDの4つのチャプターに分かれていたが、Bのチャプターリーダーであった。

写真店を経営している。学歴は高校卒である。既婚で子どもは3人いる。

#### 佼成会への入会

1998年に入会した。義兄の友人のガミニさんから、「日本の仏教で、日本から人が来ているので、来てみてください」と誘われた。入会したのは、信仰に関心があったわけではなく、日本に興味をもっていたので、日本人に会いたいと思った。それまでに日本人とは会ったことはなかった。スリランカでは日本のイメージが良い。当時、島村雅俊さんが本部から布教支援で来ていた。また、以前、日本から輸入したオートバイの販売をしていたが、タイヤに問題があった時、日本から新しいタイヤを送ってくれたことで良い印象をもっていた。その当時はポヤの日だけ、ガミニさんの家でご供養と説法、法座を午後2時までやっていた。

#### 佼成会と上座仏教の違い

ポヤの日には午前から昼にかけては佼成会に、夕方は(上座仏教の)寺に行く。上座仏教では来世を良くしていくために功德を積む。佼成会は、来世のことでなく、今いただいている命をどのようにして生かすかを教える。上座仏教ではお坊さんに布施をするが、佼成会は相手を喜ばせ、功德を得る。佼成会は具体的に実践するやり方を教えてくれるのがよい。

これまで導いたのは40人で、今も来ているのはそのうちの6人である。

#### 入会して変わったこと

怒りっぽく、相手を許すことがなかった。今は、あまり怒らないように、相手を大切にするようにしている。以前は自己中心的であった。相手を大事にし、仏になるように進んでいこうと思う。

#### 訪日

日本に行ったのは4回。最後に行ったのは4年くらい前だ。日本は悪いところ

はない。ほとんど佼成会の関係のところに行くので、受け入れてくれ、やさしい言葉をかけてくれた。

### ガミニさんの功績とトラブル

1995年にガミニさんが経典をシンハラ語に翻訳し、会員綱領、会歌を翻訳して始まった。それからポロンナルワなど地方にも布教が広がった。ガミニさんは入会しなさいということで、プレッシャーをかけてやってきた。また、4～5年間、布教は相当伸びた。ガミニさんは自分で言いたいことを全部言ってきた。そして次第に、自分が佼成会のルールだということになってきた。自分がトップで偉いということになった。信者を自分勝手に動かそうとした。自分の言うことを聞かなかった場合、皆の前でその人を怒ったりすることもあった。自分の言うことができない人には、佼成会から出て行くまでプレッシャーをかけたりにしていた。そして教会長さんが(2010年に)来た。

ガミニさんが今まで教えてきたことと、教会長さんの教えは全然違った。道場に参拝に来てガミニさんが怒鳴るので、教会長さんから小さい子どもまで心を痛めて道場から帰っていった。ガミニさんが教会長さんを怒鳴ったりすることもあったが、教会長さんはそれを黙って受けた。ガミニさんを立て、それを受けていく教会長さんの「後ろ姿」(態度や行動)を見ているうちに、多くの信者の心がガミニさんから離れ、ガミニさんが独りぼっちになってしまった。

また、理事長の役をめぐるガミニさんとのトラブルもあった。2005年にデルゴダさんが理事長になった。これは当時の南アジア教会長の斎藤さんの指名である。ガミニさんはスリランカ支部の支部長になった。それまでは理事長はいない。本部が理事会をつくり、理事長を置いた。ガミニさんは自分が理事長になりたかった。

この始まりは、2006年に開祖生誕100年の世界サンガの団参があった。スリランカから54人が日本に行った。そのうちの3人を行かせないでほしいということを理事会のメンバー(5人の理事)は言っていた。その3人が日本に行く

逃げる可能性が高いので、本部にもそのことを言った。支部長だったガミニさんは、この3人は絶対逃げない、逃げたら自分は支部長をおりと約束した。理事の皆にもそう言ったし、本部の国際伝道部の次長さんにも言った。結局、その3人(ポロンナルワの男性)が逃げてしまった。当時の理事長のデルゴダさんが、本当はガミニさんに支部長をおりてもらわなければいけないとガミニさんに言った。それでガミニさんはショックを受けた。自分が今まで持っていた力がなくなったように思った。なくなったパワーを戻したいということで、違う方向に行ってしまった。ガミニさん時代には、日本への団参には一生懸命信仰をやっている人以外も行かせていたが、今は行かせない。

理事長だったデルゴダさんとガミニさんはうまくいかなかった。ガミニさんは、皆の前で人の悪口を言うことが多かった。ガミニさんは、デルゴダさんに、「理事長をおりてください。あなたがいるからうまくできない」と文句を言っていた。2013年にデルゴダさんは理事長を交代し、私が理事長になった。私はガミニさんとは仲が良く、ガミニさん派だったので、デルゴダさんは、私が理事長になったら、ガミニさんとうまくできるのではないかと思っていたと思う。理事長になったので、佼成会を一緒にやっていきたいと思いますとガミニさんに言ったら、デルゴダさんには理事長をおりただけではなく、佼成会をやめてほしいと言った。そういうことはできない。私もガミニさんの言うことを聞かなかったので、今度は私の悪口を言ったり、ガミニさんの説法の中で私を批判するということがあった。

ガミニさんは本部からいろいろ指導があった時に、それもやらなかった。いろいろ問題があって、ガミニさんは佼成会から離れていった。ガミニさんに付いて行く信者もいるのではないかなと思ったけれど、そうはならなかった。そのあと信者がどんどん増えていった。ガミニさんが佼成会をやめるまでいろいろなトラブルがあった。今はおだやかな時期を過ごしている。ガミニさんからスリランカの佼成会が始まって、上がってきて、そして下がってきた。今は上

がっていく時期だと思う。ガミニさんが佼成会から出て行って(2014年12月)そこから上がってきている。

ガミニさんは、はっきり物事を言う。相手のことを考えないで、自分がいいなあと思うことを話す。それが相手を傷つけたりする。自分が気にいらないことがあったら、すごく怒ったりする。けれどもやさしい人で、お願いしたら、なんでもしてあげたいという人。そして、話をするすばらしい才能もっていて、人があこがれるようなところもっている。

今、新道場の建築中だ。現在借りている道場はガミニさんの家に近く、今度の道場は自分の家やパーシー支部長さんの自宅に近い。自分が建設委員長をしている。ガミニさんは2015年6月に「大乘仏教の病原菌が入ってきた」という誹謗中傷のピラをはったり、配布したりして、お寺ともいろいろあった。しかし、その時に我々は行動を起こさなくて、あわてないでいた。しばらく時間がたった後に、近所のお寺を全部まわって佼成会の説明などをした。話し合って、落ち着くようになった。お寺側でもお寺の行事がある時に、佼成会から支援してもらいたいという依頼もその後あった。

ガミニさんは佼成会のせいで自分の人生にトラブルが起きた、自分が信仰しているのは上座仏教だということを手紙に書いて信者の皆さんに郵送したりもした。自分には佼成会はいらないということだ。佼成会を上着みたいに一時的に着ていたのではないと思う。

今の信者さんはガミニさんが道場に来たら、尊敬して話し合いもできる。でもガミニさんは道場に来ない、我々から離れていったのはガミニさんだ。

#### 今後の佼成会への展望と願い

家庭拠点法座には関心をもっていたので、家庭拠点長に手を挙げた。家庭拠点法座には近所の人々が20人くらい来る。また、他の法座に、自分も行ったりもしている。スリランカでは人前では悩んだり、苦労したりしていることを言わない。法座の中で、個人の悩みを話すのは難しい。(本当は自分の悩みだが)

友達がこういう問題で悩んでいるのだけれど、という言い方はある。そこで、家庭拠点法座では教えを話している。家庭で夫と妻はお互いにどのように尊敬すればよいか、問題があったらどのように解決すればよいかなどだ。

夫が酒を飲んでいるがどうしたらいいですか、と尋ねられたことがある。スリランカでは夫が酒を飲んで帰って来ると妻は無視したりする。そうせず心広くどのように受け入れたらよいか、次の日、どのように挨拶するかを皆さんに教える。酒をやめさせるではなく、夫婦としてどのように尊敬しあっていくかということに方向づける。

家庭拠点長は女性が多いし、男性が家庭拠点長をやると、どうかなとも思う。男性を教育するためには、セミナーを行ったりするのがよいのではないか。スリランカだけでなく、南アジア全体で、バンコクで青年セミナーを行うように、アジアの国の壮年のセミナーを行うと、男性が行って勉強して帰って来て、責任をもってほかの人に伝えていく。これには日本から支援をいただけるとありがたい。これまでスリランカのいろいろな地域で壮年セミナーを行った。その時に素晴らしい人が出てきたこともあったが、それがその後につながっていかなかった。スリランカだけでなく、他の国の人も入ると刺激になる。

青年育成も大事だが、青年は将来、いろいろな方向にいくし、佼成会を離れていくことも多い。女子だと結婚すると来ないことも多い。壮年や中年の女性はしっかりして続ける可能性が高いので、青年の育成も大事だが、両方の育成を考えていくのも大事だと思う。

今後、もっと信者を増やしていきたい。今年から本部からの支援がなくなる。信者から会費を集めたいと思う。近所のお寺と関係を良くしていきたい。日本の佼成会式で、そのままやってきたならば、いろいろと問題が出てきたかもしれないが、スリランカでは両方を合わせて、上座仏教のようにピリットをあげたり、五戒を唱えたりしてやっているのだから、そのやり方は大丈夫だと思う。

新道場は近いのでたびたび行くこともできるし、住んでいる村の人をお導き

することもできる。パーシー支部長さんの家も近いので、うまくやり取りをしていきたい。

## ■事例2 パーシーさん(支部長・理事・家庭拠点長)

パーシーさんは上座仏教に詳しい人である。ガミニさんが役をおりた後、2015年に支部長になり、2016年2月から佼成会本部の海外奉職員として雇用され、現在、スリランカ教会のフルタイムのスタッフである。これまでは海外修養生として日本で日本語と教義・実践を学んだ若手の人がスタッフになることはあったが、このような例は初めてである。スリランカ教会を担う人材として育成しようとしている。パーシーさんには全体状況についても聞いた。

### 属性

パーシーさんは1961年8月生まれ、55歳の男性である。2015年に支部長になり、2016年にスリランカ教会のフルタイムのスタッフになった。以前の仕事は公務員で政府が農業者に安く肥料を配る、その配布のマネージャーだった。既婚で、子どもは1人娘(25歳)のみである。高校卒である。

### 佼成会への入会と活動の契機

入会したのは1998年で、スナンダさんの導きである。スナンダさんとは星の方位の勉強をしていた時に同じクラスだった。これは塾みたいなので、6年くらい通った<sup>(26)</sup>。

スナンダさんから、佼成会でセレモニーがあるが、そこでスリランカの上座仏教のお参りをするので、それを中心になってやってくれないかと頼まれた。星のクラスは仏教をもとにしてやっているのだから、始まる前にお祈りをするのを自分が担当してやっていた。ガミニさんからお参りできるような人をさがしてほしいと頼まれたスナンダさんが、自分に頼んだ。セレモニーとは、スリランカを本部が(拠点として正式に)認めたお祝いの式典だった。その後、スナンダ

スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相



写真55 教会の支部長室でのパーシーさん(2016年9月, 筆者撮影)



写真56 額装本尊の祀り込みの時に説明するパーシーさん  
(2015年10月, スリランカ教会提供)

さんがガミニさんに説法をする人として自分を紹介し、10月のボヤの日に説法のために来てくれないかと誘われ説法をした。星の勉強をするところの先生がそのクラスでも説法する機会を与えて、自分をそのように育ててくれた。その後、佼成会の会員にならないかとガミニさんの誘いで、11月に会員になった。自分としては佼成会の中でも説法する機会があるのではないかと思ったことと、またスナダさんとは仲良くやっていたので入会した。

佼成会の初期の活動では、まずボヤの日に道場で式典をやっていた。そのほかは皆からお金を集めて、貧困家庭に食料を配ったり、学生に文房具をあげたりという社会福祉的な活動をやっていた。この時には一食平和基金からのお金が下りてきていなかったので、会員の寄付でやった。

これまで導いたのは3人である。

#### 佼成会に熱心になったきっかけ

2000年にガミニさんが支部をABCDの4つのチャプターに分けた。自分がCチャプターのリーダーの役をすることになった。リーダーになったことは名誉でもあり、責任を感じた。

掃除をしたり、ご宝前を整えたりする道場当番をチャプターごとにしていった。週に1回あたった。チャプター構成員の多くは女性で、35人いた。4カ月に一度ボヤデー担当のお役をしていた。

#### 佼成会と上座仏教の違い

今は佼成会が忙しくて行けないが、そうでなければ7～10月の雨安居の時期には毎日お寺に行っていた。また、娘の試験がある時、誰かが病気の時には祈願に行った。祈願は自分でやるが、たまにはお坊さんに頼んでやってもらうこともある。お寺では喜捨箱にお金を入れたりする。また、お寺を建てる時、スツーパー(塔)を建てる時、いろいろな行事の時には布施をお願いされたりする。佼成会より、寺への布施のほうが多い。

佼成会の教えは一般の人に分かりやすいことだ。上座仏教だとお坊さんが中

心で、一般の人々は出家者のような生き方ができない。佼成会は、普通の人がどのように生きていくかを簡単に教えてくれるのが違いだと思う。

佼成会のご本尊は、スリランカの仏さまの像よりも衣が下がっている(衣が下がっていて胸が見える)。それはどうしてかと聞かれることがある。それについては、仏さまを誰も見たことはない。イメージでつくったものなので、国によって仏像は違うと答える。

#### 佼成会についての説明

スリランカの人々は、(死後)涅槃に入りたいと皆思っている。だからそのために、自分の心を整えていかなければならない。上座仏教で教えているのは、お寺に行っているとそうなれるということだ。佼成会は自分の心をどのように整えたらよいか、どのように心をもったらよいかを教えている。家庭の中で自分の心を育てることが、そこまでいく始まりだと伝えている。

#### 大乘仏教への忌避感

佼成会が大乘仏教団体だとは説明しない。自分も大乘仏教団体と思わない。日本は大乘仏教の国だが、佼成会は具体的にどのような生き方をすればよいか、というのを教えている団体ということで説明する。仏さまに近づくために、仏さまの教えを人生にどのように当てはめればよいかを教えてくれる団体と言う。この説明でほとんどの人が納得する。上座仏教では十波羅蜜、佼成会では六波羅蜜、その中に忍辱行は入っているので、忍辱行をやるのにふさわしいところは家庭ですよと説明している。そうすると理解する。

#### 在家仏教であることについて

(教会長が在家で妻子がいることについて)それは問題にはならない。お坊さんのように、どのような生き方をすればよいかを伝えている。我々は在家仏教として家庭、周りの人々と一緒に修行するというのを押し出しているから大丈夫だ。お坊さんが教えてくれることは難しい。佼成会は分かりやすく教えている。お坊さんの教えは深いことを教えてくれるので、知識を学ぶのにはよいが、

人生にあてはめるのにはなかなか大変だ。

人生のいろいろな問題をもって佼成会に来る。家庭の問題、夫が酒を飲む、夫の浮気、子どもの面倒を見てくれない。そういう話はお坊さんとはなかなかできないが、佼成会ではそういう話ができる。法座で話す人もいれば、法座で話さず、個人的に話す人もいる。

#### 先祖供養について

スリランカでは亡くなった後、1週間、3カ月、1年という時に亡くなった人に回向することはある。これは2日間かけて行う。前日の夜、お坊さんを選んで1時間くらい説法してもらう。その際、亡くなった人の名前を出してその人に功德を回向する。次の日に10人か15人くらいお坊さんを家に呼んで、お昼を出すこともある。その時にその人の名前を読み上げて回向する。お坊さんを選んでやることはあるが、(佼成会の総戒名のように)家の中に先祖を入れるというのは怖い。

#### パーリ語と佼成会の二つの經典での読経供養

家で読経供養をやるときは、先に(上座仏教の)パーリ語のお経をあげて、そのあと佼成会のお経をあげる。佼成会の道場では先に佼成会のお経をあげてご供養をし、次にパーリ語のお経でのご供養になる。ご供養では、涅槃に入れますように、病人がいる時には病人が元気になりますように、試験に合格できますようにといったお願いをする。

ご供養は先祖に対してあげているのではない。ご供養をしている間は仏さまと一緒にいるという感じがする。ご供養する時間が長いと仏さまと一緒にいる時間が長くなる。普段は心が動いたりするが、お経をあげている時はそうではない。

スリランカの文化になじむように、道場でも法華経をあげて、それからパーリ語のお経をあげ、スリランカの上座仏教のようにお参りするので、そのまま続けていけばよいと思う。

### 入会後の変化と信仰してよかったこと

以前は怒りっぽかったが、今はおさえることができる。人をうらやましくなることがあったが、今はそうではない。

また、自分を良くしていくことができた。人から怒られてもそれを受け入れられるようになった。具体的には、ガミニさんにたまに電話をすると、ガミニさんがすごく長い時間怒ったりする。それを何も言わずに聞いていることができるようになった。ガミニさんが怒っている内容は、リーダーシップがなくなったこと、そしてガミニさんがやめる時に自分がやめなかったことだ。4人に自分がやめるときにやめてほしいと言っていたのに、誰もやめなかったことも怒っている。ガミニさんが道場に出てこなくなったのは去年(2015年)のことだ。ガミニさんは佼成会を辞める2年くらい前から、誰彼かまわず怒ったりしていた。

### 一番実践していること

「まず人さま」ということ。スリランカではこの考え方はない。損することもあるが、しかし、すべてが仏さまに近づく教えだと教会長さんが教えている。

### 日本から来た宗教であるということ

自分がふれあっているのは佼成会の信者さんで、相手を尊敬するというイメージだ。佼成会が日本から来た宗教ということのメリットはある。日本には皆、興味をもっている。

自分が日本に行ったのは3回で、2006年の開祖生誕100年の世界サンガ団参、その時には1週間日本に残って教師の資格をいただいた。2009年と2010年には、リーダー教育を2年にわたって、各2週間ずつ受けた。

### スリランカ教会のスタッフ・支部長になった理由

2015年に支部長に、2016年2月に教会のフルタイムのスタッフ(国際奉職員、本部が給料を支払う)になった。入会して初めてのころは、佼成会に来るのは仕事が忙しかったので、行くのはポヤの日が中心の月1~2回で、また上座仏教の

方を熱心にやっていた。スタッフになる1年くらい前はポヤの日以外に土日も来ていた。また、地方に布教に行っていた。

教会長さんから佼成会にフルタイムで来ないかと誘われた。スリランカでの定年は60歳なので、定年までまだ間があったが、教会長さんに言われたことでもあるし、自分の問題も解決していたので受けた。問題とは娘を大学に行かせたかったということで、娘が今年の10月に大学を卒業する。もともと金持ちというわけではないので、娘を教育することが一番の課題で、娘が自立するまでサポートしたいということだった。

そして、自分自身、佼成会から離れられない状況になっていた。自分の半身が佼成会になっていた。2001年にネパールで行われた南アジア全体でのセミナーに参加、2009年と2010年には日本の本部で各々2週間にわたるリーダー教育を受けた。

本部のリーダー教育はとても良かった。法華経を全部学んだ。また、バンコクでも法華経講座に2回くらい参加した。日本のリーダー教育では春日部教会での教会実習がおもしろかった。佼成会のお役をどうやってやればよいのかを学んだ。

佼成会の会員になって17年だが、その17年をかけて佼成会に残ることは心に決めていた。支部長になることも受けた。

#### 家庭拠点法座

今は家庭拠点法座を中心にやっている。教会長さんが相手の悩みを聞いてあげられるように育てている。人の悩み苦しみとかを聞いてあげられる人をつくりたいと思う。教会長さんはそのようにやろうと考えている。そしていろいろな人がやっている行動、言っていることにとらわれなくて、その人の願いを大事にするように、ということをいつも心がけている。

法座は、今は自分自身でやっている。苦しみ、悩みがあるときに、皆の心にしみこむような答えができると思う。支部長として家庭拠点の取りまとめ役を

している。

功德の体験は起きている。夫婦の問題が解決した例もある。酒を飲む夫を持つ奥さんが、なかなか夫は酒を飲むことをやめないが、自分が変わって行って、離婚しようという夫婦がまた仲良くなったりする。

#### 新道場建設とスリランカ教会の今後

現在、新しい道場をつくっている。そうしたら家賃がかからない。布施をあげるように皆に言っている。会員が多くなったら財的に自立していくことができると思う。

スリランカでは寺をつくるのには布施をする。自分たちの道場で、大きなご本尊も安置するので、道場建設ということで布施を呼びかけている。

新しい道場では、自分の悩み苦しみを伝えられる、そして皆が気楽に来られるところにしたい。新しい道場は自宅から近い。バスで10分くらい。3 kmほどの距離だ。

近隣の寺とは、これから仲良くしていけるのではないかと思う。今年(2016年)の7月にお寺が貧困家庭の子供たちに文房具を渡すので、佼成会にも53人分の文房具を提供してもらいたいと言われた。一食平和基金のお金から出費し、子どもに文房具をあげた。佼成会は家庭教育、一食平和基金での支援活動によって認められてきている。

#### ■事例3 デルゴダさん(総務部長・理事・家庭拠点長)

デルゴダさんは、スリランカ佼成会にとって大きな貢献をした人である。特に、法人格の取得はデルゴダさんの力がなければできなかった。これがあってこそ日本からの教会長のビザ、在留資格も安定したものになった。法人取得に至る苦労は多かったが、全くの正攻法で取得した。教会長はデルゴダさんを評して「鉄の女」と言っていた。英語が話せるので、教会長と教会長夫人にとって通訳を介さずに話せるほとんど唯一の人である。初代の理事長でもある。ま



写真57 デルゴダ家の仏間とデルゴダさん  
右側に佼成会の本尊がある(2016年9月, 筆者撮影)



写真58 初等教育支援で子どもに学用品を渡すデルゴダさん  
年配の人には尊敬の意味をこめてひざまずき足をさわり挨拶する。それに対して祝福する(2016年7月, スリランカ教会提供)

た、途上国では金銭問題が起こりがちだが、会計をしっかりと、明朗にした功績もある。しかし、これらがガミニさんとの葛藤を生んだことも事実である。

デルゴダさんは知的な人で、英語が堪能である。したがって英語の本からも知識を得ることができている。

### 属性

デルゴダさんは1942年10月生まれ、74歳の女性である。立正佼成ダルマ財団の理事と総務部長を務め、家庭拠点長でもある。前理事長である。デルゴダ・マダムと尊称されている<sup>(27)</sup>。子どもは息子が1人いる。

デルゴダさんはキャンディ出身であるが、教育のため、中学からコロンボに出、ミッションスクールで寮生活をして、高校を卒業した。学校では英語で教育を受けた。夫は1歳年下で、2016年6月(調査の3カ月前)に死去した。

夫は航空会社(スリランカ航空)でエンジニアとして勤めたあと、パッケージカンパニー(クッキーを入れる箱をつくる包装関係の会社)のジェネラルマネージャーになった。

### 内乱を避けてオーストラリアへ

マリワンビスケットというビスケット会社で21歳から働いており、マネージャーとして責任ある位置にいた。今は女性が仕事を持つのは普通だが、自分が仕事をもった時は、あまり多くはなかったが、まあ仕事をもってもOKといった状況だった。

スリランカでは、長い間シンハラ人(仏教徒)とタミル人(ヒンドゥ教徒)の内戦があったが、シンハラ人の内部でも内戦が起きた。政府とスリランカ人民解放戦線(JVP)という反政府団体との間の内紛があり、とりわけ1987~1989年にはJVPが武装闘争・テロを行った(1章参照)。会社の中にJVPのサポーターがいて、さまざまな問題を起こすようになった。自分はマネージャーの立場にあっただので、ターゲットとなり、食べ物の中に毒を入れられ、あやうく殺されそう

になった。また、教育事情が悪く、学校が休校になることが多く、子どもが勉強できなかった。息子の教育のためと、自分自身がこの国では安全ではなかったので、外国に行くことにした。オーストラリアには友人がいて、家に来るようにと誘ってくれた。息子は14歳(今は41歳)で、1988年のことである。夫はスリランカに残り、同居していた姉に家事の面倒を見てくれるように頼んだ。

自分は3年半オーストラリアにいた。息子がオーストラリアの大学に入学したので自分だけ帰国した。息子はオーストラリア国籍をとり、銀行員になって現在もオーストラリアに住んでいる。

#### 佼成会への入会

オーストラリアから帰ってきてから小さな店を開いた。オーストラリアから輸入したパーティーグッズを売る店である。学校のそばにあった。店にはおもしろいものがたくさんあったので、ガミニさんが店に来て、時には娘に品物を買った。ガミニさんをもともとは知らなかった。ガミニさんから佼成会を見に来ないかと誘われた。自分は上座仏教徒なので必要ないと断った。しかし、何度断ってもあきらめないガミニさんに、根負けして行った。そこで佼成会の創立者の開祖さまの「まず人さま」という教えに関心をもった。それは「自分のことはさておいて、人さまの幸せを念じさせていただく。そのような気持ちになれば、欲やとらわれから離れられる」ということだ。そこで開祖さまの本の英訳を読んだ。そして1998年に入会した。その時はガミニさんの家(を道場として)でやっていた。ガミニさんから聞いた、佼成会に入ると日本に行けるという話も魅力的だった。時々日本からレバレント(教師資格をもつ布教師)が来た。

#### 佼成会と上座仏教の違い

自分は上座仏教もやっている。上座仏教の寺はすぐ近くにある。自宅には仏間がある。食事を供える。朝夕、お経には30分かける。佼成会のお経とパーリ語のお経の両方をすると1時間かかる。

自分としては、上座仏教も大乘仏教もそれほど違うものではないと思う。上座仏教と佼成会の違いというと、上座仏教では、お寺やお坊さんに供物をささげる。お坊さんはブッダのストーリー(ジャータカ物語)の説法をする。瞑想をする。しかし、実践的ではない。他方、佼成会は実践的な仏教だ。佼成会の実践は興味深い。佼成会は大乘仏教ではなく一乗(エカヤーナ)仏教と言っている。

### 訪日

日本には10回は行った。バンコクで開催された法華経講座には2~3回行った。

### 理事長に就任

2005年に南アジア教会長だった斎藤さんが、スリランカに理事会をおいて、自分を理事長に決めた。それまでお金の管理がキチンとしていなかったのも、お布施には必ず領収書を出すようにし、会計が明朗になるようにした。

自分が理事長になってからガミニさんは自分を嫌うようになった。ガミニさんが望むことをしなかったためだと思う。なお、理事長になって、店と佼成会との両立は難しいと思い、2006年に店を閉めた。理事長は2013年までで、そのあとは総務部長になった。

### ローカルNGOとしての法人登録

法人登録を取得するのは、上座仏教の国なのでとても大変だった。ガミニさんは1998年に西州デビワラ(ガミニさんの家のある地域。コロンボの近く)の市役所で“A Voluntal social Service Organization”としてRissho Kosei-kai Sri Lanka(立正佼成会スリランカ)の保証書もらった。ガミニさんは法人登録したというが、実際には保証書だった。これは西州デビワラのみで活動できるものだった。2010年に教会長さんが来てビザの問題が起き、ビザを取得するためには法人の証明書を出さなければならなかった。書類を取りにいったら、会計報告と活動報告を出していないので、3年後くらいでだめになっていたことが分かった。10年くらい法人なしでやっていた団体になっていた。

教会長さんのビザを取るためにも法人化が必要だった。スリランカでは2004

年に大きな被害を与えた津波以後、外国からいろいろなNGOが入ってきていて、その中には悪いことをしたのもあって、インターナショナルNGOで法人登録をするのは難しく、また、これでは佼成会の本部の理事がスリランカの理事になる必要があり、現実的に難しかった。スリランカは上座仏教の国なので、大乘仏教を嫌うということもあった。しかし、教会長さんのビザをとるにはNGOにならないといけい。スリランカのNGOは防衛相が担当している。いろいろと交渉したり、試行錯誤したりしたが、2013年に、Rissho Kosei Dhamma Foundation(立正佼成ダルマ財団)としてローカルNGOに登録し、教会長さんは長期滞在のビザを取ることができるようになった。法人登録の問題は自分の役割だと思って取り組んできたので、できてほっとした<sup>(28)</sup>。

ローカルNGOなので、NGOとしての活動をしなくてはいけない。佼成会の活動としては、貧しい人にもものをあげる支援と家庭教育の講演会がある。家庭教育の活動のおかげで、佼成会が知られ始めているので重要な役割を担っている。

#### 佼成会での実践

道場には以前は毎日、今は週に3~4回行く。車で10~15分かかる。車は自分で運転する。また、地方の支部に泊りがけで行くこともある。導いた人のうち活動会員なのは10人くらいである。2005年に本尊を拝受、2007年に教師資格を拝受した。2005~2013年まで理事長、その後、総務部長のお役をしている。

法座は、ガミニさんの時代には開祖の教えをガミニさんが話す、話す、ずっとしゃべり続け、また人を叱るばかりだった。佼成会をやめなかったのは開祖さまの教えが良かったからだ。英訳された本を読んだ。教会長さんが来て良かった。ものごとが変わっていった。教会長さんが来て、佼成会の教えは何かということが分かった。

#### 自分の中にも相手の中にも仏がいる

理事長だった時も総務部長になってからも、お役にふさわしくないと自分を

悪く言う人(ガミニさん)がいた。教会長さんに相談すると、教会長さんは「あなたの中にも相手の中にも仏さまがいる。自分の内にある仏さまを感じられるようになったら、相手の仏さまを拜むことができるようになる」と言われた。上座仏教では仏さまとは真理を悟り、教えを説かれたお釈迦さまのことをいい、非常に尊い存在で、それが自分の中にも、また、相手の中にもいるというのは分かりにくかった。けれども教会長さんの実践している姿や、何度も自分なりに考える中で、自分も相手も仏さまの命をいただいている尊い存在だと思えるようになった。

#### 佼成会の教えで好きな点

教えで好きなのは、「他人を変えようとせず、自分を変えなさい」というもので、そうするとうまくいくようになるというのは本当だと思う。そして開祖さまの笑顔。「まず人さま」という、人を幸せにしたら自分も幸せになること。利己的ではなくなるように自分を変えた。最後に、すべてのものはつながっているということだ。

佼成会の教えのおかげで、もし問題が起きて心も穏やかにすることができると。それによって、充実した人生を送らせてくれる。教えによって夫が亡くなった時も穏やかな心でいられた。佼成会を知って人生が幸福だ。

#### 家庭拠点法座

ゴールとキャンディの法座所は閉めた。ポロンナルワとハバラナにはまだあるが近々閉める。それに代わって家庭拠点にするが、家庭拠点はとても良いアイデアだと思う。まず近いので、行く交通費がかからない。今のところ、家庭拠点法座には教会長さんかパーシー支部長さんが行っている。自分のところでは、毎月24日ご本尊の命日に家庭拠点法座をしている。

#### ■事例4 マーリーさん(家庭教育推進責任者・理事・家庭拠点長)

マーリーさんは、家庭教育のリーダーで、大乘仏教である佼成会を広めるの

は難しいところがあるが、家庭教育をとおして認知させ、教えを広めようとしている。また、先祖供養を実践し、交通事故に遭ったが助かったのは先祖供養のおかげと思っている。聞きとり調査は入院中の病院で行った。

### 属性

マーリーさんは1958年生まれ、58歳の女性である。家庭の主婦で、子どもは長男と長女の2人いる。学歴は高校卒、27歳の時に結婚した。夫は運輸関係の会社のマネージャーである。立正佼成ダルマ財団理事、家庭教育推進責任者(リーダー)、家庭拠点長である。

### 佼成会への入会

1996年に、夫の友人であるガミニさんから「日本の仏教団体なので、来て参加してみてください」との誘いがあり、夫と子ども2人と一緒にガミニさんの家にいった。その時はボヤの日で何かの式典をしていた。その日は30人くらい集まっていた。夫の友人の誘いなので断り切れなかった。佼成会は仏教だが、出家したお坊さんはいないことは知っていたが、大乘仏教だとは知らなかった。当時は別に何か問題をかかえていたわけではなく、実家がゴールにあって遠いので、子どもを連れて遊びに行く場所といった感じで行っていた。

### 佼成会と上座仏教の違い

初めのころは、佼成会の教えがどのようなものか知らなかった。教会長さんがスリランカに着任(2010年)してから、佼成会の教えを知るようになった。佼成会は上座仏教と教えは同じ、上座仏教では人に慈悲をとというが、佼成会は相手を拜んで感謝する、これは慈悲につながると思う。

教会長さんは、すべての人の中に仏さまがいると言うが、上座仏教では仏さま(仏陀)は、かけ離れた尊い存在なので、内側に仏さまのいのちがあるとはなかなか信じることは難しかった。けれども少しずつ分かるようになり、相手の仏さまを拜むことを実践している。



写真59 家庭教育講演会でのマーリーさん  
前列のサリーを着た女性(2016年7月, スリランカ教会提供)



写真60 交通事故でケガをして入院中のマーリーさん  
立っている女性は通訳をしてくれたルクランチさん(2016年9月, 筆者撮影)

佼成会の魅力は、相手を尊敬する、すべての物事に感謝するということだ。親に感謝することも佼成会が教えてくれた。それまでは親がやってくれるのは当たり前と思っていた。産んでくれたこと、育ててくれたことに感謝し、また、先祖に感謝することを教えた。

#### 先祖供養と交通事故での功德の体験

スリランカでは亡くなった人は怖いイメージだ。家ではご供養しない。霊がついてくるのではないかと怖い。しかし、教会長さんから自分が喜ぶと先祖も喜ぶということを聞いて感動した。先祖の供養をすることは前にはなかったが、今はしている。教会道場では毎月1日に亡くなった人の名前を読み上げて供養する。

先祖供養をしていて良かったことは、今回(2016年8月23日)の高速道路での事故もそうだと思う。高速道路で息子が居眠り運転をしてガードレールに衝突し、道路の下に横転して落ちた。車は大破した。自分は腰と両足付け根の骨にひびが入る大怪我をした<sup>(29)</sup>。けれども命が助かったのが驚きだ。息子と嫁は怪我がなかった。これは先祖のおかげだと思う。この時は、亡くなった父への回向のために親戚と協力して、ガン患者の入院先に318人分の夕飯をつくって布施した帰りだった。回向したおかげでこのくらいの怪我ですんだのだと思う。

父は社会福祉的活動をやっていた人で、自分は父の後ろについて、学生の時には姉と一緒に社会活動をしていた。父が社会活動のことができるように母がサポートしていた。自分は結婚してコロンボに来たので、母の面倒をみられなかった。会長先生の法話で、親に恩返しできるのは仏道を歩むことというのを読み、回向することを決めた。

佼成会に入る前は、上座仏教の寺で仏さまに花や線香をささげていた。佼成会に入ってから仏さまに守られているのを感じる。

#### 訪日

日本には4回行った。2006年に教師資格をいただくため、婦人部教育、そし

て2年間にわたって2週間のリーダー教育を受けに行った(調査時点以降であるが、2016年11月には体験説法を大聖堂で行った)。(主婦が外国に行けたことについてはどう思うかという問いには、)誇りに思うようになった。日本に行くと佼成会の(特に教会現場の)受け入れがすごい。大切に扱われることによって、自分も尊敬される人間になっているということで誇りに思った。

ご本尊は2008年にバンコクで拝受した。

#### 入会して変わった点

たくさんある。自分は短気で、我慢ができない人だった。問題が起こると相手のせいにしていた。しかし、教会長さんがすべては自分ということを見せてくれたので、自分を見つめるようになった。

また、スリランカでは先輩は大事で、トップリーダーを大事にするが、佼成会では平等だ。教会長さんのすべてを平等に、仏性を見ようとしている姿に感銘を受けた。

#### 先祖供養

スリランカでは、お坊さんに頼んで亡くなった人に回向してもらうことはあるが、自宅で自分自身で先祖供養は行わない。道場では毎月1日はご供養の時に亡くなった人の名前を挙げて供養する。

先祖に対してご供養することは前にはなかった。自宅でもご供養する時に先祖を意識するようになった。

#### 家庭教育講演会

家庭教育については初めから担当している。2005年に当時南アジア教会の教会長だった斎藤さんが推進した。バンコクで開催された家庭教育のセミナーに、ガミニさんが、デルゴダさんとシャーマリーさんと自分を送り出した。そこで、親として子どもをどのように愛し、育てていけばよいのかを学んだ。自分は足りない母であることを感じた。家庭教育がスリランカの親に役に立てばと思っ

てやっている。家庭教育で子どものやりたいことを大切にすることを学んだ。

教会に家庭教育のグループができたので、リーダーになった。学林の海外修養生になり帰国したナディーパさんと一緒に担当している。日本から家庭教育の講師が来た時はナディーパさんが通訳する。

佼成会は大乗仏教とされているので、広めることは難しい。しかし、家庭教育は佼成会の教えそのものなので、家庭教育で佼成会を宣伝するのは良い方法だと思った。お坊さんと話した時、仏教団体で僧侶がいないのはおかしい、みんなが仏になるというのは、スリランカではどうしても受け入れがたい、と言われた。佼成会は大乗仏教だが、上座仏教と全く違うのではないことを知らせるのには時間がかかる。家庭教育からなら入れる。

この前やった家庭教育講演会では、講師による講演が始まる前に、教会長さんにどのように夫婦が仲良くしていくかを話してもらった。そして、各々自分の家庭のことを考えながら、講演会に入った。ある男性が、妻がどのくらい大変だったか分かったと泣きながら話した。

家庭教育の講演会は学校や幼稚園の場所を借りてやる。これは自分とナディーパさんのアイディアだ。学校だと親を集めやすい。まずナディーパさんの義母が教えている学校で始めた。スリランカでは知っている人がいないと学校に入り込めないし、依頼もできない。以前、斎藤さんが南アジア教会長だった時代は、ホテルのホールを借りて、バス代をあげて、おやつをあげてと派手にやった。まず新しいことを始める時には、派手にやらなくてはいけないという考えからだ。2時間かかるところには送迎のバスを出した。こうやったので、教会長さんが着任した時にはお金はなかった。そこで知恵を出した。それに今は社会的認知が得られているので、派手にすることもない。

家庭教育がきっかけになって、どのような団体か道場を訪ねて来た人もいる。以前ホテルのホールでやっていた時に、家庭教育がきっかけで入会した人はいなかった。しかし、佼成会はこのような団体ということを知らせるきっかけにはなる。

親は自分ができなかったことを子どもにしてもらいたい。勉強しろと言ってもなかなか勉強しない。親は子どもに良い学校に行かせたい。前回リサーチをしたら、小学校5年生の時に試験があり、それに受かると良い学校に行けるので、親は子どもに合格してもらいたい。今の親は教育熱心で、子どもにはほとんど勉強だけをしてほしい。心を豊かにすることは考えていない。自分たちが小さい時には親戚の人が来ると遊んでいた。今は親戚の人が来てもふれあいがなく、勉強だけをしている。社会と接することが全くない。そして子どもが次に関心があるのがパソコンだ。

親が良い学校に行ってもらいたいというのは、子どもに良い学校に行って良い就職をしてもらいたい。また、子どもに教育を受けさせ、留学させたい。けれども留学すると子どもが帰って来ず、親が一人ぼっちになる。もともとは、子どもは親と同居して親の面倒を見るという文化があった。

日本からの講師の話はスリランカにも通じる。2009年からはナディーパさんが海外修養生を終えて帰って来たので、通訳は彼女がしている。家庭教育は教会に担当のチームがいる。家庭教育で出歩かなければならないこともあり、また、泊りがけで留守にすることもある。家庭教育の講師が日本から来る時には10日間いないこともある。夫や子どもには早めにスケジュールを伝えるようにしているが、協力してくれている。

### 導き

佼成会に導いたのは12人。そのうち今も活動しているのは4人。ほとんどの人が大乘仏教だということで、やめていった。家庭教育で知り合った人が熱心に活動し、家庭拠点長になった人もいる。家庭教育をもっとやっていけば、佼成会も広がっていくと思う。妻が佼成会の活動をするには夫の協力が必要だ。大乘仏教であるということが、皆が嫌がる点だ。

### 佼成会に入ってよかった点

(前述した)交通事故で命が助かったことは佼成会のおかげだと思う。仏さま

を信じて、命が守られた。夫も親戚の人も仏さまのおかげだと言っている。ガミニさんもお見舞いに来てくれた。ガミニさんには、佼成会に導いてくれたことに感謝している。(事故をおこした)息子は、「自分たちは何ともないのに、なぜお母さんだけがケガをしたのか」と言ったが、親戚の人がそうではないと言ってくれた。

#### 佼成会に行く頻度

週に3~4回、たまに毎日行っていた。朝、行ってご供養をし、午後3時か4時までいる。道場の掃除をしたり、信者に電話で手どりしたり、事務所の手伝いや教会長さんとの話し合いなどがある。

#### 家庭拠点法座

10~15人集まる。近所の人为主で、皆会員ではない。家庭拠点法座の拠点長の会議はある。悩みがある時には相談されたりする。

先日、夫と子どもが犬が好きでお店から犬を買ってきた。しかし、自分は犬が嫌いだという人がいた。自分だけでは分からなかったので教会長さんに相談したら、犬を大事にしたらよいと言われた。そうするようにしたら、家の雰囲気が変わってきて、犬の面倒を見ているので、夫がやさしくなり、協力してくれるようになったということもあった。

#### どのようにしたら佼成会が広まるか

佼成会は上座仏教と同じ仏さまで、仏さまは一人しかいないということを強調する。

#### 教会長の存在

教会長さんは仏さまのような存在だ。どんな問題であっても教えてくれる素晴らしい先生だ。ガミニさんが教会長さんを気に入らなくて、怒ったりしていた。教会長さんはそれを素直に受け取り、自分たちが言い返そうと思っても、教会長さんにはそのような雰囲気はなかった。そこで、批判をするガミニさんを嫌いになった。自分たちがガミニさんの悪口を言っている、教会長さん

はガミニさんの悪口を言わず、「私はガミニさんの中の仏さまを拝んでいます」と言った。

#### ■事例5 シャーマリーさん(コロンボ布教会議議長・家庭拠点長)

シャーマリーさんは、2004年の入会である。スリランカ南部の海岸部を大きな津波が襲った時に、津波被害がひどかったところに旅行に行くはずだったが、佼成会に行ったことで命が救われた、とガミニさんを命の恩人と思っている。ガミニさんに情報を流しており、現在の教会のあり方に批判的なところがある。

#### 属性

シャーマリーさんは1966年10月生まれ、50歳の女性である。学歴は高校卒である。20歳で結婚した。義母がイタリアにいたので、夫が先にイタリアへ働きに行き、その後、1989年にイタリアに行って、洋服の縫製工場で働いた。7年間滞在の後、1996年にスリランカに帰国した。帰国したのは、1992年に生まれた長男をスリランカの学校に行かせたかったからである。また、次男も妊娠中で子どもの教育のことを考えた。

#### 佼成会への入会

佼成会に入会したのは2004年12月26日である。導きの親はガミニさん。夫がイタリアから帰国後、貯めた金で車を購入し、レンタカーのディーラーをしていたが、商売がうまくいかなかった。お金を稼ぐために日本に働きに行きたいと思って、仲介するエージェントを探している時に、ガミニさんのところで日本に人を送っているという噂を聞き、訪ねた。ガミニさんから「日本に人を送ることはしていない。仏教団体です。ポヤの日に来てください」と言われた。12月10日のことだった。その月のポヤの日は12月26日だった。イタリアから義母がスリランカに帰ってきていたので、南部の海岸沿いにあるゴールに旅行に行くつもりだった。しかし、ガミニさんにポヤの日に来るように誘われた



写真61 布教会議で議長を務めるシャーマリーさん(白板の前に座っている女性)



写真62 布教会議で貧困地域への支援の依頼について説明している佳代子さん  
受けるかどうかを会議にかけている。シャーマリーさんは後ろ姿の人

(2016年9月, 筆者撮影)

ので、参加してみようと思ってガミニさん宅に行った。12月26日にはスマトラ沖地震によってスリランカの湾岸地方を津波が襲ったので、もしその日にゴールに行っていたら、自分の命はなかった<sup>(30)</sup>。ガミニさんのおかげで命が助かったと思っている。その後、道場でやるすべての行事に参加した。長男(24歳)は青年部で活動、夫も活動している。

### 佼成会と上座仏教の違い

高校を卒業するまでは親と一緒にいたので、上座仏教のお寺にお参りに行ったり、日曜学校に入っていたが、信仰ではなく遊びに行っていたようなものだった。結婚後は上座仏教をほとんどやっていない。

スリランカに帰って一番初めてお祀り込みをしたのは佼成会の仏さまだ。額装本尊を祀る時に、上座仏教の仏さまも一緒に祀った。2008年にはバンコクで仏像のご本尊をいただいた。

スリランカでは出家者を大事にする。お寺に行くと出家者であるお坊さんがいるが、普通に話すことはできない。佼成会では道場に来ると教会長さんに何でも相談できる。信者の人たちと仲良くすることもできるし、話もすることができる。教会長さんと話をする時は、通訳をとおすので分かりにくいこともあるけれども。

上座仏教の中で育っているのが、佼成会の教えを理解するのは大変だ。教会長さんの言う「皆の中に仏がいる」というのはおかしいと思う。信じるのは難しい。

### 入会後の心の変化

以前は子供に命令していた。スリランカでは親はああしなさいと子どもに命令して、子どもの気持ちや心を聞くことはしない。しかし、そうしてはいけないことを家庭教育で学んだ。

教えや実践で気に入っているのは「自分が変われば相手が変わる」ということだ。体験はたくさんある。たとえば、夫は自分の母ときょうだいとはあまり

良い関係ではない。夫は母ときょうだいを気に入らない。この前、夫が来て、「あなたの妹と道で会ったよ」と言った。それで「妹と話したのですか」と聞いたら、「話していないけれど、義妹が笑顔で返したので、自分も笑顔で返した」と言った。前は話をしたのかなどと聞けるような雰囲気ではなかった。自分が変わったので、夫も妹と会った時に笑顔で返せるようになったと思う。教会長さんが親に感謝するようにと言っているのだから、自分が親に感謝するようになってから夫も変わった。

### 訪日

日本には2006年、開祖生誕100年の世界サンガ結集団参で行った。日本は地震があるので怖い。日本人はやさしく、正直。忙しく歩いている。開祖さまの生誕地で道場がある新潟県の菅沼にも行った。弟は日本に住んでいるので、団参のあと10日間弟に案内してもらった。日本には15年くらい住んでいる。きょうだいは5人。自分は長女、妹3人と弟。2番目の妹(独身)が親の面倒を見ている。末の妹も日本にいる。弟は日本から帰って来ないだろう。妹の夫はスリランカ人だが、妹は留学してそのまま日本にいる。

### 導き

スリランカでは日本から来た宗教というに興味をもつ人もいる。日本の他の宗教には行ったことはないが、真如苑、SGIほか4つか5つある。導きは親戚を15人(ハバラナの事例10も含む)、学校の同級生が21人で、合計36人だ。導きをして道場に連れてくる時は、道場の先輩がよく見てあげることが大切だと思う。道場での受け入れが大切だ。人間関係で嫌な思いをすると道場に来なくなる。

### 家庭拠点法座

家庭拠点長には自分から手を挙げた。家庭拠点の法座は、10～13時。今は教会長さんが各拠点に来てやっている。教会長さんが来なくても自分は大丈夫だ。家庭拠点法座には10～12人くらい集まる。法座の中で、皆の前で話すのを嫌がっている人もいる。あとから噂になるのを恐れている人もいる。そこで問題があ

る人を個人的に手どりする努力をしている。個人的に話すと、自分のことを信頼してたくさん言ってくれたりする。一人ひとりの手どりが大切だと思う。

家庭拠点法座の時は、佼成会式のご供養はほとんど2番(方便品)と16番(如来寿量品)だけで、パーリ語のお経もあげると40分くらいかかる。

#### 布教会議について

布教会議は毎月第二日曜にある。議長をしている。教会長さんから議長をやってほしいと言われたわけではなく、自分からやりたいと手を挙げた。式次第は教会長さんと相談してつくる。出席者は教会長、支部長、議長、理事長、家庭拠点長20人である。2015年1月から家庭拠点という制度が始まったので、家庭拠点長の意見を聞かないといけない。

自分はあまり仏教には関心がなく、上座仏教もよく知らないが、理事会が決めたことを我々に伝えてくる。家庭拠点長の意見も上にあげたらよい。布教会議に来て何も話さないで帰る人がいる。理事会が決定機関である。自分は男性のように口調が強いのでぶつかり合いもある。

支部長のパーシーさんは佼成会に17年いたかもしれないが、仕事をしていたので、佼成会にいた時間が少ない。今、勉強の最中だと思う。

#### 新しい道場建設

今の道場には車で40分、新しい道場には20分かかる。自分は高速道路があるので近い。信者はこの近辺(今の道場所在地)に住んでいる人が多いので、2回バスを乗り換えて行くかどうかは疑問だ。

### ■事例6 マンツリーさん(家庭拠点長)

マンツリーさんは、2008年の入会で初期メンバーではないが、人生の苦勞の中で入会し、佼成会の中で、心の平安と生きがいと、自分を心配してくれる人を得ている。苦に対してもとらえ方を変え、新たな人生を歩んでいる。

## 属性

マンツリーさんは1955年11月生まれ、60歳の女性である。中学校卒業後、体育系の専門学校を出た。若いころはハイジャンプ、ロングジャンプの選手だった。

既婚であるが、夫とは長期間別居している。子どもは長女と長男がおり、2人ともイギリスに住んでいる。以前インターナショナルスクールの体育教師をしていたことがある。現在は、ドイツ在住の姉が建てた家に一人で住み、イタリアにいる弟からも一部経済的な支援を受け、洋裁の仕事をして生計をたてている。

## 佼成会への入会と夫婦関係の問題

佼成会に入会したのは2008年のことである。学生時代からのとても仲が良い友人から、家庭教育講演会に2回誘われた。その時は行かなかったが、ポヤデーで道場に上座仏教のお坊さんが来ている時に誘われて行ったところ、とても雰囲気よかった。

その時は長年にわたる夫婦関係の問題を抱えていた。夫との関係は結婚当初からうまくいっていなかった。1974年に結婚したが、夫になった人は近所でもワルで有名な青年で、わけもわからずその人の家に連れ去られ、3日後に兄によって見つけられたが、厳しかった父と兄は家に戻るのを許してくれず、仕方なく結婚することになった。その時18歳だった。夫は女性関係にルーズで、酒を飲み、マリファナを吸っていた。次から次へと女性と関係をもち浮気が絶えなかった。仕事もほとんどしていなかったので、生活は苦しかった。1975年に長女が生まれてからは親との関係が修復され、生活費の援助をしてくれるようになった。その後、親と同居するようになったが、夫が働かないので、自分はずもともと陸上の選手で、体育関係の専門学校を卒業したこともあり、インターナショナルスクールで23歳から教師として働いた。しかし、仕事に行っている間に夫が自宅に女性を連れ込んでいる、という近所の人の話を聞いて心配にな



写真63 布教会議で元気に手をあげるマンツリーさん(2016年9月, 筆者撮影)



写真64 マンツリーさんの家のご宝前  
上座仏教のものは置かれていない  
(2016年9月, 筆者撮影)



写真65 4人の家庭拠点法座  
(2016年1月, スリランカ教会提供)

り仕事をやめた。36歳の時だった。

1984年に長男が生まれた。1986年に頼りにしていた父が亡くなり、翌年、母も亡くなった。今度はドイツにいる姉が助けてくれ、今の家を買って、自分を住まわせてくれた。そして、裁縫の腕を活かし、サリーやスクール制服などの洋裁で生活費の一部を稼ぐようになった。

夫からはよく殴られた。2002年3月には泥酔した夫から激しい暴力を受け、入院した。口ではいえないほどの酷い暴力だった。このケガをみて、病院の人は警察に届けた。長男は別居したほうがよいと言い、また警察が夫を捜索したが見つからず、その日から夫は帰って来なかった。別居後はイタリアにいる兄が送金してくれるようになった。このように長年にわたって夫との関係で体とともに心の傷を受け、それが継続している時に、佼成会と出会った。夫とは別居して13年になる。

#### 入会以前の宗教と佼成会の本尊

父はカトリック、母は上座仏教だが、自分はカトリック教徒として育った。以前は、カトリック教会にたまに行っていた。聖書も読んだ。母はもともと仏教で、小さい時から仏教に関心をもっていた。カトリックは佼成会に入会してからやめた。入会した年の2008年に額装本尊を自宅に祀り、2010年にタイのバンコクで仏像の本尊像を拝受した。

#### 入会時の状況

入会した時は、まだ教会長さんがいなかった。4つのチャプターに分かれて、週1回、道場当番として、掃除をしたり、飯水茶(紅茶。スリランカには仏さまにはミルクティーは上げない習慣)のお給仕をしていた。当時の法座はチャプターのリーダーかガミニさんがしていた。

#### 教会長との出会いと夫への恨み心の変化

学校では仏教の時間があり、四諦の法門は習う。上座仏教の僧は苦難をカルマのせいに行っている。佼成会では四諦の法門をつかって、問題をどのように解

決していくかを示す。現象から学んで自分を成長させる。スリランカの一般的な考え方だと、仏さま(仏陀)は尊くて近寄れない存在だが、教会長さんは、「あなたの中にも仏さまがいる」「相手の中にも仏さまがいる」と言って、あの酷い夫にも、愛しい子どもにも平等に仏性があると教えてくれた。しかし、暴力をふるい、苦しめた夫に対して、そのような心を持つことができるのかと思った。教会長さんからは「ご主人に対して恨みの心を持たないようにできませんか。ご主人のおかげで大切な子どもさんを授かったのですから」と言われた。これまでずっと夫を恨み続けていたが、感謝の気持ちをもって夫の心の中にいる仏さまを敬うように努力するようになった。娘は大学を出て結婚前は銀行員をしていたが、今はイギリスで商売をしている。夫は酒とマリファナが日常だったが、息子はタバコも吸わず、酒も飲まない。そしてイギリスで大学院を出て結婚した。2人とも、もうスリランカには帰って来ないだろう。夫には別の女性の間に子どももいる。

長い間、夫との関係でいろいろな苦勞があった。今は気が楽になった。教会長さんが教えてくれたおかげだ。イギリスの息子が病気の時も、教会長さんが祈願供養をしてくれた。姉が病気でひどい状態になっていた時は、教会長さんが陀羅尼<sup>ダラニ</sup>のお経をあげて、皆で祈願をしてくれた。教会長さんは特別なパワーを持っていると思う。

人からも変わったと言われる。昔はとても厳しかったが、今は皆にやさしくなった。

### 日本への団参

2006年の世界サンガの集まりの時に日本に団参で行った。日本は素晴らしい国だと聞いていたし、本部の大聖堂を見たいと思った。その時に教師の資格もいただいた。世界サンガの時に、スリランカの代表として奉獻のお役で大聖堂の台上にあがった。

団参に行きたいと願っていたら、いろいろなところからお金が入ってきて、

費用を出すことができた。また、日本に行くのに長期間留守にするので、泥棒が入るのではないかということや、飼い犬の餌やりも心配だったが、近所の人が餌をやってくれ、留守にしてもなんとまあなかった。

#### 導きをする時のやり方

佼成会が日本の団体であることは魅力がある。しかし、日本に関心をもっているけれど、大乘仏教ですなと言われる。スリランカの人は大乘仏教が怖いみたいだ。

佼成会に来てみるようにと言っても、佼成会に入るとお坊さんに怒られるからダメと言う人もいます。お寺より良いところですから、やさしい人たちですから、と誘う。また、開祖さまが世界平和を目的に佼成会を設立したということも説明する。これまで導いたのは30人。そのうち道場に来ているのは10人だ。関係は親戚と友人である。

自分の生き方が変わったことを示して「後ろ姿で人を導く」のが大事だと思う。自分を見て、喜びにあふれている人生ですなと関心をもって聞く人もいます。

#### 自分の内面の変化と友人ができた喜び

実際、佼成会と出会って自分自身とても変わった。昔はいつも心の底に悲しみがあつた。洋裁の仕事以外に、姉がドイツから帰ってくる時に、兄がイタリアから帰ってくる時に、また、息子がイギリスから帰ってくる時にもお金をくれる。今では、いろいろなところからお金が入ってきて生活が楽になった。

これまでは一人暮らしで家の中にばかりいたが、佼成会で友人がたくさんできた。今、手を怪我してしまって不自由だが、手伝うから言ってねと、飛んで来てくれる人もいます。教会長さんにはこの前転んで、怪我をしたことは言わなかった。教会長さんは夜中に電話をしても飛んで来てくれる。誰にでもやさしい。カトリック教会にはあまり行かなかつたし、友人もいなかつた。夫のことで恥ずかしく、カトリック教会で夫がいないことなど、いろいろ言われるのでいやだった。娘もいろいろ言われた。

道場にはバスを乗り継いで30分くらいかかるが、1日とポヤデー以外に、週に2~3回は行っている。朝8時ころに行き、午後1~4時の間に帰る。朝は皆と一緒にワイワイとご宝前のお給仕をする。来年できる新しい道場は家からは遠くなるが、朝の6時に起きてでも行くつもりだ。

#### 家庭拠点法座

家庭拠点法座の制度ができる前は、チャプターに分けて道場当番をして、ご宝前の飯水茶の準備や掃除をしてきたが、家庭拠点ができてから、チャプターごとの当番の割り当てはなくなって、道場に来た人がやる。1日の命日、ポヤデー、大きな行事には2つの家庭拠点が担当する。

家庭拠点になってから、(1日とポヤデー以外の普通の日に)この日には行かないといけないう日なくなった。前よりも行く日が減った。家庭拠点での集まりや法座は、2カ月に一度教会長さんが来てやるが、1カ月に一度はするようになりたい。教会長さんが法座に来るのは、皆が喜んでいる。

## (2) ポロンナルワ

ポロンナルワはスリランカ佼成会にとって最初の地方拠点である。

事例7のシャンティさん(63歳、女性)は、2000年に入会したポロンナルワの草分けの一人で、ポロンナルワ拠点の管理責任者、家庭拠点長である。事例8のバンダーラさん(54歳、男性)は2006年に入会し、会計の役と家庭拠点長をしている。ダヤさん(61歳、女性)は2014年に入会した新しい会員で、家庭拠点長である。ポロンナルワでの布教において魅力的だったのは、入会すれば日本に行ける、バンコクに行ける(タイのバンコクには研修施設がある)というものだった。これはポロンナルワでは、ある程度の経済力がある人々が会員になっていることを意味する。リーダーは日本行きやバンコク行きの人選の権限をもっていたことは、その権益がおびやかされることへの古参リーダーであるシャンティさんの不快感の様相からもうかがえる。バンダーラさんの事例では、

日本でのリーダー教育(各年2週間で2年間)によって、教えをより深く学ぶようになった有様がみえる。ダヤさんの事例は、日本やバンコクに行きたいという動機ではなく、教えの知的な理解をする人物が登場し、地域道場での会員の集まりから家庭拠点にすることで、新たな展開が生じていることがわかる。

### ■事例7 シャンティさん(ポロンナルワ拠点責任者・家庭拠点長)

シャンティさんは、ポロンナルワでの佼成会の最初の会員のうちの一人であり、ポロンナルワの拠点である法座所(道場)の責任者である<sup>(31)</sup>。シャンティさんの語りの中には、これまでのポロンナルワの人々の主たる入会動機は、日本やバンコクに行きたいということであること、リーダーがその人選にかかわる権益をもっていることが示されている。半面、信仰的な話はあまり聞くことができなかつたが、ポロンナルワでの佼成会の歴史、展開が分かる内容である。

#### 属性

シャンティさんは1952年12月生まれ、63歳の女性である。ポロンナルワ拠点責任者で、家庭拠点長でもある。高校卒で、子どもは2人(男、女)おり、子どもが生まれてから仕事をやめた。9年前に会計士だった夫が亡くなり、一人暮らしをしている。

#### 佼成会への入会

2000年に佼成会に入会した。ガミニさんの導きである。親戚のガラパッティさん(男性、今は佼成会に来ていない。その娘は海外修養生になり学林に行った)とハリソンさん(男性、イトコ)と一緒に、コロンボに住んでいるガミニさんの家を訪ねた。ガミニさんは、当時日本から輸入した中古の冷蔵庫の販売をしていたので、同じような商売をしたいということで行ったのである。その時はちょうどボヤの日だった。ガミニさんは「入会すれば日本に行ける」と勧めた。当時、日本にはなかなか行けない状況で、一生行かれないと思っていたので、そ



写真66 ボロンナルワ法座所(道場)でご供養をするシャンティさん  
前列左の女性(2016年3月, スリランカ教会提供)



写真67 法座所で話をするシャンティさん  
壁にかかっているものは開祖の写真(2016年9月, 筆者撮影)

の話は魅力的だった。日本に行きたかったので入会した。

それから、コロomboのガミニさんのところにポヤの日に行くようになった。時には日本から人が来てセミナーがあったりもした。どのように生きていくのか、どのように相手と話し合うのか、挨拶をどのようにすればよいのか、脱いだ靴は揃えてならべるようにする、などのやるべきことを教えていた。

#### 上座仏教と佼成会の違い

佼成会は一乗の教えなので、上座仏教とそれほど違いはないように思う。佼成会は大乗仏教とはちょっと違うのではないかと思うようになった。

#### ポロンナルワでの布教

2002年にはコロomboに行くのをやめ、コロomboからデルゴダさんやパーシーさんが来て自宅に泊まり、布教をするようになった。自宅のサロンには30人くらいは入るが、入りきれないほど人が集まった時もあった。自分の友人や夫の友人を導いた。「入会すれば日本に行ける、バンコクに行ける」ということを言って入会を誘った。

#### 2006年の世界サンガ団参りと3人の逃亡

2006年の開祖生誕100年に、世界サンガ結集大会が日本であった。ポロンナルワからも参加した。普通では日本行のビザを取ることはなかなか難しかったが、佼成会でやってくれたので取得でき、また、その当時はチケット、ビザ代だけで、日本での宿泊費、観光などの費用は本部の負担だった。スリランカからは54人が参加した。ポロンナルワの参加者は15人で、リーダーはハリソンさん、自分はアシスタントリーダーだった。ところがこの団参りの時に、3人の男性が逃亡してしまった。それは皆ポロンナルワの人たちだった。これはとても辛かった。彼らはとりわけ困窮していたわけではなく、経済状況は良いほうだった。逃げた3人のうち2人は、会員になって1年くらいの人だった。1人は6カ月後、もう1人は1年後、もう1人は3年後にスリランカに戻った。このうちの1人は日本で指3本を切断した。自分たちに悲しみを与えたのでそうなったのだと思う。

逃亡した後、(スリランカも包括される)南アジア教会の教会長だった斎藤さんが、ハリソンさんをおろして、自分がリーダーになった。

### 日本とバンコク行き

日本には2回、バンコクには1回行った。日本には2006年の世界サンガ団参、2009年の団参で、2009年の時には本部で教師の資格をいただいた。バンコクには2007年に行き、スリランカからの本尊勧請者13人のうちの1人として本尊をいただいた。

### 家庭教育講演会の開催と道場の設置

2007年に、当時南アジア教会長だった斎藤さんから、ポロンナルワで家庭教育の講演会を開いてほしいという依頼があり、日本から家庭教育研究所所長の丸山貴代さんと呼び、ホテルのホールを借りて家庭教育講演会を開催した。500人くらいの人々が参加した。

その時に、斎藤さんから、賃貸料を出すので自宅の一部を道場に貸してほしいと言われたが、夫が2007年8月に急逝したので、そうした気持ちにはなれず、2007年12月に別の場所に道場を借りることになった。その当時は、ポヤの日に集まっていた。それ以外の日にも週に一度だけ休むくらいで、ほぼ毎日道場当番に行った。そこには他のメンバーも何人か来たが、ほとんどが友人だったので、悩みを話し合ったり、お茶を飲んだりしていた。今のようにバンコクや日本に行けなかったので、集まっていた。2012年頃(4年前)から来やすい日は日曜日だということになり、日曜日に集まるようになった。

ポロンナルワで活気があった時期は2008～2012年である。ポヤの日には毎回40人くらい集まっていた。2013年頃からは、毎年日本やバンコクに行けるようになったので、熱心さは薄らいだ。日本やバンコクに行く人選に入らなかったのもやめた人もいる。

会員に学校や幼稚園の先生が多いのは、夫が亡くなった時に、しばらく娘の家に住んでいたが、隣の家の人のお姉さんが幼稚園の先生であったこと、また、

お兄さんが銀行員で、その人が学校の校長先生を導き、それから学校の先生の入会が増えた。日本に観光に行きたいという人が多かった。

#### 新しい人がリーダーになろうとすることへの腹立ち

16年間佼成会を一生懸命やってきている。悩みや苦しいことがあってもやってきた。娘のところに金曜日に行っても土曜日に帰るようにして、日曜日の集まりには出るようにしている。しかし、まだ入会して2~3年しかたっていない人がリーダーになりたいと言ってくる。日本やバンコクに行きたいという目的でリーダーシップをとろうとしている<sup>(32)</sup>。学校の先生たちは日本に行きたい、バンコクに行きたいという理由で、来ている人が多い。バンコクのセミナーに家族で行きたいという人もいたが、教会長さんが断っていた。ツアーで行くと10万ルピーを超えるが、セミナーで行くと10日間でツアーもできて5万ルピーで済む。

こうしたことに対して、前だと腹が立ったが、今は受け入れ、落ち込まないようにできるようになった。

#### 家庭拠点法座と道場の閉鎖

法座は好きで、いろいろな家族の悩み、子どもの悩みなど、友人同士だとプライベートなことも話してくれる。この前、自宅で家庭拠点法座があった時には、そうした話が出た。

道場での集まりでは、会員がほとんどだった。家庭拠点になってからは、未会員が多く、ほとんどが近所の人だ。教会長さんが会員を呼ばずに未会員の人を呼んでくださいと言っている。道場がなくなると会員が集まる場所がなくなる<sup>(33)</sup>。

#### 佼成会の教えで気に入っていることと功德の体験

佼成会の教えで気に入っているのは、菩薩行で、菩薩になれるということが気に入っている。

2011年にひざの手術をした時に、一生歩けないかもしれないと言われた。仏

さまをお願いして歩けるようになった。(佼成会の何がよくて16年間残ってきたのかという問いに対しては)体の中に入りこんでいるので離れたくない。

## ■事例8 バンダーラさん(ポロンナルワ会計、家庭拠点長)

バンダーラさんの場合、日本でのリーダー教育への参加が教えの理解に寄与した。会計処理に問題があった前任者を引き継いで会計を担当し、明朗会計に取り組んでいる。

### 属性

バンダーラさんは1962年10月生まれ、54歳の男性である。高校卒業後に英語とマーケティングの二つの専門学校(各1年)を出た。仕事は保険会社(AIU)のシニア・リージョナル・エグゼクティブである。既婚で、3人の息子がいる。ポロンナルワの会計を務め、家庭拠点長でもある。

### 佼成会への入会

2006年に佼成会に入会した。仕事関係での知り合いで、保険会社のエージェント(現場で保険を勧誘する人)をしていたハリソンさんから、「日本の仏教団体に来ないか」とたびたび誘われた。そう言われても、その当時はポロンナルワの隣町に住んでいたので、気にしなかった。しかし、その後、親戚がコロンボに行くというので、ポロンナルワのバス停まで送っていった時に、ハリソンさんが数人の人と一緒にいて、開祖生誕100年の世界サンガで団体を日本に連れて行くというのを聞いて関心をもった。なかなか行けなかったが、ポロンナルワで仕事をするようになり、道場が近くにできたので行ってみようという気になった。入会時に何か問題をもっていたということではなかった。

### 佼成会と上座仏教の違い

道場に行った時に仏さま(の姿)が違うと思った。人生を良くするための教えだと思った。



写真68 バンダーラさん宅のご宝前

上段にはスリランカの仏像と佼成会の本尊、二段目には開祖・脇祖の写真がある  
(2016年9月、筆者撮影)

父は還俗したが上座仏教の元僧侶だった。第二次世界大戦の時に還俗して戦った。親戚にも僧侶がいる。親は上座仏教に熱心だった。上座仏教と佼成会の違いはあまり思わないが、上座仏教と大乘仏教のスピリットが佼成会に入っていると思う。大乘仏教というものには抵抗があるが、佼成会は大乘仏教、上座仏教ということではなく、在家仏教として、朝から晩までどのような生き方をすればよいか教えるものだ。上座仏教と大乘仏教のスピリットが入っているというのは、日本でリーダー教育を受けた時に、講師のアメリカ人の先生から学んだことだ。

自分たちは、ジャータカ物語(釈尊が前世に菩薩として修行していた時、生きとし生けるものを教え導いたエピソードを集めた物語。仏教の教えを親しみやすく説いたもの。上座仏教諸国で広く語り伝えられている)を学ぶ。佼成会のセミナーに行くとジャータカ物語の精神を理解する。

### バンコクでの本尊拝受と法華経講座・日本での教師資格拝受とリーダー教育

ご本尊はバンコクで受けた。ポロナルワのライオンズクラブのプレジデントを2005年からやっているの、この用でもバンコクに行くので、いつか分からない。2010年にバンコクの法華経講座(1週間)に行った。2011年には教師資格を受けるために日本の本部に行った。そして2013年と2014年に日本でリーダー教育を受けた。リーダー教育に行くことは自分から希望したのではなかった。行けば2年間にわたって2週間行かないといけない。普通、会社を長期間にわたって休めないが、いつも休まないの、特別に休暇をくれた。

リーダー教育ではいろいろと学んだ。その中で一番印象深かったのは教会実習だ。その時に手どりをするために信者の家に行った。佼成会の人たちはやさしく、仲良しだった。導きに歩いたが、一般の人と佼成会の人との違いが分かった。

先祖供養については、日本で教師の資格をいただいた後、教会実習で、ご供養をするのに、導師と協導師の役の男性がスーツを着ていたのを見た。スリランカではお坊さんがやるが、佼成会では自分でやれるのでおもしろかった。スリランカではお坊さんに布施する時に、神々や先祖にも功德を回向する。

### 佼成会が日本から来た宗教であることについて

佼成会は日本の仏教団体で、分かりやすく人生にあてはめやすい教えをする。日本についてはすべてのことが好き。きれいな国。日本と日本人はきちんとしている。だから国が発展できたのだと思う。日本のことについては学校で学んだり、漫画で見たりした。日本人は成功しているので、いつか日本に行きたいと思っていたが、佼成会のおかげで日本に行けた。

### 導き

会社の人、友人、親戚、定年になっている人を20人くらいを導いた。道場に来たことがある人でも転勤になったり、忙しくなって来なくなった人もいる。

(日本やバンコクに行けると言って導くのかという問いに対しては)まず言うのは道場に來てみてくださいということだ。海外にはいつ行けるようになるの

かと聞かれた時には、自分は5年くらい活動をしていて行けたんですよと答えることもある。

#### 佼成会に入って変わったこと

前は怒る気持ちがあったが、今は怒る気持ちが出なくなった。受けとめ方を変えた。悩みを持っている人がいれば、悩みの原因を言える。佼成会の教えにふれているので、皆が尊敬してくれている。誰かが怒られたりしていると悲しい思いがする。しかし、どこが足りなくて、その人が怒られているのか、自分を見つめようとしている。そして自分の足りない点を思う。

#### 会計の役

会計の役をするようになったのは3～4年前から。その前はハリソンさんの息子さんやっていた。今は布施が少ないので、2カ月に一度、布施箱を開けることにしている。日曜日の道場に集まる日に教会長さんが来た時には布施する人はいる。自分がやり始めてから5万7000ルピーたまった。

#### 家庭拠点法座

道場がなくなるのは悲しい。週1回でも道場のあるおかげで皆に会えるので残してほしい。家庭拠点法座は新しい人を誘うことから始まる。家庭拠点法座に人を集めるのは皆忙しいので大変。あれがあるから、これがあるから行けないと言われる。コロンボから人が来るという特別なプログラムがあると道場に集まったが、これからは自分たちでやらないといけない。

#### 教えや実践で気に入っていること

ご供養が好きだ。朝は6時30分に自宅を出るので、ご供養するのは晩のみだが毎日している。パーリ語のお経を先にあげ、次に佼成会のお経をあげる。30分かかる。在家仏教徒として、仏教の教えを自分の人生にどうあてはめるかを学ぶために続けている。

#### どこをアピールしたら伸びるか

法華経の学びを深めるようにしたらよい。パーシー支部長を通して分かりや

すく説いたほうがよい。以前、バンコクの法華経講座に行ったが、今、分からないところが出ている。法華経講座にもう一度行きたくなくなった。

## ■事例9 ダヤさん(家庭拠点長)

ダヤさんは知的な人で、バンコクで学んだ法華経講座の資料を準備して、筆者たちの訪問を待っていてくれた。ポロンナルワでよくみられる日本に行きたい、バンコクに行きたいという理由ではない入会で、家庭拠点法座システムにすることで、旧来のリーダーから離れて活動することができるようになるという、新しい展開を象徴する人である。

### 属性

ダヤさんは1955年5月生まれ、61歳の女性である。家庭拠点長を2015年から務める。大学卒で、健康省のアドミニストレーション・オフィサー(公務員)をしていたが、59歳で定年退職した。夫とは死別した。息子が3人おり、三男家族と同居している。

### 佼成会への入会

入会したのは2014年のことで、入会后2年ちょっとである。幼稚園の先生のクスマさんから誘われた。健康省の前に教育省にいた時に、クスマさんの夫が同僚だった。また別の省に所属していた時もクスマさんの妹が一緒だった。クスマさんからは、「日本の仏教団体に入っているが、よい団体なので来てください」と言われた。当時は仕事をしていたので行かれなかったが、2014年2月に定年になり行かれるようになった。

入会時には特に問題を抱えてはいなかった。夫はずいぶん前(2000年)に亡くなっていて、3人の息子も独立し、自立していた。

ポロンナルワの道場でご供養をするときに「おたすき」をかけるようにと言われた。クスマさんに聞くと「法華経に帰依します」という意味だと説明して

スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相



写真69 ダヤさんと後上にあるご宝前  
スリランカの仏像と並置して額装本尊がある(2016年9月, 筆者撮影)



写真70 家庭拠点長のサーティフィケート  
(2016年9月, 筆者撮影)

くれた。変だと思っていたが、おたすきの説明を聞いて、納得した。法華経は仏さまの教えだということは知っていた。日本のお坊さん(日本山妙法寺の僧)が太鼓をたたきながら歩いていたのも見たことがあるし、大乘仏教のことも聞いたことがある。

#### 大乘仏教・在家仏教について

生まれた時から(上座)仏教徒として生まれ、日曜学校で仏教のことを学んでいる。自分はあまり大乘仏教がどうのという思いはない。佼成会は同じ仏教団体だと思う。お参りの仕方が違うがたくさんのことを教えてくれる。

(出家ではなく、教会長のように在家の人がお坊さんの役割をしていることについて、どう思うかという問いには)自分は在家も出家も関係ないと思う。スリランカでも在家の人で説法をする人もいる。あのように快適な日本から途上国に来て、苦しい生活をしているのはなんのためなのかと思った。それは、伝えようとする大事なことがあるのではないかと思うので、教会長さんの教えていることから大事なことを学びたい。これは自分が市役所でも働いていたことがあるので、その時に外国からNGOが来て、いろいろなプログラムでスリランカのためにやろうとしていた。しかし、「してあげよう」という気持ちがなかなか受け入れられなかったりもした。スリランカ人にとって必要なように動かないと良い結果は出ない。そのようなことを何回も味わってきた。NGOと付き合ってきたので、体験を持っている。

#### 佼成会と上座仏教の違い

上座仏教では瞑想を行う。寺には1カ月に3回は行く。ボヤとダーナ(僧侶への食事の布施)と在家の会議だ。今は雨安居の時期なので毎日行く。寺まで1.5kmの距離だ。三男夫婦と孫と一緒に住んでいるので息子に連れて行ってもらう。

お寺のお坊さんには個人的な悩みは話せない。教会長さんには何でも悩みを話せる。自分の悩みはないが、家庭拠点法座に集う皆さんの悩みを話している。

もう一つの違いは、上座仏教では自分が涅槃に入るように修行する。しかし、

佼成会ではそういうことではなくて、相手を大事にしていくこと、自分が変わって、そのつながりで家庭、国家、世界を大切にすることを教えてくれる。「心田を耕す」という教えなので、自分がどのように素直でやさしく相手に接すればよいかを教えてもらった。以前とは違って問題が起きた時は見方を変えることができた。こうしたことはコロンボで行われた家庭拠点長向けのセミナー(昨年3回、今年1回、1泊2日で40人参加)や、家庭教育の講演会で学んだ。

教会長さんは「自分の中に仏さまがいる」ということを教えてくれた。自分が永遠の仏の命を持っているという、今まで聞いたことのない教えを聞いて、びっくりした。初めて聞いたので考えさせられた。

法華経の中に、やさしい心でない人をやさしい心にする、という言葉がある。そういうことを読んでいくと、自分もそのようにしようという気になる。また、法華経の法師品第十番には、法師としてどのように仏さまの室に入り、仏さまの衣を着てという言葉があるが、自分がどのようにして法師として生きていくのかを学んで、自分が菩薩ということも自覚するようになった。前は菩薩と言えば、私たちの見えない世界にいる方々だと思っていたが、佼成会に入ってから自分の性格が変わって、問題が起きても素直に受け入れられるようになるということは、菩薩さまになっているということだと教えてもらった。

#### バンコクでの法華経講座への参加

法華経のことをもっと知りたいので、読めるものを教えてもらいたいと言ったら、2015年にバンコクで法華経講座があるので行ってみたらどうかと言われたので、行った。法華経のことについて学び、疑問に思ったことが分かった。1週間は法華経だけを勉強した<sup>(34)</sup>。参加者にはいろいろな人がおり、タイでのショッピングに関心がある人もいた。

#### 家庭教育

コロンボの家庭教育講演会に行った。2014年には家庭教育の講演会がポロナルワでもあった。自分も子どもがいて孫もおり、家庭としての体験をいろいろ

ろもっている。以前、市役所に勤めていた時に、さまざまな親子の問題が持ち込まれた。夫婦の問題もあった。そういう時は問題のある現場に行って、解決するために、知恵によって工夫してやってきた。けれども、佼成会に入って家庭教育を学んでいくと、家庭の問題を知恵ではなく、心で転換してやっていくのを学んだ。自分をもっと早く家庭教育を学んでいたら、市役所で働いていた時に役にたったと思う。家の中でいろいろな問題が起きると、子どもを親から離して孤児院に入れたりすることも市役所でやっていた。

また、自分は若い時には仕事が忙しかったので、子どもと接する時間が少なかった。今、子どもが孫の面倒を見られない状況なので、孫を見てあげているので家庭教育が役立つ。スリランカでは親が子をおさえつける傾向がある。子どもを良くしていくために、上から命令しないように心がけている。

#### 佼成会に入って自分が変わった点

自分が変わらなければ、家庭も国家も、社会も変わらないということが分かった。いろいろな人が悩みを持っている時に、ただお金を渡して解決することはできない。

また、先祖のおかげで今があることが分かった。これまで先祖を思って功德を回向していたが、心から感謝するということがなかった。スリランカでは親は大切にしている、先祖には功德を回向するだけだった。ポロンナルワには貯水池があり、治水を考えてこれを作った王様、作ってくれた人にも感謝している。貯水池があることで、ポロンナルワでは農業もできる。また、水の不足を感じない。

佼成会で自分が学んだことを相手に伝えようと努力をしている。そうすれば自分も反省できる。

#### 家庭拠点法座

家庭拠点長のサティフィケートは2015年3月21日にもらった。自分の家庭拠点法座には15人位の人がある。周辺に住む定年になった人々で、そのうち会員

は6人だ。1カ月か2カ月に一度法座を開く。参加者に今度いつやりますかと聞いて日程を決める。会員が2~3人で集まるのはよくやっている。

家庭拠点法座に人を集める時に方便として、明るい社会をつくるにはどうしたらよいかを話すことから始める。開祖さまがいろいろな方便を使っている。そこに家庭教育を挟んだ。家庭拠点法座には定年になった人も来るが、年輩の人にも家庭教育を伝えたい。精神と肉体をどのように元気にするのかということにかかわっている。

今、自分はいろいろなところに話しに行く。お坊さんにも話しに行く。瞑想を実践している人たちにも研修している。プラクティカル・ブディズム(実践的仏教)に入っているので、法座に参加しませんかと誘う。

#### ポロンナルワの道場(法座所)について

道場には5月くらいから行っていない。先輩がそれをどう思っているか分からないが気にしない。自分の家に安置しているのは額装本尊(紙の本尊)なので、仏像の本尊がある道場に、たまには行ったほうがよいのかもしれないが。

バンコクや日本に行って、セミナーに参加して知識を持っている人で、道場に来なくなっている人がいる。そういう人が来て教えてくれると、もっと道場に行く気になる。自分で探して本を読んだりしないといけない。そういう人が来る雰囲気をつくったらよい<sup>(35)</sup>。

自分はバンコクのセミナーで学んだことを、家庭拠点法座に来ていた新しい人に教えている。仏教は一乗の教えだということを言っている。

自分たちは一生懸命勉強しても年をとっている。若い人を育てたほうがよい。青年にとって魅力のあるプログラムをつくったほうがよい。パワーポイントを使って研修などもやったほうがよいのではないか。

### (3) ハバラナ

ハバラナはポロンナルワから車で1時間30分、コロomboからは4時間30分の距

離にある。ポロンナルワとの関係はなく、導きの系統もあってコロomboとつながっている。

ハバラナは貧困地帯である。サファリ(野生動物を見学するツアー)といった観光も一部ある(実際、ハバラナに行く途中に道路のわきを象の集団が歩いていた)が、暑く、農業にも適さず、貧しい人々が多い。

ハバラナの布教をしたのは、コロomboに住む親戚のシャーマリーさん(事例5)から導かれたスワルナパーリさんである。ハバラナの会員は全員彼女に連なる人々である。彼女は亡夫が公務員で、ハバラナでは生活は安定していたほうであった。また、年齢からみれば学歴も高卒で高いほうで、ボランティア活動など社会的な活動をしていて、地域社会で顔も広い人である。2007年にハバラナの拠点を開始し、自宅の一部を佼成会に賃貸して、ハバラナの法座所(道場)としていたが、2016年をもって閉めることになっている<sup>(36)</sup>。2017年4月現在で、ハバラナには4人の家庭拠点長がいる。以下、事例10ではスワルナパーリさんを、事例11では彼女の導きの子であるサガリカさんの事例をとりあげる。なお、スリランカの上座仏教では、前世が重要で、先祖供養はあまり重要視されないが、ハバラナでは先祖供養を自らが実践することに魅力を感じている人がいるのは他地域とは異なっている。また、ポロンナルワのように、日本やバンコクに行きたいという入会動機は見られない。これは貧しく、食べることにことかく状況の地域であることとかわっていると思われる。

#### ■事例10 スワルナパーリさん(ハバラナ拠点責任者、家庭拠点長)

スワルナパーリさんの事例では、ハバラナの導きの原点であることもあり、ハバラナでの佼成会の布教、信仰活動について、そして地域社会の寺との関係等についてみていく。彼女は人々の苦と向き合い、相談にもものっている。また、上座仏教の寺や僧に認めてもらわなければ佼成会の活動はしにくい様子が分かる。ハバラナは貧困地域であり、佼成会による支援物資への期待についてもう



写真71 ハバラナ法座所のご宝前とスワルナパーリさん(2016年9月, 筆者撮影)

かがわれる。先祖供養も実践している。ハバラナは信仰深い土地柄であるようで、かなり素朴に真面目に佼成会の活動をしている様子がみえる。

#### 属性

スワルナパーリさんは1950年1月生まれ、66歳の女性である。ハバラナ拠点責任者、家庭拠点長で、高校卒、夫とは5年前に死別した。夫は森林関係の公務員(フォレストオフィサー)だった。子どもは4人(男3, 女1)で、夫の逝去後、次男と同居している。次女の妻はドイツ人で、子ども2人とドイツで暮らしている。

#### 佼成会への入会

佼成会に入会したのは2005年のことである。コロンボに住んでいる従妹のシャーマリーさん(事例5)にコロンボで会った時、彼女の性格が変化していたので、どうしたのかと聞いた。佼成会に入っているからと言われた。そのあと

ガミニさんのスピーチを録音してあるテープを聞かせてもらって、佼成会はよいなと思った。その内容は、私たちは仏教徒としてどのような生き方をすればよいのか、仏教徒としてどのように仏に近づくことができるのかという説法だった。シャーマリーさんは佼成会について「皆が優しい、親切な人がいるところ、布施を大事にしているところだ」と入会を勧めた。

シャーマリーさんは、以前は仏教に関心がなく、遊んでばかりだった。遊び好きな性格が、佼成会に入ってから仏教に関心があるように変わっていた。その時はガミニさんの家が道場だったが、そこに行ってガミニさんと話したことがある。シャーマリーさんから話を聞いた後、コロomboから帰ってから3か月後に入会した。入会時にはとくに問題をかかえていなかった。

#### 佼成会と上座仏教の違い

お寺にはふつうにお参りに行って、プージャーをする。ポヤの日には一日中お寺で修行するがそれでおわりだ。佼成会では人にやさしくして過ごしたり、親切にしてお互いに思いやりの心を分かち合える。

#### 佼成会の魅力

法座に魅力を感じる。いろいろな悩みを皆が話し合える場所。仏さまの指導をいただけるのは魅力を感じる。コロomboで法座を見たので、ハバラナでもそうやった。皆が心を出せる場なので、よいと思う。佼成会で好きな実践も法座だ。

佼成会が日本の宗教だということも魅力がある。お寺には行ってお布施をするだけだが、佼成会の場合は、日本から人が来てお話したり、日本から人が来た時にものをもらったりする。佼成会の人々はやさしい。

また、佼成会に入って、心を育てることができた。仏教の知識を深めることができた。コロomboでのセミナーで勉強して、知識を深めた。

日本に関心をもっている。日本で佼成会が生まれた。日本人は思いやりのある人。(元南アジア教会長の)斎藤さんがいた時は自分たちにやさしくしてくれたので、関心をもった。開祖さまが苦勞をして佼成会を開いたということを知った。

### バンコクでの本尊勧請とリーダー教育

バンコクには2回行った。ご本尊勧請とリーダー教育(主任教育, 6日間)で、地域リーダーということで本部がお金を出してくれ、無料で行った。バンコクではご本尊にはどのようにお参りすればよいかということを教えてくれた。日本に行ったことはない。

### おたすきについての違和感

おたすきについては、たまにおかしいのではないかと言う人もいる。納得する人もいるし、納得できなくて離れる人もいる。おたすき自体に加えて、そこに描かれている南無妙法蓮華経という文字にも違和感をもつ。南無妙法蓮華経は、仏さまを讃嘆しますということが書いてあると説明する。数珠については上座仏教にも似ているものもあるので納得する。

### 先祖供養について

先祖への回向は、スリランカではお坊さんが経典を読んでやるものだ。しかし、佼成会では自分でやれるので、先祖供養に皆は喜びをもって興味を抱いている。先祖に恩返しができる<sup>(37)</sup>。

### 導きの仕方

これまで導いた人は200人くらい。村でボランティアの会の会長をしたこともあるので、自分は導きが得意だ。「信仰を深めることができるのは佼成会ですよ」と勧める。夫が入会に反対する時には、家にいって、その人の夫と話をする。どのような団体か話して、納得する人もいる。導いた200人のうち、たびたび来るのは15人。それ以外は時々来る人が多い。入会すれば日本に行ける、バンコクに行けるということを言って導きをしたことはないし、また、行きたいと思う人はいるだろうが、ハバラナの人は経済的に余裕がないので行かない。

### 寺との友好関係の重要性

お寺との関係での苦労はたくさんあった。佼成会が始まった時に、違う信仰をしているということで、実際大変な思いもした。しかし、親しいお寺のお坊

さんが自分を信じてくれた。法座所が始まった時には、ポヤの日に、お坊さんと呼んで、寺でやるような修行をし、お坊さんには説法をしてもらっていた。お坊さんと呼ぶと、佼成会は何をやっているかお坊さんに分かってもらえる。また、お坊さんをサポートしているということで良いイメージになる。しかし、来てもらったお坊さんに供物をあげないといけない。皆に食事を出さないといけない。経済的に大変だったので続けることができなかった。

佼成会を広めるためには、お寺と友好関係を作るのは大切だ。教会長さんはハバラナに来るとお寺に行く。お寺に行って支援するとうまくいくと思う。

ハバラナに佼成会の教えは広まると思う。ただ一番苦労なのは、周りにたくさんお寺があることだ。お坊さんの中には、法座所にお参りに行かないようにと言う人もいるし、お寺ができないことを、あなたがやっているのは素晴らしいですね、と言ってくれるお坊さんもいる。

#### ハバラナ法座所での集まり

自宅の一部をスリランカ教会が借りて、そこを法座所になっている(2007年に拠点開始、1万2500ルピーで賃貸)。毎月1日に集まるが、大体20~30人来る。参加する人は50歳以上が多い。家の中で問題がある場合は若い人も来る。女性が多い。仏さまに野菜、果物を供え、お給仕をする。ミルクライスをつくる。パーリ語のお経を先にあげ、そのあと佼成会のお経をあげて、ご供養をする。10分くらい瞑想したりもする。そのあと法座をする。法座の中で、悩みがある人はその話を出したり、最近あったことを話し合う。最後にミルクライスを食べて解散する。8時30分~12時30分くらいまでだ。

毎月1日以外にも、道場に3~4人来れば、法座をするようにしている。そうすると皆の気が楽になって帰ることができる。また、食事を持ってきたり、食べ物や飲み物を皆で交換することもある。こうしたことは楽しみだ。皆で紅茶を作って飲んだりして、楽しんでいる。

ハバラナの会員は75人くらい。毎月来るわけではない。来られる時に来る。

家でも忙しい。また、近所にお寺があり、お寺の行事もある。お寺と佼成会の両方やっている。

最近、皆がとりわけ忙しくなっている。仏さまをお参りする時間がなくなるほど忙しくなっている。(農村部の貧困層を対象として銀行が無担保で低利率の少額融資を行い、自立を支援するというので)銀行が貸し出しているお金を借りているので、それを返さなくてはいけない。借金を返すために走り回っている。また、学校の行事やお寺の行事で走り回っている。

#### ハバラナは貧困地帯

毎月1日の集まりの時、お布施として、お給仕のために自分の庭に植えている野菜、果物を持ってくる。貧困家庭が多いので、お金は持ってこない。ハバラナは貧困といっても、何も無いという状況ではない。公務員は少ない。サファリがあるのでホテルに勤める人もいるし、観光業はある。貧しい人は森の中で農業をやっている。ハバラナは暑すぎて米も植えられない。水も不足している。ジャングルの木を切って野菜を植えるのがせいぜいだが、ちゃんとした収入にはならない。佼成会の会員には一部中産階級の人もあるが、貧困家庭の人が多い。教育のレベルも低い。

#### 会員の入会動機と抱えている問題

入会するのは、苦しい生活をしているので、仏さまが慈悲をかけてくださるのではないかという思いがある。(上座仏教ではなく佼成会に来る意味は)お寺では仏さまにお参りするが、お坊さんには相談できない。話もしてくれない。佼成会では苦しみに耳を傾けてくれ、相談ができる。仏さまにお参りしたり、家の中の苦勞の話しをしたり、また、(支援物資を)いろいろもらえるかなと思って来る人もいる。災害があった時に食料品を配っていたことがあるので、それをもらえることを期待する人もいる<sup>(38)</sup>。

苦の内容は、夫婦の問題、親子の問題、経済の問題などがある。夫婦の問題は、夫が酒を飲む。酒を飲んで仕事に行かないという問題が多い。親子の問題

は、親が子どもに教育をつけない、また、教育をつけても仕事がないということもある。ハバラナには仕事がなく大変だ。

病気の問題をもってきた時には、お寺でするようにボーディ・プージャー(菩提樹への祈願)をしている。近くの寺に菩提樹があるので、そこにお参りして道場に戻ってお参りをする。お寺で菩提樹に対してするようにしている。

#### 家庭拠点法座の運営について。

家庭拠点長はハバラナには4人いる。家庭拠点法座には会員が集まるというよりも、新しい人を誘いなさいということになっているので、家庭拠点法座を拠点長の自宅でやる時には、スリランカ風のパーリ語のお経をあげて、ほとんど佼成会のご供養はしない。小さい法座をやって少し仏教の話をしたり、悩みがあるかどうか確認したり、話を聞いたり、皆が楽しめるようにしている。

自分は家庭拠点長に手を挙げたので、家庭拠点法座はやった。10~12人くらい集まった。ただ、自分のところは法座所でもあるので、新しい人は1人、2人で、新しい人がいない時もある。7、8回やった。また、今はあまりやっていないが、会員の家を訪問することは大事だと思う。

地域の拠点長の役がなくなり、家庭拠点長だけになることについては、それはかまわない。格下げとは思わない。自分は変わらない。この家は息子の名義にしてある。息子は、あと1年間は無料で法座所として提供すると言っている。そのあとは家庭拠点法座をやっていくしかない。

サガリカさん(事例11)も自分の導きだ。サガリカさんの家庭拠点法座のほうに近い人にはサガリカさんのところに集まってもらうようにしている。

#### ■事例11 サガリカさん(家庭拠点長)

家庭拠点長で、スワルナパーリさんを信頼している。家庭拠点法座にはスワルナパーリさんが来てくれている。入会后2年少ししかたっていないが、自分自身の苦勞もあり、貧困地域であるハバラナの人々の苦勞についてよくとらえ

ている。また、先祖供養についても実践している。娘が村で初めて大学に行き、佼成会で知り合ったコロomboのデルゴダさん(事例3)の家に下宿している。

### 属性

サガリカさんは1972年4月生まれ、43歳の女性である。高校卒で主婦である。夫は元軍人で51歳、定年後ゲストハウスを経営している。子どもは娘のみで3人おり、長女はコロomboの大学を卒業して就職し、次女は高校を卒業したばかり、三女は高校1年生である。

### 佼成会への入会

佼成会に入会したのは、2014年で2年半前だ。導きの親はスワルナパーリさん。「仏教の行事を毎月1日に行っているのだから、来てみてください」と誘われた。スワルナパーリさんとはお寺でポヤの日に会ったり、子どもの送り迎えをする時に、家の前に彼女が立っていたりした。初めて1日に法座所に行った時には、仏教のことをやっているのだから、もっと仏教に熱心になれることができるし、子どもと一緒にやると信仰が深まるのでよいかと思った。また、自分が悩むことがある時には、スワルナパーリさんが悩みを聞いてくれ、こういうふうにしたらどうかとアドバイスをしてくれる。お坊さんとはこうした話はできない。

入会の時には経済的な苦勞があった。そうしたらスワルナパーリさんから、朝晩ご供養してくださいと言われた。夫が定年になったあと年金が出るまで8カ月かかった。その間お金がなくてたいへんだった。長女がコロomboの大学で勉強しており、次女が高校に通学していたので生活が苦しかった。自分のきょうだいに支えられた。

スワルナパーリさんはとても素晴らしいリーダーで、よい人柄だ。悲しみがある時に、皆に寄り添い、思いやりが深い。自分を佼成会に導いてくれたことに感謝している。

### 夫の病気と佼成会での祈願供養



写真72 サガリカさん宅のご宝前とサガリカさん  
上座仏教の仏像と額装本尊が祀られている(2016年9月, 筆者撮影)



写真73 ハバラナ法座所で法座に参加するサガ  
リカさん(右端の人)  
(2016年5月, スリランカ教会提供)



写真74 ゲストハウスを経営している夫と  
(2016年9月, 筆者撮影)

2016年2月、夫が脳梗塞になり、1カ月入院した。3週間ぐらい意識不明だった。死んでしまうのではないかと思うくらいだった。命が心配だった。病院には自分がついていた。その時、佼成会の信者さんが祈願供養してくれたり、ボーディープージャーをしてくれたおかげで夫の命が助かったと思う。今は元気で仕事をしているが、まだ意識がちょっと変で忘れてたりするし、バイクにも乗れない。

#### 佼成会と上座仏教の違い

自分はあまり違うとは思わない。儀式の時のおたすきとかはスリランカにはないが、スリランカでは修行するとき腕にかけるものがある。家庭拠点法座で皆に、似ているということを伝えると理解してくれる。これは、いつもかけないがお寺での修行の時だけかける。

佼成会のご宝前については違和感をもっていないが、ご本尊の衣が下がっていて胸が見えている。スリランカの仏像では胸が見えることはないので、そこは違っている。

#### 佼成会が大乗仏教だということについて

上座仏教とか大乗仏教とかかわらず、自分は、良いことをやっているのなら学んでいくという思いだ。子どもも青年部に入ると良い子になると思う。この前、自分のところのゲストハウスを会場にして、ハバラナの青年セミナーがあって、青年を育てていこうという話になった。

#### 先祖供養について

自分には8人のきょうだいがいたが、父の給料が足りなくて、子どもたちの面倒を見ることができなかった。祖母が自分を育ててくれた。佼成会では亡くなった祖母に功德を与えられると聞いている。先祖供養の時に祖母と祖父に功德を回向している。

上座仏教では、亡くなって1週間、3カ月、1年とお坊さんに頼んで供養するだけで、自分ではやらない。佼成会ではそれを自分でできるのでうれしい。

#### 佼成会の魅力と自己変革

法華経が好きで、ご供養する時には心から喜びがわいてくる。法華経の中では第16番のお経(如来寿量品)が特に好きだ。以前は怒りっぽかったが、ご供養をしているので、前ほど怒らなくなった。

法座がよい。法座が好き。悩みを話し合う場所で、自分の足りないところを変えていくこともできる。

#### 日本について

日本はスリランカとは全然違って、発展している国だと思う。

(日本に行ける、バンコクに行けると言って誘われなかったか、という問いに対して)スワルナパーリさんはそう言わなかった。しかし、そういったことは聞いたことがある。

#### 家庭拠点法座

佼成会のプログラムが好きで関心があり、家庭拠点長には自分から手を挙げた。

2週間前にやった法座には38人来た。近所の人、村の人の新しい人も15人くらい来た。スワルナパーリさんも来てくれた。誘い方は「仏教団体で仏教のことをやるので、来てください。日本人の人もいますよ」と言う。

ハバラナの家庭拠点長にはスワルナパーリさんと自分のほか、あと2人いて、全部で4人だ。3人ともスワルナパーリさんが導いた。自分のところの家庭拠点法座に来たのは、リーダーではスワルナパーリさんだけだ。

家庭拠点法座は1カ月に1回、これまで5回やっている。今月は自宅で、来月は別の会員の家で行う。自分の家でやってもらえると浄められるので、やってほしいと言われた。その家の人が紅茶とお菓子を出してくれる。毎回30~38人集まるといっても会費を払っているわけではない。来る人は会費を払うほど豊かな家ではない。道路工事とか日雇いの仕事で、1日仕事をやっていくらという形態で働いている家庭が多い。自分の家で家庭拠点法座をやりたいが、集まって来た人に紅茶を出すだけのお金がない人には、持って行って、皆に分からないようにその家の人に渡している。

## 導き

導いた人は15人くらい。導いた人は自分の家庭拠点法座に参加する。「仏道の歩み方を教えてくれる団体で、家庭も幸せになりますよ、ぜひ来てください」といって誘う。男性は3~4人で女性が多い。

### 家庭拠点法座からみたハバラナの人々が抱えている問題

ハバラナの人々は経済的問題を抱えている。女性の仕事だと、煉瓦をつくる、木を切って枝を何本かにまとめて、燃料として店に売るといったものだ。1日の賃金は女性では600ルピー(約450円)、男性では1000ルピー(約750円)程度だ。それも日払いではなく、200~300ルピーもらったあと、2週間くらいあとに残りのお金を受け取る。5人家族で1カ月1万5000ルピーはかかる。食費だけでもそのくらいかかる。

法座では夫婦の問題が出る。夫が酒を飲む、酒飲んで暴れる、殴られるといったことと、夫が酒のためにお金を使い、経済的に困窮している家族もある。親子の問題はあまりない。お寺の日曜学校に行くようなすばらしい子どもなので、親子関係の問題はない。自分はお寺の日曜学校の先生をしている。7時30分~12時30分まで。日曜学校の先生をするには出家、在家といった条件はない。教科書をもとに話す。昼ごはんは出ないので持参する。

### 変えたほうがよいもの

できるだけおたすきをかけるように指導されているが、おたすきに書いてある文字は日本語ではなく、シンハラ語に変えたらどうか。南無妙法蓮華経のかわりに三宝帰依(仏法僧)にしたらどうか。そうしたらもっと広まる。

### 佼成会に入会してよかったこと

コロomboの皆さんとのつながりができたこと。娘がコロomboに行って活躍できるのも佼成会のおかげだ。長女はデルゴダさん(事例3)の家に泊まらせてもらい、コロomboで大学に通学した。卒業後もデルゴダさんの家に泊まらせてもらっている。次女も大学に行くと思う。長女は素直な子なので、コロomboに出

るのを心配したが、デルゴダさんの家にいるので安心だ。この村で大学に行ったのは自分の娘だけだ。自慢の娘だ。

#### (4) ゴール

ゴールはスリランカの南端の海岸線にそった所にあり、オランダとイギリスの植民地時代の世界遺産で有名である。しかし、佼成会の拠点があるところはゴールといっても内陸部にある農村で、ハバラナほどではないが貧しい地域である。ゴールはスリランカの他の地域と異なり、東京にある調布教会所属のスリランカ人の導きの系統につらなるところである。2005年から布教が始まり、2007年にスリランカ人の寄付により法座所ができた。2010年に山本教会長がスリランカに赴任し、また前述のように、2011年にゴール布教の中心人物だった日本在住のスリランカ人の不祥事が起こり、2011年からは調布教会は布教を手控え、スリランカ教会がゴールを担当することになった。2011年に法座所を移転し、2013年に法座所を閉めた。

ゴールの事例では、個々の信仰的な歩みのほか、調布教会の布教時代のことをできるだけ詳しく聞いた。

#### ■事例12 マーラさん(家庭拠点長)

マーラさんはガンで闘病中であつたが、聞き取りに応じてくれた。調査に行った時は近所に住んでいる娘が家事の手伝いに来ていた。初期の会員で、日本にいるラリーさんと組んでゴールの中心人物だったラジャーさんが、2014年に日本へ団参に行った時に逃亡したが、その後、マーラさんがゴールのまとめ役をつとめている。

#### 属性

マーラさんは1963年5月生まれ、53歳の女性である。家庭拠点長である。マー

ラさんは2012年から地域開発銀行(Regional Development Bank)<sup>(39)</sup>で働いていたが、8カ月前にガンの病気のためにやめた。主婦の傍ら、村の社会福祉関係のボランティアをしていたので、地域の人を良く知っているため地域開発銀行から頼まれた。

学歴は高校卒である。夫は大工である。子どもは娘2人、息子1人で、現在は夫と息子と3人で暮らしている。マーラさんの家は両親から結婚時にもらったもので(両親と弟は新しく家を立てて転居)、1995年から2年間、中東のクエートでハウスマイドをして働き、そこで稼いだお金で家を大きくした。

#### 佼成会への入会

入会したのは2005年。友達が来て「その建物で、何かやるみたいなので、紹介する。一緒に行ってみよう」ということで、建物を見に行った。自宅から200mの距離だった。行ったら、ラリーさんたちが来ていた。ラリーさんは日本の調布教会で佼成会の会員になっていた。ラリーさんはゴールの村に何か役に立つことをしたいと言っていた。その時には25人くらい参加した。

ラリーさんはほとんど日本にいたので、ラジャーさん、プレイマノットさんが中心でやっていた。2人とも男性である。2人の関係は分からない。道場の中では仲良くしていた。ラジャーさんの家の前の建物でやっていたが、その後(2007年)道場(法座所)ができた。もともとあった家と土地を買って道場のよう  
に改築した。道場の管理はインディカさんという日本語を勉強している男性が  
していた。土曜日には30~40人集まっていた。調布教会の人が来た時には100  
人くらい来ていた。ラリーさんはほとんど日本にいたが、調布教会の人を連れて、  
1年に2~3回来ていた。ラリーさんがいない時にもラジャーさんを中心に  
土曜日は30~40人くらい集まっていた。ラジャーさんとピアシリさん(女性)が  
会計をしていた。

佼成会の仏さま(日本からの額装本尊のようなものがあってそれが白かった)があったので、参拜日である土曜日以外は、道場当番を決め、ご宝前のお給仕



写真75 ゴール法座所(道場)に本尊が勧請された翌日の朝のご供養  
協導師の女性がピアシリさん, 男性がラジャーさん(2007年12月, 調布教会提供)

をする人が近所の人2~3人を連れて行って当番をしていた。

#### 調布教会のゴール布教

調布教会の人は年に2~3回来ていた。多い時は16人来たこともある。来た時はボールペンとかお菓子を配った。子供が集まる会を作った時、たくさん日本人が来て、折り紙をして、日本から持って来たお菓子や文具などを子どもたちに配った。余ったものは大人にも配った。日本人が来て、セレモニーをやる時には、皆モノをもらいたいという気持ちで集まって来た。こちらで昼食の準備をした。ラリーさんが全部手配をしていたので、日本人がゴールの町中のどのホテルに泊まっていたかは知らない。

会員の家に手どりに行った。ラリーさんが通訳をし、また英語の片言でやりとりしていた。調布の人が行くことは、佼成会が日本からのものであることを示すという意味があった。調布の人々が教えを言ってラリーさんが通訳をしていた。ご供養のやり方、お数珠の説明、法座リーダーの役割を教えていた。

### 調布教会での実習とその効果

2009年6月26日～7月1日のバンコクでの家庭教育の研修のあと、7月1～28日まで調布教会に行った。自分のほかにピアシリさん、ラジャーさんの奥さんの3人が日本に1カ月行って調布教会で実習をした。お金は一銭もかからなかった。ラリーさんがお金を出してくれたのか、調布教会で出したのかは知らない<sup>(40)</sup>。ビザの申請を手伝ってくれたのは、ラジャーさん。3人がなぜ選ばれたのかは分からない。しかし、自分たちは一生懸命やっていた。誰が選んだか分からなかったが、ラリーさんとラジャーさん、ピアシリさんは仲が良かった。皆にチャンスあげますとは言っていた。けれどもピアシリさんは、他の人にチャンスあげずに、自分だけが何回もバンコクに行っていた。

調布教会では佼成会の教えや日本語を学んだ。東京観光、富士山ツアーの機会もあり、本部にも1日行った。調布教会で泊まった。朝起きて掃除、ご室前へのお給仕、トイレ掃除などをした。調布教会の皆さんが食事を出してくれたり、買い物に連れて行ってくれたりした。通訳にスリランカ人の女性が来ていた。通訳したのはほとんどその女性で、ラリーさんはあまり来なかった。

調布のスリランカ関係の中心は、教務部長の中野さんだ。中野さんはスリランカに何回も来ている。日本の中野さんの家に行ったこともある。

勉強になったことは、脱いだ靴をそろえること、人が悩み、苦しんでいる時に、どのように慈悲をかけるのかということだ。スリランカではお寺に行き、花と線香をあげる。(仏教の教えを)人生にどう当てはめるのかについては具体的に教えてくれない。上座仏教では、ただ仏さまの教えをお坊さんから聞かすが、分かりやすく毎日の生活に当てはめることは佼成会から学んだ。調布教会で習ってきたことは、できる範囲で会員に教えた。村に布教に回ったり、手どりに行った。会員も増えた。25人多くなり、全体で60人くらいになった。

### 道場の布施箱・会費

道場に布施箱があった。会費を集めた。年に60ルピー。ピアシリさんが集めた。

ピアシリさんの前に男性がやっていたが、トラブルがあり、やめた。お金のやりとりはラジャーさんとピアシリさんがやっていた。ラリーさんがいる時はラリーさんがやっていた。その時には自分たちは家に帰るように言われた。お金のことは何もわからない。ラジャーさんはお金を持ってきて、紅茶、クッキーを購入するお金をピアシリさんに渡していた。

### 上座仏教との関係

大乘仏教の団体ということで、お坊さんから批判された。ラリーさんが話に行ったが無視された。2010年にスリランカ教会長として山本教会長さんが派遣されてから、調布教会がゴールから手を引き、コロomboのスリランカ教会とのかかわりになったが、2011年頃、山本教会長さんがお寺に行って話をしてからお坊さんとの関係が良くなった。一食平和基金を原資とした文房具を配る式典はお寺でやった。100人に文房具を配った。そのあと学校に音楽機器も寄付した。

2011年に別の道場に移った。毎週土曜日に30~35人が集まっていた。

### 人々が抱えている問題

直接導いたのは25人いる。スリランカ人は悩み苦しみを人前で話すのは不得意だ。法座では悩みを皆で話し合おうと言う。個別に相談に来る人もいる。家まで来て相談する人もいる。

問題で多いのは借金苦。夫が酒を飲み暴れる、浮気をするという問題を持ってきた人は、怒って夫に対してご飯も紅茶もつくらなかった。そこで、毎晩飲んで帰っても、毎朝、紅茶をつくってあげたらよい、と言った。今はうまくいっている。高い利子で借金し、夫の給料ではそれを返せない。妻が借金していることを夫は知らないこともある。借金が返せなくて、電車の線路に飛び込んだり、違う男性のところに行ったり、中東に(出稼ぎに)行ったりしている。ともかく夫とよく話し合って、給料から少しずつでも貯金をするようにと言う。

### 教会長とのかかわりと家庭拠点法座

家庭教育の講演会には参加したことがある。ゴールでも1回、講演会をやった。



写真76 マーラさん(中央)と山本教会長(右), ル克蘭チさん(左)  
向かって右上に、上座仏教の仏像と額装本尊の入ったご宝前がある  
(2016年9月, 筆者撮影)

以前の道場がなくなったあと、教会長さんと親しくなった。

家庭拠点長はゴールに4人いる。今のところは毎月ゴールで法座をしており、教会長さんやパーシー支部長さんが来てくれる。月に2回やったこともある。教会長さんの法座には満足している。教会長さんの愛情を感じる。教会長さんは教えを説いてくれ、支部長さんは上座仏教風に教えを説いてくれる。ピリットをあげ、ジャータカ物語を上座仏教風に話してくれる。教会長さんの話は分かりやすく、理解できるように話してくれる。教会長さんはゴールが大好きだ。ゴールの人たちと教会長さんは仲良くしているので、他の地域のメンバーよりも自分たちを好きなんだと思う。

家庭拠点法座もよいが、皆を集められる場所があると集まりやすい。道場があれば、ご宝前へのお給仕を前のように毎日やることができる。道場があるとお給仕ができてうれしい。

### 佼成会に入会して変わったこと

自分は以前、怒りっぽかった。夫や子どもを怒っていた。佼成会の教えを聞いて怒りっぽくなくなった。仏さまに守られている気がする。

ガンの治療のために、9回注射した。あと1回残っている。1回に2万5000ルピー(約1万7000円)かかる。夫は自分のために一生懸命働いてくれる。たまに仕事がなくお金のない時には親戚や子どもがお金をくれたりする。借金はしたことはない。これは守られていると思う。自分が変わっていかなければ、相手に教えを伝えられない。

### 教えや実践で気に入っている点

具体的に実践するということがよい。靴を脱いだら、靴をそろえる。相手に慈悲をかける。誰かが家を訪ねて来た時、食べ物が自分の分しなくても、自分が食べていなくても、もう食べたから、食べてね、と渡している。食べ物がなくて困っている近所の人たちが自宅に来る。そういう人たちとシェアして食べることができるのがうれしい。

未会員の人にはお参りに来てください、という言い方はしていない。夫婦はお互いに尊敬していく、靴をそろえる、家庭を守っていく教えだと言う。今は男性でも佼成会に反対する人はいない。大乘仏教とかは関係ない。佼成会は慈悲の心を持てるようにしてくれるものだと思う。

## ■事例13 ラリッタさん(家庭拠点長)

ラリッタさんは、2007年にゴール法座所(道場)ができた時に誘われて入会した。調布教会の布教時代の様子がマーラさんとは別の視点で語られている。

### 属性

ラリッタさんは1949年9月生まれ、67歳の女性である。住んでいるのは、戸数が約50戸の村で、ここは発電所建設による立ち退きのため、政府が代替地と

してくれた土地で、ラリッタさんは1965年から住んでいる。小さな店をもち、洋服の製造・販売を行っている。夫は2002年に59歳で死去したが、亡夫は発電所に勤務していた。

20歳で結婚し、子どもは3人(男女各1人、養女1人)いる。現在は長男夫婦と孫4人と同居している。下の娘は佼成会の会員になっていたが、結婚して夫婦でフランスに住んでいる。

#### 佼成会への入会

2007年入会した。同じ村のピアシリさんから、日本の仏教団体があると誘われた。瞑想をするというのを聞いて興味をもった。特に大乘仏教だとは言われなかった。2km離れた隣村に道場があったので行ってみた。

道場では毎週土曜日にお給仕とご供養をしていた。毎週土曜日9～13時30分まで集まっていた。お給仕、ご供養、瞑想5分、法座はゆったりやらなかったりだった。当時は縫製工場で働いていて、土曜日に休めないの、仕事をやめ、姉が会社の下請けで縫製をしていたので、姉の家で一緒に洋裁をし、その後、自分でやるようになった。

自分は初期の会員だ。道場には30人くらい集まっていたが、誰が誰の導きか分からない。村なので何をやっているのか、ということで来る人もいた。毎土曜の集まりは、(娯楽のない村なので)楽しみもあった。魅力を感じたところは、その時にご供養をすることで、お経には仏さまの教えが書いてあるので、関心があった。また、紅茶を飲んで皆とおしゃべりするのも楽しかった。隣近所の人たちが会員で、ラリーさんを中心にやっていた。

#### 調布教会のゴール布教

調布教会の人は3カ月に一遍くらい来ていた。大体は4人くらいで、多い時は16人来た。通訳はラリーさん、スリランカ人の女の子、男の子もいた。日本から調布教会の人が来るときは、瞑想はしなかった(瞑想はスリランカ風)。調布教会の人は、1回来るとどのくらいスリランカにいたのかは分からないが、ゴー



写真77 ラリッタさんと長男のお嫁さん



写真78 ラリッタさんの家にある額装本尊



写真79 ラリッタさんの自宅の離れにある洋服製造・販売の店

(2016年9月, 筆者撮影)

ルでは2日間くらい滞在した。道場で式典を皆でやることと、会員宅を回っていた。また、調布教会の人がボールペン、鉛など日本のモノを子どもたちや村人に配った。また、子どもに踊りを教えたりもした。村なので、何をやっているのかと見に来る人もいた。

一番初めの道場は平屋でコロomboの教会道場くらい大きかった。しかし、山のほうで行きにくかった。2011年頃、その道場がなくなって、別の場所に引越した。二番目の道場はもっとひどかった。普通の家だった。山のほうに上るが、道がすべりやすいので、雨の日は行かれなかった。

今は道場もないし、調布教会の人も来ない。調布教会の人が来ていた時には、コロomboとの関係はなかった。コロomboに佼成会の教会があるということも知らなかった。2011年から2012年に調布教会ではなく、ゴールをコロomboでみることになった。

ラリーさんの時は年に60ルピーを会費として払っていた。二番目の道場の時には20～30ルピーが会費だった。今は道場がなく、会費もなく、布施もしていない。

#### 佼成会と上座仏教の違い

調布教会の布教の時代に、毎月のボヤの日に、上座仏教のお寺のお坊さんに食事の布施をしたことがある。また、道場にお坊さんを10人呼んで昼ご飯を出したこともある。お坊さんに佼成会について理解してもらおうとしてやったことだ。

上座仏教のお寺には行っている。違いはない。仏教が伝わっていくうちに日本で変わったかもしれないが、仏さまは一人ということで拜んでいる。お寺では、ただお参りし、お坊さんの説法があるだけだ。佼成会は人生に適用できる教を学ぶことができる。仏教の教を深く教えてくれる。

#### バンコクでの主任教育

バンコクには1回、主任教育を受けに行った。2015年のことだった。費用はかからなかった。仏教について学んだ。ゴールで行ったのは自分だけだった。

スリランカの他の拠点の人たちの10人くらいとは仲良くしている。

日本はきれいな国と聞いているので、いつか行きたい。佼成会が日本の団体でよかった。

#### 佼成会に入会して変わったこと

怒らなくなった。どんなに苦勞があっても笑顔をむけていく。すべての物事に感謝する。相手の悩みを聞いてあげる、家族は拌み合うことを教会長さんから学んだ。

#### 家庭拠点法座

家庭拠点長には自分から手を挙げた。なるうと思った理由は、他の人に法を伝えたかったからだ。以前は導いたのは姉のみだったが、家庭拠点法座をするようになって11人を導いた。そのうち1人は額装本尊のお祀り込みをしている。家庭拠点長の勉強は、コロンボの教会に泊まって研修した。ゴールからは3~4人で行った。家庭拠点法座以外にも、昨日も1人来て、息子についての悩みごとを言ってきた。我々の精進のために、仏さまがこのような問題を出してくるという話をしたら、喜んで帰っていった。

これまで、家庭拠点法座は2回やった。近所、親戚など20人くらい集まった。ご供養をして法座をした。皆に教えを説いたり、話を聞いたりしている。自分が学んだことを伝えている。人さまをどのように救っていくのか、どのように人の悩みを聞くのか、コロンボで聞いたので、それを応用している。

このあたりには7人の会員がいる。道場がなくなったので会うこともない。年配者もいるので、みんなが集まる場所があったほうがよい。

これまで、コロンボ、ポロンナルワ、ハバラナ、ゴールの4拠点13人の会員の事例をみてきた。スリランカにおける佼成会の歴史、出来事、人間関係の葛藤、対応、信仰受容のあり方などについて現地のスリランカ人の会員の口から語られている。

スリランカは上座仏教の強い地盤があるので、佼成会は「日本」から来た宗教ということのメリットと、大乘仏教であるというデメリットをもちつつも、生活仏教、日常生活の中で実践する仏教として、受け入れられてきている様子が見い出せる。また、入会動機については、入会時に問題を抱えていた人もわずかにいるが、いわゆる貧・病・争を直接のきっかけとしたものはない。そこには地域差もみられる。経済的に豊かな人が多いコロomboやポロンナルワでは、日本への関心や日本やバンコクに行きたいという入会動機がみられ、貧困地帯であるハバラナやゴールは、むしろ支援への期待に魅力を感じている人もいる<sup>(41)</sup>。後者について今の中心人物(事例10と12)は、地域社会で社会福祉的な活動をしていた人であり、その語りの中から、貧困地域の女性の自立に向けての少額融資するグラミン銀行のような地域開発銀行の様子もうかがえた。そして、ポロンナルワでは、これまでになかった知的な関心をもって佼成会にかかわる人もあらわれている。なお、ゴールの場合、現在残っている女性たちとは異なって、男性のリーダーだった人については、ポロンナルワと同じような権益がからむ様相があった。またゴールの場合は日本語学校への送り込みによる日本での就労にかかわる問題もあった。

これまで扱った13の事例は、性別、年齢、佼成会での役割、地域によって違いがありつつも、個々の立場や経験から、佼成会という上座仏教とは異なる特徴をもつ宗教が、異文化においてどのように受けとめられているのか、また、どのような出来事が起き、それにどのように対処してきたのかなど、異文化布教の実態にアプローチする重要な資料を与える。これらをとおして、佼成会の信仰が根付き始めている様子を見ることができよう。

## おわりに

最後に上座仏教との関係、布教上の人間関係の葛藤と解決、家庭拠点法座の

取り組み、新道場の入仏落慶と今後の展開という点でまとめておこう。

### (1) 上座仏教との関係

佼成会が布教をしているバングラデシュやインドといった他の南アジアの国々では、その国の宗教的マイノリティとしての仏教徒が布教の主たる対象だった。他方、スリランカは国の宗教的マジョリティが仏教徒という国柄である。上座仏教の寺院や僧侶へ理解を促進してもらうための配慮や、友好関係の樹立への取り組み、違和感を減じるための工夫が行われている。ポヤデーの時の白服、スリランカ風のお盛物、五戒の唱和、パーリ語の經典の読誦、上座仏教の僧侶による説法など、上座仏教の要素を積極的に取り入れている。そして、佼成会の特徴を出家仏教である上座仏教では扱うことが難しい、現実の生活の中での夫婦、親子がいかにして和して調和していくのかという点においている。寺や僧侶に布施をし、来世でのより良き生まれ変わりを求める来世指向の上座仏教に対して、佼成会は日々の生活を修行の場としている在家の生活実践仏教である。これを佼成会の強みとして出そうとしている。

### (2) 布教上の人間関係の葛藤と解決

スリランカでの佼成会の展開については、これまでみてきたように、布教のきっかけになった人物であるガミニさんをめぐる葛藤状況は長く続いた。こうした現地布教のきっかけとなった一粒種の問題は他の国でもみられ、また、他宗教においてもみられるものだが、次の段階に行くためには、言わば乗り越えなければならない課題であった。2004年に南アジア教会が置かれ、支部に昇格するとともに、南アジア教会(本部)が理事会をつくり、ガミニさん以外の人を理事長兼会計に指名した。また、バンコクでのセミナーが始まり、他の会員が参加するようになった。このような経過の中で、お金についても、教えについてもガミニさんが独占できる状況ではなくなった。さらに、2010年に日本人教

会長が派遣され、日本行き、バンコク行きの人選という権益にかかわる部分も、お金についても、教えについても、法人格取得についても、ますます思い通りにいかなかったのではないと思われる。ガミニさんは一手独占から、権力がそがれていくような感じがし、また、佼成会がビジネスのようになっていったところに、修行者であり、信仰者である教会長が来たことで、そのスタンスが異なることがますます明らかになり、葛藤はより深まったのではないかと思われる<sup>(42)</sup>。

教会長が強調しているのは「自分の中にも仏さまがいる。相手の中にも仏さまがいる」ということだった。これは各々の中にある仏性を礼拝するということだと思われるが、スリランカでは仏陀は尊く、卓絶した存在であるが故に、自分や相手の中に仏さまがいるということ、なかなか受け入れることができなかった。しかし、罵倒されてもガミニさんの中にある「仏さま」を拝もうとしている教会長の姿に、会員たちは感化されていった(こうした言及は4章の事例の中にも見出せる)。

これに関して、スタッフとして葛藤をみてきたルクランチさんは次のように述べている。「ガミニさんが教会長さんを馬鹿にするようなことを言い、教会長さんに出ていけと言った時に、教会長さんがガミニさんの前にひざまずいた。信者さんがそれを見てオーッと思った。スリランカでは目上の人に対してひざまずくのに、年上である教会長さんにそのようなことをさせるガミニさんが悪いと思った。このことがあってから皆が教会長さんを大事にするようになった」。

また、2013年からの記録をみると、会員が集まるポヤの日や1日には、2014年までガミニさんがまず説法して、次に教会長が説法した。4章の事例の中に記述されているように、ガミニさんの怒声で道場に來た大人から子どもまで心を痛めた。教会長のどのような相手でも、相手の「仏さま」を拝み続けるあり方が、この教えの理解にもつながり、身をもって実践した教会長への信頼にもつながった。

教会長は「下がって、相手の仏を出すというのを心がけており、それが自分の役割だと思っている」と述べている。結局は誰もガミニさんに付いて行って佼成会をやめることもなく、4~5年かかったが、教会長の「後ろ姿」(態度、行動)で事態はおさまっていった<sup>(43)</sup>。

修行者としての教会長に対して、実務の面で支えたのが妻の佳代子さんである<sup>(44)</sup>。佳代子さんは、実務については有能、英語力はすぐれ、また、公正であることが重要な教会の会計の役を担っている。家庭教育の講師もつとめている。さまざまな事務のほか、日本からの人々の受け入れについても、実際の業務にあたっている。教会長が修行者として全うできるように夫を守り、風よけにもなり、支えているように見えた。佳代子さんの内助の功は大きい。教会長と佳代子さんの両者がいなければ、スリランカ教会はここまで来なかったと思われる。

### (3) 家庭拠点法座の取り組み

スリランカ教会では、2015年1月から家庭拠点法座という新しい試みが始まった。家庭拠点法座とは、会員の家を借りて、親戚・近所の人々に集まってもらい、法座を実施し、布教を推進していく方策である。これまでの道場に参拝することを中心にしたものから、家庭拠点へという組織的布教上の転換であった。

佼成会では、教会設立後5年たったら、経済的にも現地で自立するということになっていた。しかし、2009年12月に教会に昇格してから、2013年11月に法人格を取得するまでに約4年間という時間がかかり、その後も財的自立にはほど遠かった。本部からの年間300万円の支援金に対して、コロンボと地方拠点の賃貸費用で200万円、60万円が光熱費、40万円が活動費という内訳だった。このように賃貸費用が占める割合が3分の2に及んでいた。道場中心から家庭拠点への移行の第一の要因が家賃の問題であった。第二は、拠点内でリーダーの利権争いがあること、そしてそれに関連して、リーダーとの人間関係で参加し

スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相



写真80 家庭拠点法座  
(2016年1月, スリランカ教会提供)



写真83 お互いの仏さまを祈ります  
(2016年8月, スリランカ教会提供)



写真81 家庭拠点法座  
(2016年4月, スリランカ教会提供)



写真84 お互いの仏さまを祈ります  
(2016年8月, スリランカ教会提供)



写真82 家庭拠点法座  
(2016年1月, スリランカ教会提供)



写真85 お互いの仏さまを祈ります  
(2016年9月, 筆者撮影)

なくなる人がでること、スリランカでは上下関係をはっきりさせる風土があり、トップダウンの命令により、活動を促していること、日本、タイ等の海外研修参加者が、教育参加後その学びを布教に反映しない、もしくは反映できない状況があることなど、金銭的な問題のほか、拠点があることによって古参のリーダー中心に硬直化していた状況からの脱皮を促すことも大きな目的だった<sup>(45)</sup>。また、信仰による救い救われが少なく、信仰の喜びを感じていないのではないかとという根本的な問題があった。

請願制で、家庭拠点長をつのった。そして組織上、家庭拠点長をパーシー支部長の直轄とした。つまり、これまでの地域の拠点長の下に家庭拠点長を置くのではなく、家庭拠点長自体はフラットな構造になったのである。これによって、地域法座所布教ではつぶされていたであろう会員が、家庭拠点にすることで、各自で導きをし、各家庭拠点の充実を図るという効果がでてきているという。

なお、家庭拠点長は2016年5月の時点で38人だったが、2017年4月には64人になった。家庭拠点長の地域別ではコロombo30、ポロンナルワ17、ハバラナ4、キャンディ3、ゴール4、その他2であるが、実際には他地域の親戚・知人の家で家庭拠点法座を実施する場合もあって、地域を超えて展開しているという。これは導きの系統を重視するもので、これまでのような地域にしばられるものではない。

家庭拠点にしてから、次のような変化がみられた。第一に、家庭拠点法座は会員同士が集まるのではなく、未会員を誘うということになっており、それをとおして新しく入会する人が出てきた。また、これまでは額装本尊を祀り込む人は少なかったが、家庭拠点法座を行うようになってから安置したいという人が出てきたので、3回以上家庭拠点法座に参加し、導きの親が責任をもって手どりすることを条件に、導きの親が申請用紙を出し、額装本尊を勧請し、正式な会員にするということになった。これまで会員の登録管理があいまいだったが、はっきりとし、また誰が誰を導いたのかという導きの系統もはっきりした。第二に、これまで拠点があった地域ばかりでなく、別のところにも布教線が伸

びていった。第三に、割り当てではなく自らの請願によって家庭拠点長になるシステムにより、自覚を促し、導きや手どりをするようになり、会員の育成につながった。

#### (4) 新教会道場の入仏落慶と今後の展開

2017年6月4日に、庭野光祥次代会長の臨席のもと、新道場の入仏落慶式が行われた。式典には宗教者や識者の来賓と、会員ら375人が参集した。落慶式では、7人の上座仏教の僧侶とともに参集者がパーリ語の経典を読誦する中、次代会長によって「御本尊除幕の儀」が行われた。現地の会員はもとより教会長も上座仏教の正装である白服を着て参列した。また、本尊像の現地勸請式もおこなわれた。これまでは賃借していた教会道場だったが、自前で、ずっと大きな敷地と建物となり、そして何よりもスリランカの会員の念願だった大きな本尊像が安置された<sup>(46)</sup>。

同年10月4日の「開祖さま入寂会」において、上座仏教僧侶12人に教会道場に来てもらい、徹夜ピリットと僧侶へのダーナ(布施)を行った。入寂会でのピリットは毎年行っていたが、例年は夕方から夜半までの3時間あまりの時分ピリットで、翌朝、朝食の布施を僧侶に対して行っていたが、今回は自分たちの道場ができたので、会員がより力を入れたのである。この準備はパーシー支部長が中心になって行った。新道場を包括する地域の寺への依頼と僧侶への交渉、一般参拝者(近隣の人々)と会員への夕食の賄業者の手配、食材購入、ピリット儀礼のためのマンダパヤ(仮堂)設置業者の手配、太鼓と笛の手配を行った。会員の側(コロンボ以外の地方も含む)は、近隣の未会員への働きかけや財施で協力した。財施は基本的に物を布施する方式で、僧侶の日用品一式、食材、僧侶への朝食(調理したもの)などで、各々の役割に責任者を決めて実施した。

以下、写真を参照しながら、徹夜ピリットの手順について説明することにする。

スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相



写真86 舍利容器とピリット書を寺から運ぶ



写真89 ピリットの朗読を白服を着て合掌して聞く



写真87 僧侶の入場



写真90 僧侶への朝食の布施



写真88 マンダパヤ



写真91 僧侶への八資具の布施

開祖入寂会 徹夜ピリット(2017年10月, スリランカ教会提供)

午後9時過ぎ、会員や近所の人たちの出迎えの中、仏陀の齒(レプリカ)が入った舍利容器を教会長が頭に乘せて寺から運ぶ。上座仏教の經典であるピリット書も同様に俗人の頭の上に布を敷いて乗せられて、その上に天蓋を周囲の人が差し掛け、太鼓の音に合わせて道場に向かう(写真86)。その後から、団扇をもった僧侶12人が、修行の位の高い順に並んで入場して来る(写真87)。教会道場の宝前の前につくられたマンダパヤはペーパークラフトで作られ、その内外はさまざまな草木で飾られている。またイルミネーションもつけられている。このようにして特別な聖地が作り上げられ、入場してきた12人の僧侶が全員その中に入る(写真88)。道場内に約100人の会員・未会員が白服で着座しピリットの朗誦が始まる(写真89)。深夜12時までは12人の僧侶が行っていたが、その後は交代で2人の僧侶が途切れなく朗誦する。パワーを持つピリットを読み上げる時、僧侶はピリット・ヌルという呪護糸を片手に握りながら読経する。マンダパヤ内の仏陀の聖遺物の入った舍利容器に結びつけられ、長く延ばされたその糸は、外にいる人たちの手にも渡る。参加者は、そのパワーを頂きながら仏陀の言葉であるピリットの中に身を置いて一晩を過ごす。そして、このピリットでの功德を開祖に捧げるといふものである。また儀礼に参加し、ありがたい經典を聞くことで、参加者にも仏陀の徳がもたらされ、功德積みが行われ、来世へのより良き再生が可能になると信じられている。明け方6時過ぎ、全ての読経が終わると、僧侶は一度、寺院に引き上げる。そして、改めて、全僧侶を招き、朝食の布施をする(写真90)。食事の布施が終わると、各僧侶に八資具(アタピカラ)とよばれる僧侶の生活用品8品目を布施する(写真91)。一連の贈り物が手渡されると、ひとりの僧侶が参加者に布施の功德やその由来などについての説教を行い、終わりとなる。

徹夜ピリットはスリランカ教会始まって以来のことだが、上座仏教の信仰を続けつつ、佼成会の生活実践仏教を行うのがスリランカ教会というスタンスを象徴する出来事である。また、それは地域社会においても、上座仏教と友好的な

関係の樹立への志向を示すものであり、新教会道場の位置する地域社会で受け入れられるという意味でも重要な出来事であったと思われる。

新しい自前の教会道場ができたことで、スリランカ教会は、まさに新しい段階に入った。今後は独立採算制が求められる。これまであまり説かれなかった布施や会費の納入についても、信者としての自覚を喚起する中で説かれていくだろう。家庭拠点法座では、コロンボで集まって家庭拠点長の研修を行っており、それに加えて、これまでは教会長や支部長が家庭拠点法座に足を運んで、法座のやり方を見せてきた。しかし、今後は各自が家庭拠点長としての自覚をもって、自立した法座主となり、人々の悩み苦しみに対応して「救い救われ」を感じられる法座が求められていくだろう。上座仏教との棲み分けの中で、法華経をもとにした生活実践仏教としての佼成会の力量が問われることになる。

山本教会長はすでに65歳の定年を過ぎ、特別に再雇用されている状況にある。教会長が替わるのもそれほど遠いことではないと思われる。スリランカにおいては南アジアの他の国に比べて、上座仏教とのかかわりは極めて重要であり、佼成会側もあまり違和感をもたせないように、上座仏教の要素を取り入れてきた。先述したように、上座仏教の信仰と佼成会の信仰を共存させつつの布教であり、生活実践仏教としての佼成会という位置づけが明らかにされた。次期の教会長がスリランカ人になるのか、日本人が派遣されるのか分からないが、上座仏教の中に埋没せず、しかし孤立せず、独自性を保ちつつやっていく異文化布教の課題が問われている。

#### 注

- (1) スリランカの歴史の記述については、澁谷1993、澁谷2011、中村2012、インターネット上の外務省基礎情報を参照した。
- (2) 上座仏教についての叙述に関しては、足立1993、杉本2013、鈴木1996、田辺1993、パリ語仏教文化学会2016、矢野2012を参考にした。
- (3) 僧侶には二形態あり、森林住僧と村落住僧がいる。
- (4) 八戒は仏教で在家の男女が一日だけ守る戒。出家生活の清浄を体験するために設

けられたものであり、一日戒ともいわれる。不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の五戒に、装身具・化粧をやめ歌舞を視聴しない、高く広い寝台に寝ない、昼食以後食事をしない、の三戒を加える。五戒は通常においても、在家の人々も守るものとされている。

- (5) ピリットについては、鈴木1996:118-140参照。なお「おわりに」で言及する佼成会の新教会道場での「開祖さま入寂会」での徹夜ピリットの具体的なやり方については、同書122-128頁が参考になる。
- (6) 展開過程についての記述は、山本教会長が作成した年表、山本教会長、教会長夫人でスタッフの山本佳代子さん、学林の海外修養生コース(2003~2005年)を卒業し、2007年から教会でスタッフになった、日本語に堪能なル克蘭チさんからの聞き取り、およびガミニさんからの聞き取りによって構成されている。また第4章で扱う個別事例の中でも具体的な様子が触れている。また、ゴールについては調布教会でゴール布教に携わった人々からの聞き取りと記録資料も参考にした。
- (7) 海外修養生は佼成会の幹部養成機関である学林で、約2年間の寮生活を送るが、1年目は日本語学校への通学、2年目は佼成会の教義・実践を学習するプログラムである。そのうちの何人かはスタッフとなったが、海外修養生は日本語とシンハラ語をつなぐ役割としても重要であった。2000年から2016年までの間に17人が海外修養生となった。
- (8) 帰国した海外修養生によって始められた。青年層は、この日本語クラスの受講がきっかけになり、入会する人もあらわれた。
- (9) ガミニさんからの聞き取りによると以下のとおりである。ガミニさんの中古冷蔵庫の販売は、地球温暖化との関係で冷媒等に用いられていたフロンガスの問題が出て、廃業することになった。経済的に困り、日本で稼いだ資金で建てた自宅の三階建てのビルを佼成会に買ってほしいと依頼したが、それはだめだった。ビルを売却したため道場が2004年にはガミニさんの家から移転し、道場賃貸料として月額300ドルが支払われるようになった。2007年からはサポートマネーとして毎月500ドルがガミニさんに支払われたが、2013年に本部は支給停止を決定、実際には2014年12月末で打ち切りになった。  
なお、2013年からガミニさんはサガミ旅行社を経営している。
- (10) 「一食を捧げる運動」は、一食を抜いた食事代をさまざまな平和活動に役立てようとするもので、佼成会では1974年から青年部の活動として取り組んできた。1980年には教団全体としての活動として位置づけられ、それは立正佼成会一食平和基金として、開発、人権、難民、福祉、環境、紛争、災害、人材育成、国際理解などの分野に用いられ、支援先もほぼ全世界を網羅している。
- (11) 山本芳久(佼成会の選名は宜亮)教会長は、1949年生まれで、佼成会の幹部養成機

## スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相

関の学林を卒業後、本部の青年本部で6年、ハワイ教会長を10年、本部の教育部研修課で1年、鳥取教会長を4年、教務部海外布教課で2年、松戸教会長を7年、宮田教会長を1年歴任後、スリランカ教会長になった。

教会長夫人の佳代子さんは、1958年生まれで、1977年に国際協力事業団(JICA、現国際協力機構)に入職し、経理部会計課、人事部職員課で8年勤務した。その後実父経営の有限会社に15年勤務した後、2000年佼成会の青年本部に1年勤めた。佳代子さんは佼成会では期待されていた人材であったが、山本教会長との結婚で、青年本部を離れた。佳代子さんの英語能力の高さは、国際協力事業団での経験がプラスに働いているのではないかと推測される。

- (12) 山本教会長とガミニさんとの関係は初めから悪かったわけではない。山本教会長が松戸教会の教会長の時(2001-2008年)には、青年がバザーをして年間30万円を送り、スリランカを支援した。はじめは兄弟のようだとガミニさんは言っていたが、山本教会長は信仰をやりたい、しかし、ガミニさんはそうではなかったという。山本教会長に対するバッシングはすごく、フェイスブックにも悪口を書いていたとのことである。
- (13) 法人格取得に貢献したデルゴダさんの4章事例3に、その間の事情が言及されている。
- (14) バンコクには宿泊施設をもつ南アジアの研修センターが、バンコク教会と同じ敷地にある。
- (15) スリランカ教会側の話としては、法座所はずっと閉めていて、教会長などが行く時に開けて掃除をしていた。また水が出しっぱなしで水道料金が膨大な金額になるなど、管理の面で問題があったとのことである。
- (16) 日本語学校にスリランカの青年をよんで、就学ビザをもらって単位をおとさない程度に働かせる。青年たちに借金を負わせていた。ビザをとってあげるので、日本で働いて借金を返しなさいというパターンだった。
- (17) 調布教会の3人は、旅費についてもラリーさんがピンハネしていたのではないかと金銭疑惑をもっている。
- (18) 日本行きのビザを取るのが大変だったので佼成会を利用したと、ゴール布教に取り組んだ調布教会の3人の女性は思っている。  
また、ラリーさんについては信仰3割ビジネス7割とみており、3人とも騙されたという失望感をもっていることが、インタビューしていても感じられた。なお、3人は十数回スリランカを訪問しているが、これは自費であるとのことである。
- (19) ラジャーさんは、もともとは公務員(漁師の網を担当)で、ラリーさんとは友人関係にあった。ラリーさんは千葉県船橋市にある日本語学校の副校長をしていて、そこにスリランカの青年を送り込んでいたが、それをスリランカ側で助けたのがラ

## スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相

ジャーさんである。ラジャーさんは、2013年に本部で本尊を拝受したが、翌2014年に日本に団参に行った時に失踪した。ラリーさんとの間の金銭問題があり、借金苦になり、逃亡したとのことである。

- (20) ラリーさんの不祥事は新聞にも掲載された。「日本語学校に留学させるためスリランカ人のビザの不正取得を図ったとして、静岡中央署と国際捜査課は、スリランカ国籍で千葉県船橋市の日本語学校元副校長ラリー被告(東京都府中市)を有印私文書偽造で静岡地検に追送検した。これに先立つ同年2月にも、スリランカ人女性と静岡市の男との偽装結婚を仲介した容疑で、逮捕・起訴され公判中だった。」(毎日新聞2011年5月1日付)ラリーさんはスリランカに強制送還になり、コロンボに住んでいる。妻子もコロンボにいる。
- (21) コロンボでは、ポヤデーに来てもらった僧侶へは、1人100ルピーで30人分とする3000ルピー程度をお布施する。ポヤデーを担当する2つの家庭拠点法座の人で近隣の僧侶など探して依頼するとのことであった。
- (22) 教会長はスリランカでは布施はあまり説かない。ハワイや日本で教会長だった時は布施を説いた。スリランカではあまり布施をいうと上座仏教と競合してしまうと述べている。
- (23) 2016年には新教会道場建設地の近くの寺から文房具の配布があるので、支援してほしいという要望があり、対応した。
- (24) ル克蘭チさんのように日本語クラスがきっかけになり、佼成会に入会する場合もある。
- (25) キャンディにおいても2人からの聞き取りを行っている。キャンディは仏歯寺があるスリランカ上座仏教の聖地であり、なかなか佼成会の布教は難しい。家庭拠点長もいるが、法座所(道場)もすでに閉めてあり、紙幅の関係もあり、事例としてはとりあげないことにした。

ガミニさんからも聞き取りを行ったが、布教の展開のところで必要な部分はとりあげることにした。

- (26) パーシーさんは、「星をみることはまあまあできる。今も悩み苦しみがある時に、星をみてほしいと頼まれる。問題がある時に星をみる。精神的にどのように変えたらよいかということも伝える」と述べている。
- (27) ル克蘭チさんによると、家柄もよく、デルゴダさんの夫もサー(Sir)を付けて呼ばれていたという。キャンディにあるデルゴダさんの生家を訪ねたが、立派な家だった。夫とは家でも英語で話しており、シンハラ語が上達したのは佼成会に入会してからである。英語教育については年齢的なものもあるが、中産階級以上は英語を使用していた。

教会長夫人の山本佳代子さんは、デルゴダさんについて、一本気で曲がったこと

が嫌い、会計についてもキチンとやり、公私混同や不正経理は一切なかったと評す。教会長は、法人登録を取るときに一步も引かないデルゴダさんの姿をみて「鉄の女」と評していた。ルクランチさんは、「すごくやさしく、自分のものをお布施できる。やることを責任もってやる。相手がやってくれるとは思っていない。誰か支えてくれなくても自分でやる。お金は大事にして節約する。嘘をついたり、ものを盗むことはしない。デルゴダさんの性格は、佼成会に入ったからそうなったというのではなく、もともとそうだったと思う」と述べている。

- (28) 法人登録のためのデルゴダさんの交渉は、一步もひかず、正攻法で、一切ワイロは出していないという。複数の人から、デルゴダさんの功績を多とする言葉が聞かれた。ローカル NGO を取得しない場合、長期滞在のビザの発給、コロombo以外の国内拠点を包括出来ないなど現地の活動に支障が出る。
- (29) スリランカを訪問した時、マーリーさんは8月23日に交通事故にあって入院中だった。家庭教育の中心人物でもあり、ぜひお話を伺いたいと思っていた。事故にあってからまだ16日しかたっていなかったが、入院中だったマーリーさんに病院でインタビューをすることができた。病院はなかなか大きく、マーリーさんは広い病室の中に足をつって寝ていた。病院に外国人が入りインタビューすることについての病院との交渉は、通訳してくれたスタッフのルクランチさんのご尽力があった。マーリーさんは思ったよりも元気そうで、いろいろ質問に答えてくれた。マーリーさんは教会長の指導によって、その理解の仕方はむしろ日本的で、とくに先祖供養についての考え方は特別なような感じがした。また、その後、キャンディのアーユルベダの治療院に移動したが、そこも訪ねた。

マーリーさんは、事故前から決まっていた2016年11月の日本の大聖堂での説法に出ることは危ぶまれたが、車いす姿ではあったが、スリランカから行って無事務めを果たした。

- (30) スマトラ沖地震はスリランカの湾岸地方を襲い、3万人以上の死者を出し、8万世帯が家を喪失、20万世帯が被災した。
- (31) 山本教会長はシャンティさんをポロンナルワの拠点責任者という言い方をしていた。家庭拠点法座が始まる以前は拠点長という呼称だった。地域の拠点長を廃止し、パーシー支部長のもとに家庭拠点長を置き、関係をフラットにするために、責任者という言い方をしたように思われる。

古参会員のハリソンさんも、金銭問題で会計の役をするリーダーをおりてもらったという。

- (32) 2016年9月11日の道場(法座所)での日曜日の集まり(教会長も出席)を参与観察したが、参加者は男性7人、女性8人の計15人で、そのうち学校の教員は5人(男性)、幼稚園の教員は2人(女性)だった。その中には2013年に入会した校長もおり、その関係で

その時が初見の学校の教員の人も来ていた。校長によると「人生を良くするための仏教団体で、バンコクや日本にも行けるのでぜひ来てみてください」というように導きをすと言っていた。また、新しい人は日本やバンコク行きに関する質問をしていた。バンコクでのセミナー参加に希望を出したが、その人選からはずれてやめる人もいるとのことであった。日本やバンコクに行ったあと、来なくなる人もいるということであった。日本やバンコク行きが魅力であるのは、ある程度経済力をもつ人々であること、佼成会の宿泊施設があるので金銭的に安く行けること、そして、ビザがおりやすいことである。こうした日本やバンコク行きの魅力は、リーダーが人選に影響を与えることがあり、その点がシャンティさんのつぶやきと関連しているのではないと思われる。このような権益を排除するために、いったん地域の道場を廃し、家庭拠点法座の取り組みがなされているということもある。

- (33) ポロンナルワでは、2016年末に教会が道場の賃貸費を出さなくなって以降、2017年時点では、現地会員が費用を出し合って賃貸している。家庭拠点法座は各家庭拠点長が開催する場所で行っている。
- (34) ダヤさんの自宅を訪問した時に、バンコクでの法華経講座の資料を準備して見せてくれた。法華経講座はダヤさんにとって大きな学びになったようだ。また、ダヤさんは開祖自伝のシンハラ語訳を読んでいる。
- (35) ポロンナルワの場合、日本やバンコク行きに関して自分の影響力を行使しようとする古参のリーダー、そして、信仰からではなく、日本に行きたい、バンコクに行きたいという入会動機の人がいて、ダヤさんのような人は道場に行きたくないという雰囲気があるのではないか。ポロンナルワの道場のあり方に対する批判には、こうした講座の参加者が学んだことを、ほかの人へ還元することが行われていないことへの不満がある。ごく新しい入会者の中に信仰に取り組みたいという動きが出てきたことは、新たな段階になってきたことが予感され、しがらみがない家庭拠点法座システムが有効になっていると思われる。
- (36) 拠点設置については当時南アジア教会長だった斎藤さんの意向によるところが多い。なおハバラナの法座所は2017年現在は無料で提供しているが、いずれ閉める意向であるという。
- (37) 通訳をしてくれたルクランチさんにインタビューのあとで確認すると、ハバラナの人々は先祖供養について、このように思っているようだとのことである。事例11のサガリカさんの例でも先祖供養をやっている。貧困な農村地帯ということもあるのかもしれないが、この地域の人々は信心深いように思われた。
- (38) ルクランチさんによると、ハバラナへの支援物資の配布は2011年の洪水の被害の時からであり、それ以前には支援物資を配布するというはなかったとのことである。

- (39) 地域開発銀行は、村の人々の生活水準を上げることを目的としているもので、農村部の貧困層を対象として事業資金を融資していることから「貧者の銀行」とも呼ばれる。マイクロクレジットは貧困層、特に女性を対象とした無担保融資を前提としており、村の女性たちの小規模な産業を育成し、生活の質の向上を促す活動である。バングラデシュのグラミン銀行のようなものであると思われる。ハバラナのスワルナパーリさんの事例の中に出てきたものも、同様のものと推察できる。
- (40) 調布教会の教務部長の中野さんの話によると、その費用は調布教会が負担したとのことである。
- (41) ここでは触れなかったが、青年層では無料日本語クラスがきっかけで入会した人もいる。その中の何人かは学林の海外修養生になった。
- (42) 山本教会長は、松戸教会長だった時代に、商売がうまくいかなくなって生活が苦しくなっていたガミニさんに、青年部がバザーをやり、その収益金30万円を毎年送っていた時期がある。関係がもともと悪かったわけではない。ガミニさんも山本教会長のことを個人的にはいい人、と筆者に述べていた。赴任2年目以降、山本教会長の求めるもの(信仰としての救済)とガミニさんが求めるもの(ビジネスとしての佼成会)の違いがはっきりし、また、特に2013年に「立正佼成ダルマ財団」という法人格を取って以後、すでに失効はしていたが、ガミニさんは、自分のほうは「立正佼成会スリランカ」の法人格だとして、より対立は深まった。
- (43) ガミニさんも最初には教えに対する純粋な心を持っていたのかもしれないが、これは途上国には顕著にみられるものだが、既得権益ビジネス風になってしまったように思われる。しかしながら、ガミニさんが導いた人が現在スリランカ教会の中樞を担っているので、ガミニさんは布教においては貢献があった。
- (44) 日本の教会においては、教会長の配偶者は前面に出ないという暗黙の規制があるように思われる。海外においても、これまで見た限りではその傾向がある。スリランカの場合、2016年9月に調査で訪問した時には、教会長、同年2月からスタッフとなったパーシーさん(支部長)、海外修養生経験があり、日本語とシンハラ語の両方ができるルクランチさん(2016年12月より結婚のため日本の本部で働く)、海外修養生で帰国後1年間は奉仕活動をするようになってパッシンドウさん(男)がいた。スリランカ教会では、佳代子さんが奥様然としていて何もしなければ、今日のスリランカ教会はなかったと思われる。
- (45) 家賃自体は、コロomboでは9万円、他の拠点では2~3万円で、日本の団体だからということで高かったという。また、キックバックする人もいた。日本に行かしてやるというので、お金をとる拠点長がいた。利権争いになっているので、拠点を閉めることにしたという。
- (46) 本部からは土地代金として1500万円、建物建築費用として2300万円が支給された。

それに日本人を含めた現地での布施や貯金があてられた。

### 参考文献

- 足立明 1993 「シンハラ農村と仏教——JVP反乱の後で——」, 田辺繁治編『実践宗教の人類学——上座部仏教の世界——』京都大学学術出版会, 327-354。
- カランテ・カンカナム・マーリ・アルウイリス 2017 「私の中の仏さま」 *Living the Lotus* Vol.142, 2017年7月号, 4-7 (2016年11月, 本部大聖堂布薩の日命日での説法)。
- 杉本良男・高桑史子・鈴木晋介 2013 『スリランカを知るための58章』明石書店。
- 杉本良男 2013 「神々と仏」, 杉本良男・高桑史子・鈴木晋介『スリランカを知るための58章』明石書店, 164-188。
- 澁谷利雄 1993 「スリランカの仏教とナショナリズム」, 田辺繁治編『実践宗教の人類学——上座部仏教の世界』京都大学学術出版会。
- 澁谷利雄 2011 「スリランカの民族問題とNGO活動」, 鈴木正崇編『南アジアの文化と社会を読み解く』慶應義塾大学出版会。
- 鈴木正崇 1996 『スリランカの宗教と社会』春秋社。
- スワルナ・パドゥミニ・デルゴタ(スリランカ教会), 「『まず人さま』で気づいた絶対の真理」『やくしん』2013年5月号, 21-22。
- 田辺繁治 1993 「序章 実践宗教の人類学——上座部仏教の世界——」, 田辺繁治編『実践宗教の人類学——上座部仏教の世界』京都大学学術出版会, 3-32。
- 中村尚司 2012 「スリランカ」, 辛島昇他監修『新版 南アジアを知る事典』平凡社, 911-921。
- パリー学仏教文化学会・上座仏教事典編集委員会編 2016 『上座仏教事典』めこん。
- マンツリー・ピーラセケラ 2014, 「恨みから感謝の心へ」 *Living the Lotus* Vol.110, 2017年7月号, 6-8. (2014年8月にスリランカ教会で行われたポヤデーの式典で発表したもの)
- 矢野秀武 2012 「上座仏教」, 世界宗教百科事典編集委員会編『世界宗教百科事典』丸善出版, 84-87。
- やくしん編集部 「輝く! 笑顔 光の島のサンガ スリランカ教会 前編」『やくしん』2013年5月号, 72-77。
- やくしん編集部 「輝く! 笑顔 光の島のサンガ スリランカ教会 後編」『やくしん』2013年6月号, 4-7。
- ルクランチ, パリバナ 2016 「世界布教NOW 国際奉職員が語る世界布教の展望」(佼成会国際伝道部主催の海外教会長会議でのパワーポイントを使用しての報告の発表原稿)

## 謝辞

スリランカでの現地調査は、2016年9月6日～17日の日程で行った。

立正佼成会スリランカ教会の山本芳久教会長、夫人でありスタッフの山本佳代子さんには、調査のアレンジや聞き取り、写真その他の資料提供で大変お世話になった。そして、聞き取り調査が円滑にできたのは、優秀な通訳者であるスリランカ教会のスタッフ(現在は本部国際伝道部スタッフ)のルクランチ・ニサンサラ・パリパナさんのおかげである。そして、スリランカ教会の多くの方々に、長時間にわたる聞き取り調査に応じていただいたことにも感謝したい。

また、調布教会のゴール布教に関しては、調布教会教務部長の中野妙子さん、多摩支部主任の大竹淑子さん、飛田給支部会計の後藤房子さん、そして、それを仲介して下さった茨城支教会長(水戸教会長)矢部光男さんからお話を伺うことができた。資料提供では、立正佼成会国際伝道部にご協力いただいた。多くの方々のご協力に深く感謝申し上げる次第である。

本稿は、明治学院大学社会学部附属研究所2016年度一般プロジェクト、研究代表者渡辺雅子「南アジアにおける立正佼成会の展開」による研究成果の一部である。